
著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ(UNKNOWN)
月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
～白銀のカリアティード～ I
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～Ｉ

Ｊ□さいろー

原作　ニトロプラス

イラスト　大崎シンヤ（UNKNOWN）


月光のカルネヴァーレ
CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
～白銀のカリアティード～
I
著 J・さいろー
原作 ニトロプラス
イラスト 大崎シンヤ(UNKNOWN)

CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
cariatide di argento Ⅰ

INDICE


フォーラ
緑柱石の瞳石を持つ、双子の自動機械人形の妹。
ノヴェラ
緑柱石の瞳石を持つ、
双子の自動機械人形の兄。
アレッシオ
南部出身の黒髪ギャング。
子供ギャング“弾丸”のお守り役。
ペルラ
フォーラを監視する謎の
自動機械人形。


ファビオ
ペトルチアーニ
通称、仮面の男。
ベルモントの裏社会を支配する
謎の富豪。アレッシオのボス。
ルーカ
カルメロ
シルヴィオの手下。
シルヴィオ
誇り高き犯罪組織、
オルマ・ロッサの副頭領。
フランチェスコ
はぐれ者の人狼。
愛用の武器は鋼鉄の鉈。
ニコロ
リッカルド
リタ
弾丸
ペトルチアーニがベルモントの
孤児たちを集めて作った子供ギャング。

目次

カリアティード　【伊】cariatide

イオニアの反乱でカリュアエの町が征服され、町の女たちは奴隷となり苦役を課せられた。その故事にちなみ、女性像の刻まれた柱のことを、重荷を支える女『カリアティード』と呼ぶ。

prologue

　お話しするのは、私の受け持ちの患者のことです。

　私はいま、彼らに電極を刺すのを手伝ったり、粗相してしまったものを片付けたりする仕事をしています。栄養管理も私の仕事ですが、そちらはあまり得意ではありません。私自身が肥満しているような有様ありさまですから。

　サムは、これまで何度も転院を繰り返した患者で、私が勤める片田舎かたいなかの病院では手に余るというのが実際のところでした。なぜ彼がこの病院に来たのかは分かりません。バーに弾かれたピンボールの玉が、機械の窪くぼみにはまってしまったようなものだと思います。

　サムは今日も騒いでいます。

「さあ、お話の時間だぞ。聞いてよ、いまから話すぞ。早くこっちに来て、お話の時間だぞ」

　普段は大人しいのに、電気の治療をするとサムはかならずこうなるのです。鳴き止まない犬のように騒ぎます。

　私は黒インクのべっとり付いた指を拭ふいて、彼らの食事の支度したくをします。

「はいはい、あとで聞かせてね。いまはお食事が先よ、ごはんの時間なの」

「ありがとう。じゃあ、ごはんが終わったらお話の時間」

「はいはい、あとで聞かせてね」

「お話の時間はごはんのあと」

　サムの癖は親指サムを立てることです。私の用意した、ジャムクロワッサンとミルクの朝食に手を伸ばします。毎朝同じメニューですが、彼は文句を言わずに食べてくれます。

　病室の床を見ると、埃ほこりがずいぶんと溜まっています。清掃夫が怠なまけているのです。床に落ちたクロワッサンを食べたら、うるさいサムもお腹を壊して大人しくなるかもしれません。

「聞いてよ、お話の時間だぞ」

　さっき私の言ったことをもう忘れたサムは、隣のベッドのエリーに

声をかけます。

　エリーはクロワッサンをちぎって投げています。こうしていると、両親が食べにくるというのです。彼女もまた、朝食に文句をつけない優良な患者です。

　サムとエリーは、仲良く一緒に病院に送られてきました。

　エリーは自分の家を燃やしてしまいました。

　サムは自分のことを忘れてしまいました。

　きっと、魂が壊れてしまったのでしょう。

　二人が生きている理由が、私には分かりません。

　二人が生かされている理由は、よく分かります。

「今日はエリーとお話してちょうだいね」

　私が声をかけると、ベッドにあぐらをかいたサムは、ぴょんぴょん飛び跳ねて嬉しそうにします。電気を流したあとはこんな調子ですが、仕方がありません。電気一回でいくら、注射一本でいくら、という塩梅あんばいで病院にお金が入ります。彼らは大切な患者です。

「それじゃあ、お話の時間だぞ。おとぎ話の時間だぞ」

　サムのうきうきと弾んだ声が聞こえます。エリーはサムを見ていません。

　それでもサムは、今日も異国の話を始めます。

　聞いたこともない町の御伽噺おとぎばなしです。

　その町では人形が命を持っていて、人と同じように暮らしているのです。

　私は病室の鉄格子に鍵かぎをかけます。早く寝たいのですが、交代までまだ八時間もあります。

　職員部屋に戻った私は、地球儀ちきゆうぎを回します。どこを探しても、サムの話すベルモントなんていう町はありません。くるくると勢いをつけて回します。色の付いたボールが回転します。私は黒インクに浸した人差し指で、地球儀を止めました。

　指のあとが黒く残ります。今日、ここに爆弾が落ちたのです。新型の爆弾なので、黒い指紋しもんのついたところは誰一人助かりませ

ん。もちろん私は彼らのように頭がおかしいわけではありませんから、これは想像です。そういう遊びを、誰でも独りのときはするでしょう。

　今日は北京ペキンが黒くなりました。まだワシントンに当てたことはありませんが、そのうちあの町もなくなるでしょう。ベルモントという町はどこにあるのでしょうか。

　私は思うのです。人差し指の爆弾がベルモントを消し去ったとき、サムの症状は回復するのではないかと。

　病室からサムの声が聞こえます。

　私もエリーも聞かない御伽話を、サムの声が歌うように。

　人形が魂たましいを持ち、闇夜に狼の鳴き声が谺こだまする、ベルモントの物語を。


CARNEVALE DELLA LUCE DELLA LUNA
cariatide di argento 1
人形と弾丸

i

ショーケースに入った人形を描くように言われて、俺はまずケースの枠わくを描いてしまった。これでは人形の大きさが制限されてしまう。

子供の頃の話だ。今でも、どうして人形から描かなかったのかと思うことがある。

零時五分前、月は街灯のない山道を照らしている。

闇夜に浮かび上がるのは砂利道とベルモントの夜景だけだ。道の周りには雑ぞう木き林ばやしが広がり、茂みの中はどんなに目を凝こらしても漆しつ黒こくの世界だ。

光を糧かてに生きる植物たちが寄り添い、その中に闇が生まれる。

闇を敵とみなすか、味方とみなすか。

それは魂たましいの本質への問いかけだ。

アレッシオはいま、闇の中に潜ひそんでいる――。

零時三十分、ミラーには無数の灯あかりが映り込んでいる。

日をまたいでも、丘きゆう陵りよう地ちから見下ろしたベルモントの夜景は、御お伽とぎの国の呼び名にふさわしく煌きら々きらと広がっている。そいつを眺めながら胸の拳銃を抜き、また戻す。すでに肉体は修しゆ羅ら場ばの気配を察している。それが神経の隅すみ々ずみまで行き渡るには、あと少しの時間が必要だ。

破れたシートを起こしたアレッシオはミラーの向きを変えて髪形を整えた。硬い黒髪は南部の証あかし、浅黒い肌も同じことだ。携帯酒瓶ヒツプフラスクのキャップを開け、熱いスコッチを舌先で転がす。

御伽の国を支えているものは三つ。

人形、観光、そしてマフィア。

この世界を支えているものも三つ。

宗教、経済、そしてマフィアだ。

窓を開けると濃厚な緑の匂においが車内に入り込んでくる。ここは別荘地なのだ。金のある連中はうまい空気を吸って長生きができる。その仕組みはナポリもベルモントも変わりがなかった。

両親はシチリアで生まれ、カンパーニャに移り住んだと聞いている。しかしアレッシオは独ひとりだった。独りで人を殺し、いくつかの死線をくぐり、安い金で組織の下っ端にこき使われていた。

野望はある。今もまだ、裏社会で勝ち上がる気き概がいは失っていない。

流れてきた北部でも、引くのは貧乏くじばかりだった。いくつかの小さい組織ファミリーで仕事をしたが、血のつながりを重んじる組織はよそ者を信用しない。汚れ仕事ばかりをつかまされ、仕し舞まいにはベルモントのスラムでガキのお守りに収まった。

アレッシオはダッシュボードから写真の束を取り出した。手て垢あかのついた写真は全て今回の標的を写したもので、古い順に日付が振られていた。どれもひどい写真だ。ぱらぱらとめくるだけで、無数の毛虫が首筋を這はい上がってくるような気がしてくる。ろくでもない仕事なら山ほどこなしてきたが、今度のは極めつけに悪趣味だ。

写真の一枚目、金髪を貴族風にカールした美しい少女が写っている。少女はカメラに向かって笑みを浮かべている。

二枚目、同じ少女の、両手両足が根元から切り落とされた裸の写真。少女はカメラに向かって笑みを浮かべている。

三枚目、切り落とされたはずの手足は戻っているが、肘ひじと膝ひざから先はない。四つんばいで鎖くさりにつながれている。顎あごを支える筋肉が切られているのか、だらしなく開いた口から舌と涎よだれが垂れている。写真の隅には『アクタイオンの猟りよう犬けん』と記されている。

四枚目、手足の関節がひとつずつ足されて、自立できずに這はいつくばっている。写真の隅には『ガイアの蝎さそり』。

五枚目、両足が完全に切り離され、乳ち房ぶさのあるべき場所に細くしなやかな女の腕が生はえている。腕は脇腹と足の付け根からも生えており、仰あお向むけにされた胴体から何かを摑つかむように上へ上へと差し伸べられている。写真の隅に『ヒュドラの渇かつ仰ごう』。

六枚目、疣いぼだらけの肉のボールが転がっている。『ニュクスの卵』。

めくる手を止めた。どの写真も、吐き気のするような姿のそれが、笑顔でカメラを向いている。この化け物を強奪するのが今夜の仕事だった。

「お前の妹だと？」

「はい、フォーラです」

　助手席のノヴェラが頷うなずいた。十八世紀風に盛装して外がい套とうを羽織った少年は、銀幕から抜け出してきたような端正な面おも差ざしをしている。両目に光る緑の宝石だけが、彼が自動機械人形オートマタであることを表していた。写真の化け物は彼の妹━つまり、フォーラという名の自動機械人形オートマタだ。

「気の利きいた御伽話フオーラだな」

　吐き捨てると、ノヴェラは困ったように首をかしげた。不快な疼うずきが喉のど元もとまでこみ上げ、アレッシオは安い紙巻きに火をつけた。

　自動機械人形オートマタと、それに関わる観光事業はベルモントの基き幹かん産業だ。精せい巧こうな技術と錬れん金きん術じゆつによって生み出された自動機械人形オートマタは高価な嗜し好こう品ひんで、今や市場は世界規模に拡大している。その発はつ祥しようの地がベルモントだ。歴史ある町並みと機械人形が迎える御お伽とぎの国━夢のある宣伝文句につられてこの街を訪れる観光客は後を絶たない。しかし煌きらびやかな夜景の底では、どうしようもなく現実的で救いようのない物語が無数に生まれ、忘れ去られているものだ。

　アレッシオのなげうった写真をノヴェラの細い指が一枚一枚拾い上げ、丁てい寧ねいに束ねてゆく。自動機械人形オートマタは人のように動き、話し、考えることができる。中でもノヴェラのように宝石の瞳ひとみをもつ骨董人形アンテイークは、硝子ガラスの瞳をした電気式イミテーションと違い、失われた錬れん金きん術じゆつの秘ひ儀ぎによって生み出された人の生き写しだ。その技法が途と絶だえたいま、庶しよ民みんには決して手の届かない代しろ物ものだった。

「写真は役に立ちそうにない」

「そう思いますか」

「残念だがな、お前の妹は狂った金持ちの家をたらい回しにされて、化け物になっちまったんだ。写真の最新の日付を見ろ、もう十ヶ月前だ。今ごろは毛虫にでもアメーバにでもされているだろうよ」

　最も新しい十ヶ月前の写真には『母なるセレス』と書かれており、足のない身体のあちこちに、巨大な腫はれ物もののような乳ち房ぶさが垂れ下がっていた。これらは全て卓たく越えつした人形技師による芸術作品であり、地下の品評会にかけられたものだ。金持ちばかりの非合法クラブから、マフィアの懐ふところにどれだけの金が流れたの

だろうか。ノヴェラは束ねた写真の四隅をきっちりと揃そろえ、アレッシオに差し戻した。

「アメーバにすることは不可能です。頭と、円筒シリンダのある胴体はいじることができませんから」

「ものの喩たとえだ、ものの」

「失礼しました」

　それきりノヴェラは黙り込んだ。背筋を伸ばして微び動どうだにしない。腹に埋め込まれた円筒シリンダが自動機械人形オートマタの心臓であり、脳でもある。いくら人間と瓜うり二つであっても、彼らは精せい巧こうな人形でしかないのだ。耳をすませば、少年の体内で回転する歯車ギヤの音が聞こえてくるだろう。

　アレッシオは窓から顔を出して紫し煙えんをくゆらせた。

　高い杉が半月を二つに切り裂いている。標的となる別荘は屋根すら見えないが、この先に鉄てつ柵さくの塀へいがあり、その向こうはベルッチの私有地だ。

　古こ物ぶつ商しようのベルッチは高価な骨董人形アンテイークの取り引きで財を成し、北部の組織マフイアにも顔が利きくと噂うわさされている。郊外の別荘もそれにふさわしい豪ごう邸ていで、見取図の部屋数を勘かん定じようするだけでうんざりさせられた。

「アレッシオ！」

　ふいに茂みの中から飛び出してきたのはルーカだった。まだ子供だが、手には拳銃を握っている。アレッシオの前で荒く息をついた少年は、紫煙を吸い込んで顔をしかめた。

「どうした」

「予定通り電話線は押さえたぜ。五分後には踏み込める段取りになってる。けど、なんだかおかしいぜアレッシオ。奴ら、取り引きの真っ最中なんだ」

「人形ダツチワイフの大量発注でもあったのか」

「冗談じゃねえんだよ、見たことのある売人が何人も入ってってたんだ、次々とだぜ。ベルッチの野郎は麻薬ドウローガの仲買人ハスラーだったんだよ！」

　首に巻いた銃弾のネックレスが揺れる。まだ十四歳のルーカは、今日が初めての荒仕事だ。経験のなさが神経質な声に表れている。

「そんな情報は資料になかったな」

「けど見たんだよ、間違いないんだ。このまま突っ込んだら……」

「そうだな、このままってのは一番悪い。車を出してくれ」

　ルーカに車を運転させて五分で公衆電話に着いた。ボスへ電話をかける。ツーコールで執事のガエターノにつながった。

「アレッシオだ、悪いが中止する」

　一方的に伝えると、受話器の向こうで執事の声がうろたえた。

「待て、落ち着けよ、何があった」

「売人が集まっている。ベルッチが仲買人ハスラーだなんて聞いていないぞ」

「それがどうした、よその組織に狙われる心配はない。ボスが話をつけている」

「分かっていないようだから繰り返してやる。がらくた屋の別荘は麻薬ドウローガバーゲンの真っ最中だ。そして俺はそれを聞いていないと言ってるんだ！」

「我々も知らなかったんだ。おおかたベルッチの小遣い稼ぎだろう、組織は絡らんでいない」

「そんな話をしてるんじゃねえ、どうしても今晩中に化け物が欲しけりゃ銃撃戦になるってことだ。こっちは拳銃しか持ってないんだぞ、相手が小銃ぶっ放してきたらどうするつもりだ。うまくやれ？　ふざけんな。どうしてもと言うんなら、あと二百だ。俺はファミリーの兵隊じゃねえ、あんな端はした金がねで戦争をおっ始めろっていうのか？」

　別荘に銃を持った売人がいるのなら、襲撃のリスクは跳ね上がる。

　しかし、金さえ積めばあらゆる困難は乗り越えられるというのがボスの信条だった。ならば追加のギャラもしっかりといただく。

「予定外はお互い様だ。いいか、俺の条件は追加で二百、それだけだ。お前さんはしれっとした顔でボスの財布から三百引っこ抜き、いつもみたいに百を懐ふところに入れりゃいい。疑われてる？　当たり前だ詐さ欺ぎ師し野郎、それこそお前がうまくやれ！」

　もともと執事のガエターノはケチな詐欺師だった。それが調子よくボスに取り入って、今では北部の組織にも顔をつないでいる。

「神父様も言ってるだろう、献金を渋って天国に行こうなんざ虫が良すぎるってな。さあ選んでくれ。お前が報告するか、それとも俺からボスにねじ込んでやろうか」

「糞野郎ストロンツオ！」

　電話が切れた。交こう渉しようは成立だ。助手席に乗り込み、車を別荘に戻らせた。

「あと二百だって？」

「ボーイスカウト引き連れて、麻薬ドウローガまみれのピクニックとしゃれ込むんだ。二百くらいは必要経費だ」

　ルーカが口笛を吹いた。徐行しながら敷地の手前で車を茂みの中に隠す。売人どものおかげで手はず通りに運べなくなったが、トラブルは金の種になる。

　ボスからの情報によれば、アントニオ・ベルッチは五十二歳の古こ物ぶつ商しようで、家族は妻と娘が一人ずつ。使用人は五人、うち二人は家政婦で三人が護衛だ。

　その別荘を襲って、フォーラという化け物を奪ってくる。それだけの仕事だった。ボスが化け物を譲ゆずるように交こう渉しようしても、ベルッチは相手にしなかった。マフィアの流りゆう儀ぎにのっとるのなら、見せしめに銃弾を撃ち込まれても仕方のないところだ。骨こつ董とう屋やの不敵な態度は、北部の組織という後うしろ盾だてからきているのだろう。

「妹君は、ずいぶん良心的な骨董屋に見み初そめられたようだな」

　後部座席に移ったノヴェラが困ったような顔をする。ルーカはそんなノヴェラを、足手まといと言いたげに親指で差した。

「この淫売プツターノも連れて行くのかい？」

　ノヴェラの端正な顔立ちと派は手でな衣装は、男だん娼しようのそれと変わりがない。悪あく態たいには慣れているのか、自動機械人形オートマタの少年は黙って化け物の写真を見つめている。

「この坊主は必要だ。ノヴェラがいないと目標が本物なのか確認ができない」

　人間と瓜うり二つの自動機械人形オートマタを見分けるには、瞳を覗のぞき込めばいい。硝子ガラスや宝石の瞳をしていれば人形だ。しかし相手は骨董人形アンティークの古物商だ。館にいる化け物が、

フォーラー匹とは限らない。目印は緑柱石アクアマリーナの瞳石ジエンマだと言われても、アレッシオに宝石の識しき別べつ眼がんはない。ボスがノヴェラをよこしてきたのには、そういう事情があった。

「売人は何人だ？」

「分かんない、けど十人はいたぜ」

「予定変更だな。このまま待機して、できるなら売人を全てやり過ごす。ガキどもには物音を立てるなと言っておけ」

「いつまで」

「三時だ。夜の明ける二時間前には動き出さないと具合が悪い」

　頷うなずいたルーカが茂みの闇へと姿を消した。

　この手の押し込みは何度も経験している。今回は指し揮き権けんも与えられた。ところが肝かん心じんの兵隊ときたらガキばかりだ。久しぶりの大仕事を前にしてアレッシオは苛いら立だっていた。

　腕時計の針が一時を回った。後部座席のノヴェラは黙っている。歯車の音が聞こえてきそうで、アレッシオは再び窓を開けた。

　湿った夜気が車を包み込んでいる。梢こずえの鳴る音と虫の囀さえずりを聞きながら、新しい紙巻きに火をつけた。

　窓の外には宝石箱の夜景が広がっている。

　この町は美しい。

　そう見ることのできる連中の目には。

　二時五十分、芝しば生ふの向こうに別荘の尖とがった屋根が黒く浮かんでいる。ノヴェラを連れてベルッチの敷地に足を踏み入れた。

「離れるな、それから声を出すな」

　ノヴェラが黙って頷うなずいた。銃を抜くと自然と喉のどが鳴った。仕事の前は毎回緊張する。緊張して、感覚が猫のように研ぎ澄まされる。そうならなくなったらお仕し舞まいだ。

　十人近くの売人をやり過ごし、家の灯あかりが消えるのを待ってアレッシオは動き出した。運が良ければ、別荘にはベルッチの一家と使用人しかいないはずだ。ガエターノが電話口で抜かしたように、うまくやるに越したことはない。

　三十メートルも進んだところで、先に様子を見ていたルーカとリッカルドが駆け戻ってきた。長身で肉の引き締まっているのがルーカ、瘦やせて眼鏡めがねをかけているのがリッカルドだ。二人とも首から銃弾のネックレスを下げている。アレッシオは銃を持ち上げて合図をした。

　他にも『弾丸パロツトラ』が五人、敷地内に忍び込んでいる。彼らの仕事は電話線を切って別荘と外部との連絡を絶つことだ。

　弾丸パロツトラというのは、ルーカとリッカルドを中心にして集まった子供ばかりのグループだ。アレッシオが彼らのお守りを押し付けられて、もう半年になる。銃やナイフは使えないが、はしっこい子供はそれなりに重ちよう宝ほうした。

「大変だアレッシオ、ファビオがいる」

「誰だ？」

「新入りだよ。売人とつるんでやがったんだ、あの野郎」

　吐き捨てたルーカが芝を蹴けった。弾丸パロツトラは決して麻薬ドウローガに手を出さない、それがグループの掟おきてだった。

「熱くなるな、今は掟よりも仕事だ。売人は何人いる？」

「七人、でかいバッグを持ってるけど、そのうちの四人はファビオたちだよ」

「つまり三人だな。分かった、決行する。リッカルドはジュリエットを連れてこい」

「仰おおせのままに！」

　二本指で敬礼したリッカルドが、小走りで別荘のほうへ消えていった。今回の襲撃の段取りは、彼のアイデアをベースにしている。

　ベルッチの令れい嬢じようと街のバールで偶然出会ったリッカルドは、それからも何度か顔を合わせて親しく話せる関係になっていた。今夜は彼女をこっそり連れ出して、夜の遊びを教える約束になっている。

「あのバカ、ああいうのだけは得意なんだ」

　憎まれ口を叩たたきつつも、親友のお手て柄がらにルーカは得意そうだ。リッカルドの誘いにのこのこついてきた令嬢と引き換えに、ベルッチから化け物を譲ゆずり受ける。予定通りに進めばそれでいいし、いざというときは人質にもなる。

　できるなら、こんな回りくどい方法は取りたくなかった。まともな殺し屋の二人も手配してもらえれば、ベルッチの別荘など簡単に制圧できただろう。

　茂みの中を移動しながら目を凝こらすと、ファビオと仲間の少年たちの姿が別荘の裏手に見えた。裏口の見張りをさせられているようだが、素人しろうとのすることなので見張りというよりはただ突っ立っているだけだ。

「なあ、アレッシオ」

「なんだ」

「撃ち殺してもいいかな」

「必要ならそうしろ、無む駄だ弾だまは使うなよ」

　時計は三時を回った。夜の静寂しじまが別荘を包んでいる。足を忍ばせたルーカが後頭部に銃口を突きつけると、ファビオの背筋がぴんと反り返った。

「夜更かしだな、お前ら」

　両手を上げたファビオの喉のどから小さな悲鳴が洩もれた。一緒にいた三人の新入り弾丸パロツトラは、銃を持ったルーカの剣けん幕まくに怯おびえている。

「な、なんであんたたちが？」

「気が合うな、俺も同じことを思ってたんだ」

　ルーカが引き金を絞しぼる。「待ってくれ」ファビオの声が弱々しく震えた。撃げき鉄てつが落ちる前に銃を下ろさせたアレッシオは、待機していた弾丸パロツトラの子供たちを呼び、ファビオたちを別荘の外に連れ出させた。

「こっちが忙しいときでよかったな」

　裏切者を撃ち殺せなかったルーカが舌打ちする。

「ここでぶっ放してみろ、たちまち売人と護衛が押し寄せてくるぞ」

「分かってるよ。俺だって馬鹿じゃないんだ、こんなところで撃ったら……」

　パン！

　突然、静寂を銃声が切り裂き、ルーカが慌あわてて芝しば生ふに伏せた。

「撃ったらどうなるんだ？」

「分かんないよ、売人と護衛が押し寄せてくるんだろ」

　音がしたのは、さっきリッカルドが向かった別荘の右手側だ。いつでも撃てるように銃を構え、茂み伝いに別荘の壁までたどり着いた。音のした方向に銃を構えて待つと、照しよう星せいの向こうから、二つの人影が真っ直ぐに近づいてきた。リッカルドがよそ行きに着飾った娘の手を引いている。

「悪わりィ、見つかっちまった」

　銃声はリッカルドを狙っていたのだ。ならば撃ったのは売人ではなく護衛の誰かだろう。ルーカに背後を任せたまま、アレッシオは正面を見据えた。

「このパーティーはなんなの、リッカルド！」

　ベルッチの娘は、武装したルーカとアレッシオを見て甲かん高だかい声をあげた。まだほんの小娘のくせに胸もとの開いたドレスを着ている。

「ごめんな、これも仕事なんだ」

　リッカルドが人ひと懐なつっこい笑顔を向けると、娘はノヴェラの背後に逃げ込んだ。端正な顔立ちの自動機械人形オートマタを、自分と同じ立場の少年とでも思い込んだのだろう。はずみで真しん珠じゆのイヤリングが芝しば生ふの上に転がった。

「誘ゆう拐かいなんてしないから、安心しなよ」

　屈かがんだリッカルドが真珠を差し出すと、娘は迷いながらそれを受け取った。

「この人たちは誰なの、さっきの音って銃声じゃない？」

「親父さんの仕事相手が撃ってるんだ」

「お父様の？」

「綺き麗れいな石だな。ねだれば何でも買ってもらえるんだろ？」

　娘の首に巻かれたネックレスをルーカが指先で玩もてあそぶ。

「金の出所は骨こつ董とう品ひんじゃなくて麻薬ドウローガらしいけどね」

「嘘うそよ」

「嘘か本当か俺たちも確かめたいんだ。親父さんのところに案内してくれないかな」

　娘の声に釣られた売人が、背後の建物から姿を現したのはそのときだった。たった一人、銃を構えたルーカの真正面だ。近い。侵入者を見つけて慌あわてて銃を抜こうとしている。

　アレッシオは庭木の陰に隠れたまま、正面の警戒を続けた。「撃て」ルーカの銃口はすでに相手を捉とらえている。

「動くな！」

　ルーカが叫ぶのと、売人の銃声が同時だった。

　立て続けに四発、問答無用で撃ってきた。ベルッチの娘を庇かばってノヴェラとリッカルドが茂みに突っ伏した。さらに銃声が三回。二発はルーカの撃ったものだが、相手に当たった様子はない。

「花か壇だんを盾たてにしろ」

　舌打ちをこらえ、アレッシオは茂みの中をじりじりと進んだ。今のは牽けん制せいでなく、射殺すべき状況だった。初心者のルーカにそこまでの期待をした自分のミスだ。相手の殺意を感じるなど、どだい無理な要求なのだ。建物から別の売人の声がした。

「何があった」

「ファビオが消えた。知らねえガキが入り込んでやがる。銃を持ってるぞ」

　アレッシオが姿を見られていなければ、売人どもは相手が子供だけだと高たかをくくるだろう。案あんの定じよう、残りの売人がうかうかと姿を現した。二人、拳銃を構え、背を屈かがめて花か壇だんの死角に回ろうとしている。

　ルーカの銃声がして、出てきた二人が再び建物の陰に飛び込んだ。

「小こ僧ぞうめ、容よう赦しやしねえからな」

　パン、パン、パン──売人が花壇に向けて銃弾を撃ち込み、ルーカが応おう射しやする。アレッシオは茂みの中を売人たちの横手に移動した。下手くそめ。引きつけて撃てとあれほど教えたのに、無む駄だに

鉛なまり弾だまをばら撒まいてやがる。舌打ちした口の端が引きつり、自じ嘲ちようの笑みがこぼれた。この仕事を首尾よく果たしたところで、得られるのは当座をしのぐだけのはした銭だ。どのみち無駄弾に違いない。

　鼻で笑う。

　余計なことを考えず、茂みの向こうに意識を集中しろ。

　すぐにルーカの銃撃が止んだ。アレッシオの勘かん定じようが正しければ、弾を撃ち尽くしたのだ。ホールドオープンした銃に新しい弾だん倉そうを込め、スライドをリリースしなくてはならない。ルーカの慌あわてる様が手に取るようだ。かさにかかった売人たちが花壇めがけて走りだした。

　アレッシオは茂みの中で引き金を絞しぼった。月明かりで狙いがつけにくいが、仕事は夜と相場が決まっている。銃口が二度火を噴き、売人の頭から黒い飛沫しぶきが上がった。二人が跳ねるように転倒し、痙けい攣れんを始める。

　残った一人が慌てて回れ右をした。はじめに撃ってきた奴だ。脱だつ兎とのごとく別荘へ逃げ込もうとしている。今は建物から離れすぎたのを後悔しているだろう。

　背中から二回撃った。反動リコイルが腕から肩に伝わり、筋肉が引き締まる。一発は肩、修正した次弾は左胸に命中した。肉体が崩くずれ落ち、売人は三人とも動かなくなった。

　建物からの狙撃に備え、すぐに茂みの中を移動する。風の音ねと虫の声が戻ってきた。これだけの轟ごう音おんにも関わらず、庭に飛び出してくる奴はひとりもいない。どうやら護衛のほうが厄やっ介かいな相手のようだ。周囲に気を配りながら花壇のルーカたちと合流した。

「撃った数くらい覚えていろ」

「……すまない」

　銃を構えたルーカがうなだれた。弾を撃ち尽くすなと何度も言って聞かせたが、実戦では役に立たなかったようだ。

「よかったのかな、ぶっ殺しちまって」

「ベルッチは組織に隠れて小遣い稼ぎをしていた。売人もただのちんぴらだ」

　つまりは自分と一緒だった。アレッシオがここでぶざまに撃ち殺されても、律りち儀ぎに報復しようとする奴など誰もいない。

　ルーカは両手で銃を握りしめたまま、緊張が解けないようだ。「疲れるだけだぞ」と肩を叩いてやると、ようやく胸につかえていた重たい息を吐き出した。初仕事に勇ゆう躍やくしていたルーカだが、しばらくは眠れぬ夜が続くだろう。

「殺し屋さん」

　口を開いたのはノヴェラだった。

「彼が出血しています」

　表情のない声で、ノヴェラはリッカルドの脇腹に手を当てている。白くしなやかな手の下で、シャツがどす黒く染まっていた。

「リッカルド！」

　悲鳴を上げた娘が、自分を庇かばったはずの少年から飛び退のいた。悪気ではなく怖かったのだろう。かわりにルーカが彼の手を取る。

「すまなかった。俺のせいで」

「気にすんなよ、こいつも仕事だろ」

　シャツをめくると、銃弾は左の脇腹を貫通していた。額に汗を浮かべたリッカルドが小さく呻うめく。痛むだろうが、早めに手当てをすれば助かる傷だ。

「安心しろ、この程度なら死にはしない」

「くたばってたまるかよ」

「さっさと終わらせて戻ることにしよう。リッカルドとルーカはここで待機だ」

「分かった、今度は見たらすぐ撃つよ」

「間違えて俺を撃つなよ。さあ、ノヴェラとお嬢さんはこっちだ」

　ノヴェラが黙って立ち上がる。娘はアレッシオの手を払いのけた。

「話はこっちの人から聞いたわ。貴方あなたたちは人形を盗みに来たのでしょう。だったら人質にしても無駄よ、お父様は私よりもお人形遊びが大事だもの」

「困った親父さんだな。だったら銃口こいつで改心していただくさ」

　風が強くなってきた。物音が消されるので襲撃には好都合だ。リッカルドをルーカに任せたアレッシオはノヴェラと娘を連れて別荘の中へ足を踏み入れた。

　予定外の事態に見舞われたが、おかげで状況はシンプルになった。残る障害は護衛が三人、そいつらを退けてベルッチと交渉すればいい。半人前を引き連れて仕事をするよりも、はるかに気が楽だ。

　呼吸を整える。玄関ホールは無人だった。合図をしてノヴェラと娘を入らせると、階段の上に気配があった。ほんのわずかな空気の揺れのようなものだ。ルーカやリッカルドを連れていたら気づかなかっただろう。

　銃を構え、意識を研ぎ澄ませる……恐らく二人、廊ろう下かの入口で待ち構えている。それに気づかないふりをして、階上うえからの死角に入った。護衛が階上で待ち構える理由を四つ挙げる。

　一つ、狙撃。だが、すでに状況はその段階でない。

　二つ、罠わな。強盗相手に別荘ごと爆薬で吹き飛ばすこともあるまい。

　三つ、地の利。これは少し厄やっ介かいだ。対応を考える必要がある。

　そして四つ、肝かん心じんなのは、彼らの守るべき対象が二階にあるということだ。

　一階と地下室にベルッチはいないと踏んだアレッシオは、頭の中で別荘の見取図を広げた。ホールの他に階段は二箇所、どちらを使っても二対一の銃撃戦よりはましだろう。

「二人はここを動くな！」

　ホール奥の扉を蹴けり開けて、館の西側へ続く廊ろう下かを全速力で走りだした。途中で向きを変え、足音を殺してホールに戻る。護衛の一人が銃を構えたまま階段を降りてくるところだった。右手が走る、相手と目が合う前に額を撃ち抜いた。階段を滑り落ちる護衛の死体を飛び越え、段飛ばしに駆け上がる。二階の廊下を引き返してくるもう一人に、床の高さから四発の銃弾を浴びせた。

　目と同じ高さを灼やけた薬やっ莢きょうが転がる。

　匂においたつ硝しょう煙えんが血流を沸き立たせる。

脳天からつま先まで、全身の神経が逆立ち、手の中の怪物が完全に目を覚ました。この怪物はアレッシオが思うより早く火を噴き、あらゆる敵を死に至らしめるだろう。

二階に上がった。

護衛を二人片付けた。おそらくベルッチは廊下を突き当たった主寝室にいる。しかし最後の護衛がそれまでのどこかに潜んでいるだろう。どうするか。

思し索さくは二秒で終わった。リッカルドの怪我を考えるとできるだけ短時間で済ませたい。アレッシオは銃を構えたまま、大おお股またに歩き出した。

二歩、三歩、四歩……毛足の長い紫色の絨じゆう毯たんを踏んで歩く。あるいはワインレッドかもしれない。テラスに面した回廊は、右手一面がガラス窓になっている。その向こうで月が雲間に姿を消した。五歩、六歩……手の中の怪物を信じて足を運ぶ。

八歩目、あるいは九歩目か。窓の外に違和感があった。

情報を頭が認識する前に身体が反応した。一回目の銃声で薄いガラスが砕け散り、アレッシオの脳は、自分が柱の陰に隠れた敵に銃弾を撃ち込んでいることを理解した。足が動く。歩きながらさらに二回引き金を引いた。敵の銃口はそっぽを向いている。そいつの頭が割れた。相手が倒れ、三番目の護衛がいなくなったことを認識する前に、アレッシオは空になった弾だん倉そうを排出し、次の十三発を装そう塡てんしようとしていた。

汗ひとつかいていなかった。

敵の気配が分かる。銃じゆう把はに手がかかったのが分かる。引き金の指に殺意の宿るのが分かる。その結果として、相手よりも早く適切な場所に銃弾をぶち込むことができる。特殊介入部隊の狙撃手ではないのだ、マフィアの男マフイオーゾにとって射撃が上う手まいというのは、そういうことだ。

階下からノヴェラとベルッチの娘を呼び寄せた。逃げ出すチャンスはいくらでもあったのに、娘は素直についてきた。

「急げ、お嬢さん……と、名前をまだ聞いてなかったな」

転がった死体を前にして娘は言葉もない。蒼そう白はくになって我が家の惨さん状じようを見渡している。やがてアレッシオを見上げた瞳には、強い感情が宿っていた。

「迷惑をかけてすまなかった。その先があんたの部屋だろう。毛布を頭からかぶって、今夜のことはみんな夢の中に置いてくるといい」

　立案者のリッカルドには悪いが、彼女を連れ回すことにさほどのメリットはない。目的の部屋は見取図から目星をつけてあるし、交こう渉しようは銃で済ませればいい。それよりも護衛を一瞬でも迷わせてくれたことがありがたかった。

　ベルッチの娘はドアノブに手をかけ、それから精一杯の勇気を搾しぼり出すように、銃を構えたアレッシオを振り仰いだ。

「……リッカルドは、このために私に近づいたの？」

「単なる偶然だ、だがツイていた」

「あなたが命令したのね」

　憎しみの眼差しがアレッシオを射貫ぬく。

「そうだ。そいつが聞きたくて逃げなかったのか？」

　瞳を赤く潤うるませた娘は、部屋に駆け込むと音を立ててドアを閉めた。鍵かぎのかかる音がする。アレッシオはスラックスにねじ込んだ携帯酒瓶ヒツプフラスクを開け、アルコールで口を洗った。血と硝しよう煙えんの臭においが抜けると、それまでよりも鋭敏な理性が戻ってきた。

　割れたガラス窓から冷たい風が吹き込んでくる。無言のノヴェラを連れて廊ろう下かを真っ直ぐに進んだ。突き当たりには分厚い樫かしの扉。それを抜けた奥の寝室で、アレッシオは『化け物』と対面した。

　スタンドの暖かい光に浮かび上がった寝室には防音が施されていた。扉を閉めると、すぐに風の音が聞こえなくなった。さすがに銃声は届いただろうが、ベルッチは女の膝ひざ枕まくらで寝息を立てていた。

　ベルモントに名の通った骨こつ董とう商人は、干からびた蛙かえるのように瘦やせた老人だった。ナイトガウンの前をだらしなく開いて眠りこける姿は、精気を吸われた出がらしを思わせる。

　それからアレッシオは横に侍はべる女を見た。

　女──いや、スタンドの光を受けた瞳の青い宝石は、彼女が自動機械人形オートマタだということを表している。睫毛まつげの長いその顔を見て、アレッシオは息を呑のんだ。

やはりここは御お伽とぎの国、ベルモントだ。

目の前にいる青い瞳石ジエンマの骨董人形アンティークは、ノヴェラの確認を待つまでもなくフォーラに間違いなかった。たとえ『ニュクスの卵』や『母なるセレス』のような、あるいはもっとおぞましい肉にく塊かいであっても担いで帰る覚悟をしていたが、改造の果てに行き着いたフォーラの姿は、決して醜みにくい化け物ではなかった。それはブロンドの髪を貴族風にカールして、ノースリーブの青いネグリジェをまとった、銀幕の向こうの少女だった。

老人に膝ひざ枕まくらをさせたまま、フォーラは首をかしげて微笑ほほえんだ。ノヴェラと同じ金髪がさらりと音を立て、シーツの上に黄金の螺ら旋せんを描く。

「フォーラ！」

妹の名を呼んだノヴェラが、アレッシオの横をすり抜けて彼女の手を取ろうとする。だが、彼女はその手を撥はね除のけた。ノヴェラを無視したまま、蕾つぼみのほころぶような笑みをアレッシオに向け、それから口を開いた。

「あなたは何番目の王子様かしら？」

ii

四時二十分、二台の車に分かれてベルッチの別荘を後にした。

「どうして殺さなかったんだ？」

公衆電話の受話器を置いたアレッシオにルーカがつっかかってきた。『弾丸パロツトラ』は麻薬ドウローガが嫌いだ。まして今夜はリッカルドが売人に撃たれたのだ。アレッシオは他の弾丸パロツトラにも聞こえるように、若いルーカの疑問に答えてやった。

「ベルッチを殺す必要はない。生かしておけば、奴が死体の始末をしてくれるからだ。麻薬ドウローガの横流しについては向こうの組織とベルッチの問題だ。殺すのは俺たちの仕事じゃない。いいか、今夜のことはこう思え。この街と、ボスと、俺たちと、いろんなことがうまく回るために六個の棺かん桶おけが必要だったとな。七個では多すぎる」

負傷したリッカルドを担ぎ上げ、車の座席に寝かせてやる。ベルッチを見逃したように、リッカルドを七人目にしてはならない。そのことを弾丸パロツトラの誰もがすぐに理解した。

車道を離れた茂みに自動機械人形オートマタの兄妹がいる。アレッ

シオが迎えに行くと、妹思いのノヴェラが薄うす着ぎのフォーラに自分の外がい套とうをかけているところだった。名前を呼び、あれこれと話しかけている。

「僕のことが分かる？　ひどいことはされなかった？　調子の悪いところはない？」

　二人は兄妹と聞いていたが、妹のフォーラのほうが成熟した肉体を持っていた。身長も十センチは高いし、表情にも色気がある。ドレスの胸もとを押し上げた二つの膨ふくらみに、すらりと伸びた白い脚。仲良く並んだ二人の姿は姉と弟のようにしか見えなかった。

　フォーラはノヴェラなど目に入らないかのように、じっとベルモントの夜景を眺めている。彼女が言葉を発したのは、ベルッチの寝室でアレッシオに向けられた一言きりだ。

　あなたは何番目の王子様かしら？

　主人パドローネだったベルッチに別れの一言もなく、フォーラは当然のようにアレッシオについてきた。

「急ぐぞ、リッカルドが心配だ」

　自動機械人形オートマタの兄妹を後部座席に乗せて、車が走りだす。

　アレッシオは助手席の窓から、薄くなる闇空を眺めていた。緑の匂においがすえたシートの臭いに取って代わる。丘の麓ふもとまで下ると道路は砂利からアスファルトになり、やがて石いし畳だたみになった。そこからベルモントの市内に入る。

「すぐに医者だぜ、リッカルド」

　ルーカがアクセルを踏み込む。いつもならリッカルドにハンドルを任せるところだが、今日はルーカの荒っぽい運転に付き合うしかない。

「けどアレッシオよりはマシだぜ。あんた何台壊してんだ」

「俺に言わせれば運転なんてのは特技の範はん疇ちゆうだよ。よくこんなデカブツを制御できるもんだ」

「そんなこと言うの、ベルモントであんたくらいだよ」

　かすれた声でリッカルドが笑った。顔色は悪くない。フォーラがどんな姿であっても対応できるように、八人乗りを用意したのが良かった。おかげで怪け我が人にんを寝かしてやれる。

　シートのそばに屈かがみ込んだ弾丸パロツトラの少女が、アルコールとタオルだけでリッカルドの手当てをしている。上首尾の報告と一緒に、怪我人が出たことも伝えておいた。ボスの所に行けば、薄気味の悪い人形医者が確かな腕をふるってくれるだろう。



窓の外を水すい銀ぎん灯とうの明かりが飛び去ってゆく。

観光客の集まるドゥオーモ広場、それから旧市街の歴史を重ねた虹にじ色の街並み。星空の下で見るベルモントはまさしく童話の世界だ。

ふいに、フォーラが歌のようなものを口ずさみ始めた。ヴェネツィアの子供なら誰でも知っている子守唄ニンナナンナのようだが、音程がでたらめだ。

「フォーラ、僕たちに歌は無理だよ」

ノヴェラが優しく声をかけても、フォーラはお構いなしに歌いつづける。

「違うわ、こうよ」

リッカルドの手当てをしていた弾丸パロツトラのリタが、声を揃そろえて歌いだした。直してやっているつもりなのだろうが、音おん痴ちのフォーラに引きずられてひどい不協和音になる。

「どういうんだい、あれは？」

「円筒シリンダがいかれているんだろう、俺の知ったことじゃない。その先を右だ。ヴィラ・ベルモントってホテルがある」

「ヴィラ・ベルモント？　すげえや、五つ星じゃないか。ご馳ち走そうにありつけるぞ！」

ルーカが口笛を吹く。

「落ち着け、スピードを落とせ」

「平気だよ。なあ、ボスは気前がいい人なんだろう、アレッシオ」

「あたしたちも入れてもらえるかな」

「ガイドには鴨かものローストが絶品って書いてあったよ。そんなことなら怪我するんじゃなかった、腹の穴が恨めしいぜ」

弾丸パロツトラどもが朝飯の話で盛り上がりはじめた。まだほんの子供たちだ。襲撃の戦力にならないことは最初から分かっていた。

「ちゃんと前を見て運転しろ。俺は少し眠る」

「じきに着くぜ」

「じきに起こしてくれ」

　携帯酒瓶ヒツプフラスクのスコッチをあおり、シートの上で身体をねじる。ガキのお守りはもううんざりだ。この木偶でく人形を渡して全ては終わり。相応の報ほう酬しゆうと、もっとマシな仕事にありつければ文句はない。

　空が白み始めてきた。

　ベルモントの夜明けだ。鮮やかな朝焼けが虹色の旧市街を白く染め上げる。たなびく紫雲の果てに、やがて目も眩くらむような朝日が姿を見せるだろう。

　美しい朝の風景を、赤信号のブレーキとリッカルドの悲鳴が台無しにした。

　フォーラの歌はまだ続いている。これが飛躍の機会になるかもしれない。淡い期待はあるが、すぐに何度も裏切られてきたことを思い出す。アレッシオは弾丸パロツトラのお守りをしているが、ボス側の人間ではない。自分も含めての鉄砲玉パロツトラなのだ。

　五時十七分、車二台をヴィラ・ベルモントの正面につけた。

　車のドアを開けた従業員がぎょっとした顔をする。それを無視して五つ星ホテルへと乗り込んだ。ロビーの天井を飾ったフレスコ画を見上げた弾丸パロツトラたちが、わっと歓声をあげる。たちまち、黒のスーツに蝶ちようネクタイのガエターノがすっ飛んできた。

「なにしてるんだ、ロビーにガキを連れてくるな」

「怪我人がいると言っただろう、医者はどこだ」

「手配は済んでる。いいから早く姿を隠せ」

　どこに敵対する組織の目があってもおかしくない。ボスの所在は極ごく秘ひなのだ。騒ぎを収めたいガエターノは、極力控えめな身振りでアレッシオと弾丸パロツトラをエレベーターに押し込んだ。二階と最上階のボタンを押す。すぐに二階でエレベーターが止まった。

「ガキと怪け我が人にんはその奥だ、何があっても部屋から出るな」

　開いたドアから弾丸パロツトラが追い出される。

「待てよ、鴨かものローストはないのかい」

「うるさい、お前がローストになれ！」

口を尖とがらせた子供たちを追い払ったガエターノは、扉が閉まると大きなため息をついた。笑いをこらえているアレッシオを憤ふん怒ぬの形相で睨にらみつけてくる。

「ガキどものしつけがなってないぞ」

「俺は神父でも教師でもないんでな」

「だからお前は野良犬だっていうんだ」

苦虫を嚙かみ潰つぶしたような顔のガエターノが、アレッシオの背後に目を向ける。

「それがフォーラか、さすがに別べつ嬪ぴんだな」

「ああ、化け物じゃなくて助かった」

「だろうな、ボスも上機嫌だ。会う前にネクタイくらい締めとけよ」

「いらねえよ、俺は小間使いじゃねえ」

ガエターノとの応おう酬しゅうを、自動機械人形オートマタの兄妹は黙って聞いている。緑と青の瞳にはなにも映っていないようだ。四人を乗せたエレベーターが、最上階へと音もなく昇ってゆく。

iii

ベルモントの人口は四十万人。

対して自動機械人形オートマタはたったの二千体。

それでもこの地は、世界一の人形生産地だ。

陽は昇り、街は動き出していた。窓から見下ろした大通りを、人間が粒子となって流れている。この高さからでは人間と電気式イミテーションを見分けることは難しい。観光客がカメラを向けているのが自動機械人形オートマタか、それとも人形が観光客のシャッターを頼まれているのだろうか。人々と車が、張り巡らされた血管を流れる血液のようにベルモントという巨大な生命を支えている。

ホテルの窓からは旧市街の町並みと、それを割って流れるアルノ川の曲線、その向こうの大聖堂カツテドラーレまでが一望できた。最上階のスイートルームだ。眼下に開けた眺望が、ベルモントを俯ふ瞰かんした気分にさせる。しかしエレベーターで地上に降りれば、アレッシオもまたこの街を流れる血液の一滴にすぎない。

時計の針が九時を回った。

応接室の窓から朝の街を見下ろして、アレッシオはボスを待っていた。高いところは苦手だ。こんな部屋に泊まろうとする人間の気が知れない。ホテルの従業員がテーブルにワインと料理を並べにきたが、渡すチップもないので知らん顔をしておく。

正体不明の仮面の男マスケリーノ──それがアレッシオのボスだ。

三年前にベルモントに現れた仮面の男マスケリーノは、抗争に明け暮れていた三つのファミリーをわずか五週間で解体させ、北部の組織マフィアからも一目を置かれる存在になった。この国で組織に認められるということは、特別な意味を持つ。彼らは政財界にも強い影響力を持ち、国政さえ揺るがす力を持っているからだ。

仮面の男マスケリーノはベルモントに割かつ拠きよしていたファミリーをまとめ上げると、自動機械人形オートマタの輸出と観光事業に関わる利権を北部の組織ときれいに折せつ半ぱんして、それきり目立った活動をやめてしまった。ベルモントにおける権けん益えきが損なわれることもなく上じよう納のう金きんも増えたため、組織は仮面の男マスケリーノの行動に寛かん容ようだった。いくら末端とはいえ麻薬販売網に関わる古こ物ぶつ商しようの別荘を、彼の兵隊が襲撃することにすら目を瞑つむったのだ。このことは裏社会における仮面の男マスケリーノの格をさらに高めるだろう。

「アレッシオ！　素晴らしいぞ、その殺気に満ちた面構えには惚ほれ惚ぼれするよ」

背後で甲かん高だかい声がした。

寝室の扉が開き、半年ぶりに対面するボスが車くるま椅い子すに乗って現れた。

派は手でないでたちは昔と変わらない。頭に巻いたターバンを、額の大きなブローチで止めている。ブローチは翡ひ翠すいの大玉だ。その根元からは巨大な羽が何本も生え、柔らかい空調の風にゆらゆらと揺れている。襟えりに毛皮のついたマントを羽織り、その内側はアラビアンナイトの世界だ。孔く雀じやくの羽う扇せん、じゃらじゃらと音を立てるネックレス、指にはめ散らかした宝石の指輪、そして鼻から上を覆い隠した銀色の仮面マスケラ──謝肉祭カルネヴアーレの仮装をしたボスの車椅い子すが、応接室に入ってくる。

「お久しぶりです、仮面の男マスケリーノ」

「うん、お前は相変わらず黒ずくめだな」

「このほうが仕事をしやすいもので」

　久しぶりに見るボスの姿にアレッシオは圧倒されていた。

　仮面の男マスケリーノは大柄なうえに肥満体だ。きらびやかな衣装をまとった巨大な肉の塊かたまりが車くるま椅い子すに押し込められ、ノヴェラとフォーラに押されながらゆっくりと近づいてくる。それはまるで謝肉祭カルネヴアーレの山だ車しのようだった。

「足の具合はいかがです」

「いやいや良いぞ、すこぶるいい。この車椅子はお前を驚かせてやろうと思ったのさ」

　よたよたと車椅子から立ち上がった仮面の男マスケリーノは、尻しりから落ちるように向かいのソファーに身を沈めた。足の調子は悪そうだ。

　仮面の男マスケリーノは権力も財力もその手に収めている。アレッシオが彼に会うのは必ずホテルの最上階で、酒も食事も贅ぜいをこらしたものが出てくる。しかし肥満した彼の肉体は、走ることすら叶かなわないのだ。サッカーゲームに汗を流すことも、うららかな陽差しの下を散歩することもできない。二本の足はその巨体を支えるだけで精一杯で、歩くのにも難なん儀ぎしている。アレッシオとはまるで違う世界の住人ということだ。

「まったくこの国は馬鹿げているよ。そうは思わないか、アレッシオ」

　仮面の男マスケリーノは銀のナイフとフォークを取ると、アレッシオに構わずテーブルの料理を口に運んだ。ソファーの向こうにノヴェラとフォーラが黙って並ぶ。

「ひどい話だよ、あの忌いま々いましい古代復興運動リナツシメントさ。町おこしのキャンペーンが、いまじゃ法律みたいな顔でベルモントに居座っている。いいかね、なにが馬鹿馬鹿しいってこういうことだ。私はビルを建てることにした。むろんこんな安やす普ぶ請しんなホテルじゃない、地上百階建てのバベルの塔だよ。聖書の大事業を完遂してやろうっていうんだから、これこそが古代復興運動リナツシメントだと思うだろう。元げん老ろう院いんに手を回して、例外的に高層建築を認めさせた。見事なもんさ。そこまでの根回しはできたが、その先がだめなんだ。まず新しい鉄筋がだめだと言われる。材質が限られてるんだ、外壁も漆しつ喰くいだの石造りじゃないと認められない。木造ならいいが、それが論外だってことはお前にも分かるだろう？　なあ、この私が頼んでもだめなんだそうだ。建材のせいで、この街の建築士は低層のしょぼくれたビルしか設計できないのさ。おまけに大型の施設になると煉れん瓦がも新品を使えない。目立つからな。土の中に半年も埋うめて時代をつけるんだ。私は吹きつけ工法で

いいと言っているのに、連中は聞く耳をもたない。そりゃあ生産が追いつかなくなるさ、子供だって分かる話だ。そこで順番待ちになる！　ひどい話だろ。私がこの世で最も嫌いなのが順番待ちだってことを、連中は知らないのだよ。だから私はあの大聖堂カツテドラーレを買い取って、資材用に解体してやろうと思ったのさ」

　速そく射しや砲ほうのように言葉を吐き出し、給きゆう弾だんするように皿のものを平らげる。仮面の男マスケリーノが一いつ気き呵か成せいにまくし立てるうちに、料理はみるみる減っていった。指先についたピザのソースを舐なめてから、銀のフォークを鴨かものローストに突き立てる。どうやら皿も銀製品のようだ。

　教きよう煌こう庁ちようによって、銀の流通は厳しく制限されている。銀の利用は教会関連の聖せい具ぐや、指輪などの高級装飾品に限られているのだ。仮面の男マスケリーノはそれに逆らうのが楽しくてたまらないといった仕草で銀の食器を使い、料理を口に運びながら饒じよう舌ぜつに語り続ける。

「全ては教きよう煌こう庁ちようだよ！　連中の脳みそにはなアレッシオ、十四世紀の彼方かなたから時を越えて蘇よみがえったしかつめらしい細さい菌きんが繁はん殖しよくしているのさ。おかげで枢すう機き卿けいどもは国中をかび臭くしようと躍やつ起きなのだ」

　仮面の男マスケリーノが手を打って笑う。アレッシオには分からない冗談だが、相づちを打つより他になかった。大汗をかいたボスは右手の羽う扇せんをひっきりなしに動かしている。彼はエネルギーの塊だった。

「それはそうと瞳石ジエンマはどこだね」

　急に声の調子が落ち、仮面の男マスケリーノが身を乗り出してきた。アレッシオは黙って、ベルッチから奪い取った緑柱石アクアマリーナの指輪をテーブルに置いた。

「見事だ、アレッシオ！」

　鴨かも肉にくを刺したナイフを持ったまま、仮面の男マスケリーノが指輪をひったくる。脂あぶらのついた左の薬指にはめ、窓の光に透かして見た。太陽の光が青い石を煌きらめかせる。指輪の宝石は、フォーラの瞳と同じ石を磨みがいたものだ。

　瞳石ジエンマの指輪こそが、自動機械人形オートマタの主人パドローネたる証あかしだ。

　指輪の持ち主だけが彼女に命令を下すことができる。そしてその命令は絶対だ。ベルッチから本当に奪う必要があったのは、フォーラ本

体よりもこの指輪だった。

「実に美しい、愛まな娘むすめの里帰りを喜ぶ父親の心地だよ」

　剽ひようげた声で笑った仮面の男マスケリーノは、両手の甲をアレッシオに向けた。左右の薬指に瞳石ジエンマの指輪が輝いている。右はノヴェラの緑色の瞳、左はフォーラの青い瞳、それと同じ色の宝石がボスの両手を飾っている。

「見たまえこの輝きを。最高の緑柱石スメラルドと緑柱石アクアマリーナだ。どちらも同じ石だが、わずかなクロムや鉄がこんなにも色合いを変えてしまう。それはこの二人も同じことなのだよ。さあさあ愛いとしいフォーラ、仮面の男マスケリーノの命令だ、笑いたまえ、今日は君にとって最高に幸せな日なのだから。そうだ、声を出して笑いたまえ！」

　銀のフォークが躍る。それまで無表情に立っていたフォーラが笑い出した。骨董人形アンティークはただ機械的に笑うのではない。まずはくすくすと、さもボスの言葉が面白かったかのように……やがて笑いが抑えきれなくなり、口元に手を当てたフォーラは、けらけらと声を出しながら身をよじりはじめた。芝しば居いとは思えない笑いぶりに、仮面の男マスケリーノの口元がほころぶ。

「その声だ、フォーラの歌声はいつ聴いても美しい。そのまま笑っていなさい」

　フォーラに笑わせたまま、ボスは上機嫌で食事を続ける。今がチャンスだと思い、アレッシオは数ヶ月ぶりの話を切り出した。

「俺は、そろそろ信用していただけましたか」

「私はいつもお前を信頼しているぞ」

　信用と信頼は少し意味が違う。ボスの中で二つの言葉には、どういう上下関係がつけられているのだろう。

「では、以前うかがったファミリーに入る件ですが……」

「それならば、前進したと思ってくれていい」

「感謝します。そろそろ子守役も卒業させてもらえるとありがたいんですが」

「もちろん、それも考えておこう。さあガエターノ、この有能なマフィオーゾに約束の報ほう酬しゆうを持ってきたまえ！」

　念押しをしようとしたアレッシオを遮り、大声でドアの向こうに呼

びかける。彼の素顔を覆おおった銀の仮面マスケラだけで幾いくらするだろう。そんな勘かん定じようをするようになった自分が、アレッシオは好きではなかった。泥を舐なめるようなスラムの生活が長すぎたせいだ。

　つくづく思うことがある。

　世界というのは無限に開けているようで、実は己の器量の中に閉じられているものだ。

　ブルガリの腕時計をはめた奴にはぎらぎらした瑠る璃り色の世界が、無む銘めいの安物をはめたアレッシオにはチンケな錆さび色いろの世界が、果たしてボスの仮面マスケラの内側には、どんな世界が広がっているのだろうか。

　ソファーの後ろでフォーラはまだ笑い続けている。料理を平らげた仮面の男マスケリーノは高価な銀の皿を無造作に重ね、また身を乗り出してきた。

「それよりも仕事の話を聞かせてくれないか。あの干からびた骨こつ董とう屋やはどんな様子だった？」

　鼻息を荒くして詰め寄ってくる。信頼する部下の処遇よりも、血湧わき肉踊る活かつ劇げき譚たんを聞きたくて仕方ない様子だ。

　アレッシオは諦あきらめて昨夜の顚てん末まつを細かく報告した。襲撃前の様子、売人の行動、そして銃撃戦。中でもルーカたち弾丸パロツトラの行動にボスは強い関心を示した。彼らの発言の一つ一つに頷うなずき「若者はいいな」と繰り返す。

「……ベルッチは寝ね惚ぼけていました。顔は麻薬ドウローガでやつれ、俺が銃口を向けても何が起きたのか分からないようでした。活を入れてやろうと思い、俺は『組織の者だ』と名乗りました」

「そいつは嘘うそではないな、弾丸パロツトラという組織のお目付け役だ」

　仮面の男マスケリーノは手を叩たたいて喜んだ。緑と青の瞳石ジエンマが揺れる。アレッシオは続けた。

　ベルッチに銃を突きつけ「今日のことは警告だ、忘れるな」と脅おどすと、寝惚けていた老人の頭を恐怖が覚かく醒せいさせた。瘧おこりにかかったように震えるベルッチから瞳石ジエンマの指輪を奪い、フォーラと引き離す。すると老人がよろけた足取りでつかみかかってきた。「返してくれ！」皺しわだらけの身体を振り払い、それでもしがみついてくるので、倒れるまで銃じゆう把はで殴なぐりつけた。

「そいつは傑けつ作さくだ！　まるでゾンビ映画だな。あの老いぼれは骨董をやめて、エキストラ専門の俳優になるといい」

　ソファーの上で大喜びするボスの姿に、苦笑がこみ上げてきた。アレッシオは軽薄な男が好きではないが、無む邪じゃ気きに振る舞う仮面の男マスケリーノには奇妙な好ましさを覚える。

　そこでノックがあり、ワゴンを押したガエターノが入ってきた。

　運ばれてきたのは拳銃と報ほう酬しゅうだ。アレッシオの前に四百万ヴィンチの札束が重ねられた。

「請求のあった金額を上乗せしてある。ご苦労だった」

　肥満した身体に不似合いな優雅な手つきで、ボスが羽う扇せんをひるがえす。仮面の男マスケリーノは謎なぞのマフィアだ。彼のアジトがどこで、何人の兵隊を抱えているのか誰も知らない。ただひとつ知られているのは、仮面の男マスケリーノには莫ばく大だいな財力があるということだ。

　しかし、アレッシオは知っている。

　仮面の男マスケリーノの本当の名前が、ペトルチアーニであることを知っている。

　執事のガエターノは主人を前にするとがちがちに緊張する。この男がアレッシオに口を滑らせたのだ。ボスの秘密を洩もらした者には残ざん酷こくな死の制せい裁さいが待っている。だからガエターノは、アレッシオが多少の無茶を言ってもしぶしぶ受け入れるしかない。

「報酬は金だけじゃないぞ、この拳銃もだ」

　ワゴンには金のほかに二丁の拳銃が乗せられている。片方はアレッシオの拳銃で、部屋に入る前にガエターノに預けたものだ。

「いつまでもこんなに古いものでは心もとないだろう。こっちのを使うといい」

　仮面のペトルチアーニはもう片方の拳銃を手に取った。弾は抜いてある。スライドストップのレバーをがちゃがちゃといじり回し、アレッシオに手渡してきた。

　手の中に収める。スライドを後退させて機関部を覗のぞき込む。新品だ。まだ一度も火を噴いたことのない銃だとすぐに分かった。

「ピストルはイタリアの物が一番だ、お前もそう思うだろうアレッシオ」

「はぁ……」

　ボスが言っているのは、性能ではなく見てくれの問題だ。仮面の男マスケリーノは口を開くたびにイタリア製が最高だと言うが、銃など一度たりとも撃ったことがなかった。おまけにこいつはＭ９アメリカ製だ。

「お気持ちはありがたいが、商売道具は手に馴な染じんだものが一番です」

「遠えん慮りよをするなよ。君と、あの愛らしい少年たちの功績に報いたいのだ。すぐにこいつを人数分揃そろえてやる」

「弾丸パロツトラにＭ９こいつを？」

　おかしな雲行きになってきた。こんな拳銃を子供たちに持たせて、いったい誰が撃ち方を教えるのだ？

「でかすぎますよ」

「心配するな、子供もすぐに大きくなる」

　仮面の男マスケリーノがうきうきとしているのが分かり、アレッシオは苦笑した。

　彼にとっては拳銃も銀製品も同じことなのだ。ボスはただ、国内で流通していない非合法の銃を子供たちに持たせたがっている。このサイズの拳銃を子供が上う手まく扱えるかも、市警察に摘てき発はつされるリスクも、国内流通のない９ミリパラベラム弾を調達する手間も、仮面のペトルチアーニはお構いなしだった。

　門限を破って得意がる学生と根っこは一緒だ。呆あきれつつも、どこか憎めないところがある。アレッシオは肩をすくめた。

「アレッシオ、お前は八歳で銃撃戦をやってのけたんだろう」

「逃げ回ってただけです。弾もまっすぐに飛びませんよ」

　あのときは両手だった。そうでないと握れなかったから両手でしっかり持って引き金を引いた。手首を外して、弾もまっすぐに飛ばなかったが、人が死んだ。そしてアレッシオの人生もずいぶんと変わったのだろう。

「以上だ、今後のことは夕食までに決めておく」

　食事を終えた仮面の男マスケリーノが銀のフォークを皿の上に転がし、アレッシオは少し慌あわてた。

「ああボス、ええと、なんていうか……」

　言葉を探す。

「ですがオートマチックなら、子供でも簡単に覚えられるでしょうよ」

「ではあとで弾丸パロツトラの人数をガエターノに伝えたまえ。その数だけ拳銃を用意しよう。ご苦労だった。」

　丸っこい手のひらがポンと打ち合わされる。終わりの合図だ。今後の身の振りについてはほとんど話せなかった。

　ノヴェラがじっとこっちを見ている。フォーラは仮面の男マスケリーノに甘えている。対照的な兄妹の自動機械人形オートマタに車くるま椅い子すを押させて、仮面の男マスケリーノの山車だしは薄暗い寝室に飲み込まれていった。

　その中でなにが始まるかは想像に難かたくない。

　じきに戻るとガエターノに言い置いて、アレッシオは弾丸パロツトラの様子を見に行くことにした。

　エレベーターで下った二階の突き当たり、ダブルにしては手狭な部屋に子供たちが詰め込まれていた。ボスはこんなところで出費をけちる人間ではない、弾丸パロツトラ嫌いのガエターノが宿代を抜いたのだろう。

　十一丁──ざっと見渡して勘かん定じようする。

　襲撃に参加したルーカとリッカルド、および六人の弾丸パロツトラ、ファビオとその仲間が四人、そこから小娘のリタを引いて十一丁だ。あとの幼い子供たちは隠れ家に置いてきた。

　元気のあり余る弾丸パロツトラが大人しくしているはずはない。部屋は喧けん騒そうに包まれていた。

「悪かったよ、やめてくれ！」

　羽は交がい絞じめにされて叫んでいるのはファビオの連れてきた新入りで、たしかノエルと言った。ぼろのコートを着た少年で、顔立ちは整っていたはずだが、さんざん殴なぐられた両方の頰ほおが赤く腫はれ、鼻血を流していた。それでもルーカに許しを乞こうている。

「許してくれよ、悪気があったんじゃないんだよ」

「悪気は関係ねえよ、ルールを守るか破るかだ」

　ルーカが銃を振り下ろす。鈍い音と呻うめき声、取り巻いた弾丸パロツトラの歓声が同時にあがる。殴られているのはノエルではなくファビオだった。

　制せい裁さいのリンチだ。ホテルに着いてからすぐに始まったのだろう。ファビオは顔のあちこちから出血して、それが黒く固まってこびりついている。瞳の焦点を失ったファビオが壁にもたれ、そのまま崩れ落ちる。ぐったりした身体を左右から抱え起こされ、またルーカに殴られる。泣き叫んでいるのはノエルだけだ。ほかの新入りは絨じゆう毯たんの上に這はいつくばっている。

　正気に戻ったファビオが反抗的に睨にらみ上げると、今度は蹴けりが飛んだ。ファビオがダウンするたびに歓声が上がる。ルーカの銃じゆう把はがさらに追い討ちをかける。

「こいつは殴る道具じゃねえよ」

　アレッシオが銃を取り上げると、ルーカは拳をふるい始めた。「もうやめろ！」叫ぶノエルにも平手が飛ぶ。仲間が撃たれたことで、みんな気が立っているのだ。人形医師の手当てを受けたリッカルドは、包帯を巻かれてベッドに寝転がっていた。意識はしっかりしているようで、タオルを持ったリタとなにか話している。

「偉そうに言いやがって。お前ら、麻薬ドウローガに手を出さないでやっていけるのかよ。俺たちは食うや食わずの生活がしたくて仲間になったんじゃないぜ」

「なんだと！」

　ファビオの言い種ぐさにルーカが激げつ昂こうした。顔面を殴りつける。倒れた顎あごを蹴り上げる。その上から踏みつける。そろそろ止めないと殺してしまいそうだ。アレッシオが割って入ろうとしたところで、リッカルドが声をかけた。

「なあ、もう逃がしてやろうぜ」

「リッカルド？」

「それくらいでいいじゃん。それともここで殺すのか、ルーカ」

「そうじゃねえよ、でもこいつらは……」

　弾丸パロツトラは麻薬ドウローガに手を出してはならない。その掟おきてを作ったのはルーカとリッカルドだ。

「行けよ、逃がしてやる」

仰あお向むけのリッカルドは、ぼろきれのようになったファビオに優しく声をかけた。それから親指サムを立てる。

「けど、二度と俺たちの前に顔を見せんなよ」

これで、ファビオと彼のチームは弾丸パロツトラを追放されることになった。

銃は七丁──勘かん定じようを変更する。アレッシオは、ファビオとノエル、それから仲間二人の手を引いて、ホテルの下まで送ってやった。フロントに頼んでタクシーを手配してもらう。彼らのねぐらは弾丸パロツトラと同じスラム街だ。痣あざだらけの身体ですぐに荷物を整理して、どこかへ立ち去ることになるのだろう。

「とりなしてやることもできるぞ」

「余計なお世話だよ」

ノエルが吐き捨てた。ファビオも他の二人も虚うつろな目で床を眺めている。アレッシオは胸のポケットを膨ふくらませた報ほう酬しゆうの束から、十万ヴィンチを引っこ抜いた。

「最後の分け前だ、これでやり直すんだな」

ファビオが紙し幣へいをひったくる。タクシーの到着を知らせにきたドアマンが、血まみれの少年たちを見て言葉を失った。しかしすぐに気を取り直し、何も見ていないという顔で乗り場まで案内する。それがこの国で安全に生きるための秘ひ訣けつだった。

「俺たちは余計なところで時間を潰つぶしちまったんだ。それだけさ」

別れの挨あい拶さつにファビオが親指サムを立てる。四人の少年を乗せたタクシーは、ゆっくりとベルモントの旧市街へ滑り出していった。ナンバープレートが遠ざかり、やがて見えなくなる。

ベルモントの懐ふところは広い。十万ヴィンチを食いつぶす前に、連中もそれなりの枠わくに収まるだろう。ナポリにもヴェネツィアにも居場所のなかったアレッシオですら、この街でどうにか生きているのだから。

二階の部屋に戻り、ファビオたちが去ったことをルーカに伝えた。

「すまない、アレッシオ」

「これも仕事のうちだ」

十万ヴィンチを渡したことは話さなかった。それはもう弾丸パロツトラと関係のないことだ。

アレッシオは弾丸パロツトラの掟おきてを尊重している。彼らは仮面の男マスケリーノの正式なファミリーではなかったし、アレッシオにとってもここは仮の身の置き所だ。今度の仕事の見返りとして、明日にはお守りから解放されるかもしれない。

夕食のあと、ボスともう一度話をするチャンスがある。スイートの応接室に戻ったアレッシオは、ソファーで夜を待つことにした。

正午前だというのに、遮しや光こうのカーテンを閉めきった室内は暗かった。奥の寝室からは艶なまめかしい喘あえぎと仮面の男マスケリーノの大きな声が聞こえてくる。人形遊びの真っ最中なのだ。

ガエターノはあくびを嚙かみ殺してテレビを見ている。寝室の声を気にしていないのは、これが日常のことだからだ。しかしアレッシオの脳裏に描かれる寝室の様子は、限りなく背徳的な光景だった。巨大な肉にく塊かいに組み敷かれた華きや奢しやなフォーラが悦よろこびの声をあげている。主人を喜ばせるための演技なのか、それとも実際に快感を得ているのかは分からない。ノヴェラはそれを無表情に眺めているのだろうか。

大きくため息をつく。胸の銃を抜いて、また戻す。猛烈な眠気が襲ってくるが、今はボスの護衛がアレッシオの仕事だ。

寝室で大きい物音がした。テレビのスイッチを切ったガエターノがさっと立ち上がる。すぐに仮面の男マスケリーノの笑い声と、フォーラの嬌きよう声せいが聞こえてきた。なにか奇き天て烈れつなプレイをしているのだろう。脱力したガエターノがまたテレビをつけた。

ガエターノという男は、もともとヴェネツィアで観光客相手に小さな詐さ欺ぎを働いて口に糊のりしていた。アレッシオとも古い付き合いだが、卑ひ屈くつで、いつも誰かの顔色を窺うかがっているような小物だった。それが今ではボスの側近として高いスーツを着込んでいる。

アレッシオはそっと靴くつを脱ぐと背後の壁に放り投げた。がたんと音がして、ガエターノが発条バネ仕掛けのように立ち上がる。電気式イミテーションよりももっと原始的な、からくり人形のような動作だった。

「ふざけるな、この黒鉛筆が」

アレッシオが笑うと、ガエターノはすごい形相で詰め寄ってきた。卑屈なくせにプライドは高い。その鼻先に札束をひとつ突き出して

やった。

「俺の分だな、よこせ」ガエターノがひったくる。ボスからは四百もの報ほう酬しゆうを受け取ったが、アレッシオと弾丸パロツトラの取り分は、最初の百万に追加の二百を合わせた三百万ヴィンチだ。ガエターノはこうして私し腹ふくを肥やすかわりに、アレッシオにうまみのある仕事を回してくる。

「報告するだけで百万か、ぼろい稼ぎだな」

「お互い様だろ。なあアレッシオ、あの兄妹に関わった人間は不幸に見舞われるって噂うわさを知っているか？」

「初耳だ」

「なら覚えておくんだな。あの妹はすげえ上玉だが、俺はいっさい近寄らねえつもりだ……おい、十万足りねえぞ」

「ガキの部屋代をちょろまかしただろう、その分だ」

「くそ、地獄に落ちろ」

　そのとたんに物音がして、またガエターノが立ち上がる。

「ヴェネツィアの詐欺師がたいした忠ちゆう勤きんぶりだな。お前のほうが自動機械人形オートマタみたいだぜ」

「こんなはした金で命を張ってるお前よりはマシさ」

　確かにそのとおりだ。そのおかげで小悪党だったガエターノは北部の組織にも顔が利きくようになった。大物ぶった仕草すら、最近では板についてきている。アレッシオには納得のいかない話だった。

「俺は少し休む、三時間で起こしてくれ」

「勝手な野郎だ」

　ガエターノの舌打ちを聞き流し、アレッシオはソファーの上で目を閉じた。

　夢など見なかった。

　目を覚ますと外は薄暗くなっていた。

　時計は十七時、ガエターノはソファーで寝息を立てている。

　舌打ちをしたアレッシオが顔を上げると、寝室のドアがゆっくり開

くのが見えた。

　薄闇の中、はっと目を瞠みはるほど白い脚が現れる。

　フォーラではなくノヴェラだった。ガウン一枚の自動機械人形オートマタが、足音を忍ばせてバスルームに駆け込んでいった。ボスはまだ休んでいるのだろうか。彼に訊たずねようとバスルームを覗のぞくと、洗面台に両手をついたノヴェラが静かに嘔おう吐としているのが見えた。

　よくできた骨董人形アンティークには関節の継ぎ目すらなく、まるっきり人間と同じ姿をしている。白い肌の少年は、全身を突っ張らせて胸に詰まった液体を吐き出していた。

　胸がむかついてきた。

　いくら骨董人形アンティークとはいえ、機械仕掛けの人形が嘔吐をしていたのだ！

　この世ならざるものを見たような気がして、アレッシオは静かにソファーに戻り、寝たふりを続けた。洗面所の照明に浮かんだノヴェラの姿が焼きついている。ガウンの下は全裸だった。全身には玉のような汗が浮いていた。

　やがてノヴェラが寝室に戻り、押し殺したような営みのやりとりが聞こえてきた。

「さあさあ、並んでこっちに尻尾しっぽを突き出すのだよ。猟りよう銃じゆうで犯されるメス狼おおかみのようにな」

「はい、ご主人様」

「いいぞ、それでいい、欲情したところを広げて見せるんだ。穴という穴をだよ。恥知らずの肉体を呪のろいながら限界まで押し広げろ。さあ、今度はお前が猟師の番だ……」

　吐き気に近いおぞましさがこみ上げてくる。指輪に命令されたノヴェラとフォーラが兄妹で番つがっているか、ノヴェラの白い肌をボスが陵りよう辱じよくしているか、そのどちらかが寝室で行われているのに疑問の余地はない。

　テーブルに飲みさしのショットグラスが置かれている。

　手を伸ばしてそいつを飲み干した。それでも、胸につかえた汚お物ぶつのような不快感は取れなかった。

　マフィアは性的な逸いつ脱だつをしてはならない。それは、この国

のマフィオーゾなら誰でも知っている基本中の基本だ。誇り高き男たちは、決して倒とう錯さくした趣味を持たない。

　仮面の男マスケリーノはそれすら守るつもりがないのだ。彼はマフィアの法すらも、学生が門限を破るように捻ねじ曲げてしまう。それを楽しめるボスの神経はアレッシオの理解を超えていた。

　ボトルを取り、次の一杯を注ぐ。

　理解できないことには関わるな。それは生きていくための教訓だ。だのにアレッシオはいま、仮面の男マスケリーノのファミリーに入ろうとしている……。

　仮面の男マスケリーノが応接室に姿を現したのは、二十時を回ってからだった。朝と同じように、ルームサービスで取り寄せた酒と料理がテーブルの上を占せん領りようし、食器の合わさる金属音がひっきりなしにする。

　ボスはフォーラの写真を見ながら夕食を楽しんでいた。

「アレッシオ、お前ならどれに大賞を与えるかね。『母なるセレス』もなかなかに傑けつ作さくだが、私はこの『ガイアの蝎さそり』が好きなのだよ。四本足で尻尾しっぽもないのに、関節ひとつ増やすだけでこれだけの不安定感を醸かもし出し、毒虫に見えてしまうのだからな」

　いったい仮面の男マスケリーノはどういう人間なのだろう。話しぶりからして、フォーラはもともと彼の所有物だったようだ。フォーラの帰還をあれほど喜んだ仮面の男マスケリーノが、彼女を化け物にした技師の腕を同じ口で褒ほめちぎっている。

「俺に芸術は分かりませんよ」

「お前は女が好きだろう。ならば芸術も分かるはずだ。さあ、どうだね」

　仮面の男マスケリーノの背後から、ノヴェラとフォーラの視線がアレッシオを捉とらえている。朝は仮面の男マスケリーノの奇き抜ばつな格好に目を奪われて気にも留めなかったが、二人のためにしつらえたであろうゴシック調の衣装が実によく似合っている。

「俺なら、こいつを選びます」

　写真ではなく、仮面の男マスケリーノの背後に立ったフォーラを指差した。

　あらためて、自分の仕事の成果を見る。頭の上に漆しつ黒こくのリボンを結び、丈たけの短いフリルだらけのドレスをまとったフォーラは、男の目を惹ひかずにおかない造形をしていた。柔にゅう和わな表情のノヴェラに比べ、その瞳は挑発的で男を値踏みしているようでもある。アレッシオの答えが嬉しかったのか、フォーラは満面の笑みを浮かべた。

「なるほど、なかなかに卓たつ見けんだな。職人どもは無む駄だな手間をかけたのだ。そしてお前もフォーラの美しさに魅み了りようされたというわけか」

「まさか、ボスの女に」

「構わんよ、私もフォーラは美しいと思っている。しかし困ったことがあるのだ、アレッシオ。フォーラの円筒シリンダがおかしいのだよ。こいつは脳みそがおかしいというのと一緒だ、意味は分かるな」

　ムニエルにされた魚の切り身を丸ごと飲み込んだ仮面の男マスケリーノが、手をぽんと打つ。

　つまりそれは気がふれているということだろうか。確かに、ここに向かう車中のフォーラは、魂たましいが抜けたようになっていた。

「もうずいぶんと前からのようだが、時として奇妙な振る舞いや言動をすることがある。こいつを元に戻す必要があるのだよ」

「ここがベルモントで幸いしましたな」

「いやいや、さにあらずだアレッシオ。こいつはどんな腕のいい時計技師でも直せないのだよ。彼女の譜面スコアはそのへんの骨董人形アンテイークとはわけが違うのだ。指揮棒バツケツタを振り回すことしかできぬ技術屋が、なんの役に立つものか。連中など、手て斧おの一丁で樹海に立ち向かう非力な樵きこりと一緒だよ」

　腹に仕込まれた円筒シリンダが、自動機械人形オートマタの脳であり心臓でもある。人形に異常が現れたときは、技師が『指揮棒バツケツタ』と呼ばれる専門の道具で円筒シリンダを調律し、正常な状態に戻してやるのが定じよう石せきだ。

　だが、定石崩くずしは仮面の男マスケリーノの常じよう套とう手段だ。ボスは何を考えているのだろう。人形に精神科医でもつけるのだろうか。医者なんていう連中は、患者の症状を見て薬を出すのがもっぱらの仕事で、自動機械人形オートマタの役に立つとも思えないが。

「私は、フォーラを直すことができるのはノヴェラだけだと思っている。彼らは自動機械人形オートマタだが、下手な人間の兄妹よりも遥

はるかに結びつきが強いのだ。フォーラにとって、ノヴェラはなくてはならない存在なのだよ」

「ならば、それが良いかもしれません」

　半ば本音で追つい従じゆうした。確かにノヴェラは妹思いだ。人形に人形の治療をさせるというのも、あながち的まと外はずれではない気がする。

「アレッシオ、拳銃は七丁と言っていたな」



　仮面の男マスケリーノは急に話を変えた。

「はい、まだほんのガキが五、六人いますが、幼すぎて危険です」

「そうか、ならば九丁用意しよう。ノヴェラとフォーラを弾丸パロットラに入れることにする」

「は？」

「二人の面倒をよろしく頼むよ、アレッシオ。銃の調達までしばらくかかるが、その間に厄介ごとがあるようならお前が力を貸してやってくれ」

「待ってください、ボス」

　アレッシオの腰がソファーから浮いた。朝と話が違っている。仮面の男マスケリーノはソースの油に汚れたフォークを指揮棒バツケツタのように振るい、アレッシオの胸もとに突きつけた。

「世の中には段取りというものがある。これが最後だよ、アレッシオ」

iv

　手の中に怪物がいる。

　そいつの咆ほう哮こうには人を殺す力がある。

　アレッシオは怪物を操ることで人生を切り拓ひらいてきた。それはおそらくこれからも続くのだろう。街の底から這はい上がるためにも、怪物の力は必要だ。

　作業台の上で分解された拳銃は、五つのパーツに分かれている。スライドから分離した銃じゆう身しんは綺き麗れいなもので、一度も火薬を炸さく裂れつさせたことのない新品の自動拳銃オートマチツクだと分かる。

　あるとき、こいつが吼ほえて人が倒れる。いくつかの希望だの愛だのをひっくるめて、命と一緒に断絶される。その日のために、アレッシオは念入りに手入れをする。

　手の中の怪物を制せい御ぎよする。

　どうやらそれが、アレッシオのイメージする射撃というものの正体だ。

拳銃は怪物ではない。手も怪物ではない。拳銃を握った手が目標に向けられた一瞬だけ、こいつは怪物に変わる。

部品ごとに、ひと通りの点検をしてから組み直す。ボスからもらったアメリカ製は扱いやすいのだろうが、どこかよそよそしくて好きになれない。それを片付けてから、ひと回り小さい自分の銃をばらし始める。

M84□□こいつとは、アレッシオがマフィオーゾと呼ばれるようになった頃からの、もう十年近い付き合いだ。古い拳銃だが手に馴な染じんでいる。

仮面の男マスケリーノがよこしたアメリカ製に比べると、火力は若じやつ干かん小さい。だが戦争に行くわけではないのだ。頭ず蓋がい骨こつを撃ち抜き、脳みそを吹き飛ばす仕事なら、これで充分にこと足りる。

またガキのお守りをすることになってしまった。

アレッシオは手を休め、汗をぬぐった。エアコンもないねぐらに、あと何ヶ月縛しばられるのだろう。いい加減にガキのお守りにはうんざりしている。

しかし報ほう酬しゅうは希望通りの金額をもらった。しめて三百万ヴィンチ、これで当分はガキどもを食わしてやれるだろう。

うんざりしながらも、気がつくと連中を食わせることを考えている。自分はここのガキどもを疎うとんじているのか、それとも守りたいのか、その矛む盾じゅんをアレッシオはもう長いこと抱えている。

銃の調達は遅れそうだが弾薬だけは届けられた。国内の一般流通が禁じられている９ミリパラベラム弾を詰めた香辛料の木箱が二つ、しめて二千発だ。仮面の男マスケリーノは子供たちに市警察でも襲わせるつもりなのだろうか。

「下に降りろルーカ、少し教えてやる」

ドアの向こうに声をかけ、銃を組み立てた。

もらった弾薬はルーカを鍛えるのにも役立ちそうだ。空の弾だん倉そうに９ミリ弾を詰め、非常階段から外を覗のぞく。錆さび色いろのステップから見下ろすと、ルーカはもう裏の空き地でアルミ缶かんを狙っている。高所の苦手なアレッシオは、わざわざ遠回りの内階段から裏庭に出た。

「アレッシオ、あの淫売プッターノを引き受けたのかい」

「銃を構えたら余計なことを考えるな」

　持ってきた弾倉を手渡してやる。銃声がしたが、塀へいの手前に置いたアルミ缶は微び動どうだにしなかった。二発目は積まれた古タイヤにぶち当たる。

　三発目も外れた。真っ昼間に銃声があっても、スラムの連中は顔すら出さない。ここはベルモントの下町、ランビキ地区の西側だ。観光客が決して足を踏み入れない、街の再開発から取りこぼされたゴミ溜だめだった。

「人形は一時的に預かっただけだ」

「そう聞いて安心したよ。人形を俺たちの仲間に入れろなんて言われたら、どうしようかと思ってた」

「ボスはそうしたい口ぶりだったがな」

「冗談じゃないぜ、あいつら薄気味悪いったらねえよ」

　ルーカの弾がまた外れる。アレッシオの真ま似ねをして空き缶を狙うなど、十年早いのだ。

「だが弾丸パロツトラにとっては飯の種だ、そういうことは心の中で思うだけにしろ。チビどもが真似をするぞ」

「……そうだな、気をつけるよ」

　思ったことをすぐに口にするのは短所だが、素直なところは長所だ。手を添えて射撃姿勢を整えてやる。両足を前後に開き、踏み出した左足の上に両手で構え、引き金を絞しぼる。

　一発、二発、修正した三発目で空き缶が破裂し、中の水が煉れん瓦が塀べいにぶちまけられた。

「やったぜ。どうだった今の」

「筋は悪くない、あとは慣れることだな。さいわい弾薬は山ほど送られてきた」

　次の空き缶をルーカに狙わせながら、アレッシオも新品のＭ９を抜いた。

「その銃も、ボスにもらったのかい」

「そうだ、お前のと同じだ」

癖のないアメリカ製。半分は偏へん見けんが入っている。そいつを片手で構えた。

一発、二発、三発―立て続けに撃つと、反動リコイルが腕を心地よく伝ってくる。射線も悪くない。くすんだ煉れん瓦が塀べいにどす黒い染みの花が三つ咲き、ルーカがため息をついた。

「さすがだね、アレッシオが撃つのを見てると途方にくれちまうよ」

「商売だから当然だ。お前が俺になることはない」

「わかってる」

アレッシオの真ま似ねをしたルーカは次の一発を片手で撃ち、煉瓦塀の離れたところに穴を穿うがった。照れくさそうに構えを戻し、今度は慎重に引き金を絞しぼる。一発、二発目で水の入った空き缶が宙に舞う。勢いをつけて隣の空き缶にも色気を出す。一発、二発、三発目の銃声で、十五発全てを撃ち尽くした拳銃のスライドが後退し、引き金が引けなくなった。

慌あわてるルーカに銃口を向けた。

炸さく裂れつ音おん！　ルーカがへたり込み、その向こうで標的だった空き缶が弾け飛ぶ。

「実戦ならここで天国だ」

「……地獄だよ、きっと」

天てん狗ぐになりかけた少年の顔が恐怖に引きつり、足が顫ふるえている。

「拳銃なんてのはだいたいでいいんだ。空き缶なんて格好をつけずにタイヤを狙え。実際の標的はそんなものだ。なんだその目は、教え方が気に入らないか？」

「アレッシオ、あんたはガキの頃から独ひとりで生き抜いてきたんだろ。教えてくれる人がいるだけ、俺はラッキーだと思うよ」

なんとか立ち上がったルーカは、教えたとおりに両手で銃を構え、呼吸を整えて古タイヤを狙う。

「上う手まく当てるより、上手く引き付けるのが肝かん心じんだ。どの距離からなら当てられるかを理解しろ。それから撃った数をちゃんと数えておけ」

「うん……」

「珍しいことに弾た薬まだけはある。身体が覚えるまで続けてみろ」

「人形あいつらのおかげかな」

「そう思うなら、大切にしてやるんだな」

　弾だん倉そうを取り替えるルーカを置いて建物に戻る。ここで子供たちと暮らすようになって半年、もう我が家のようになっている。裏庭を見渡せる三階の北側がリッカルドの部屋だ。ノックをして中に入った。

「アレッシオ、ルーカに射撃を教えてたんだな。あいつどうだい？」

「悪くはない、お前も早く身体を治せ」

　リッカルドは熱を出して寝込んでいた。脇腹に風穴を開けられたのだ、しばらくは安静にしなくてはならないだろう。

　アレッシオは、試射を済ませたばかりのＭ９を机に置いた。机の上には経営や株の本が乱雑に詰まれ、広げられたノートには走り書きのメモと数式が書いてある。こんな本を読みながら、リッカルドは自分なりに弾丸パロツトラを食わせることを考えているようだ。

「それはルーカの銃かい」

「いやお前のだ、ボスがよこしてきた」

「本当かいアレッシオ！　すげえや、こっちに取ってくれよ」

　腹の痛みをこらえて、リッカルドはベッドに身を起こした。半年前にボスから譲ゆずられた最初の一丁は、リーダーのルーカにくれてやった。次はリッカルドの番だ。

「物はいい。変な癖もついていないし、使いやすいだろう」

　アレッシオから銃を受け取ったリッカルドが、格好をつけて水平に構えてみせる。

「薬やつ莢きようが上に飛び出すな」

「いけね、そうか」

　普通に持ち直してから、大切な玩具おもちゃを見るような目であちこち観察する。リッカルドを鍛きたえるのには一苦労するだろう。

「けどいいのかい、アレッシオは俺たちが銃を持つのに反対なんだろ」

「反対ってわけじゃない、積極的に賛成できないだけだ。銃を持たなければ別の道があるかもしれない」

　リッカルドが頭を使って金を稼ぐ人間になるのなら、銃は必要ない。そのとき武器を持つのはリッカルドを守る兵隊たちだ。

「忘れるな、こいつはあくまでも護身用だ。命に危険がない限り、無闇に抜くものじゃない」

「わかったよ、アレッシオ」

「持ち歩くなら人に見つからないようにするんだ。非合法だからな」

「面倒だね」

「同感だ」

　リッカルドはにっと歯を見せて、いつもの人ひと懐なつっこい笑顔になった。親友同士でもルーカとリッカルドの気質はずいぶんと違う。ルーカには前に進もうとする荒々しさがあり、リッカルドには包み込むような安心感がある。

　弾丸パロツトラの誰もが、優しくて頭の切れるリッカルドが好きで彼を頼っていた。しかしリッカルドが信頼を寄せる相手はルーカひとりだ。ルーカが弾丸パロツトラのリーダーをやっているのには、そういう事情がある。

　ドアが開いてリタが入ってきた。手にはニコロの作ったスープを持っている。

「親父バーボ、もうみんな下で待ってるわ」

「飯を食ってゆっくり休めば、じきによくなる。あとは頼んだぞ」

　リッカルドとリタが親指を立ててみせる。アレッシオは一階の食堂に降りた。

　弾丸パロツトラのアジトは、もともと食堂トラツトリアのあった建物だ。スラムの西側にある石造りの三階建てで、少し足を伸ばすとランビキ地区の外に出られる。その立地にボスが目をつけ、安値で買い取ったものだ。

『トラットリア・カプレット』と彫られた一枚板の看板を気に入ったボスは、弾丸パロツトラのアジトをここに決めた。一階は大きな石いし窯がまのある広い厨ちゆう房ぼうと食堂、二階が従業員の部屋で、三階をアパートにしていたようだ。今ではアレッシオを含めた弾丸パロツトラの全員が、ここに身を寄せている。

　食堂に入ると、クロワッサンの香ばしい匂においが鼻をくすぐった。テーブルを囲んだ子供たちは、食事の始まるのを待ちわびていた。

「親父バーボ！　早く来てくれないと腹ぺこだよ」

「だめだぞ、親父が先だから食うなよ、待ってろよ！」

　弾丸パロツトラのメンバーはみな、首から銃弾のネックレスを下げていた。これがメンバーの証あかしなのだ。彼らはアレッシオのことを、親しみを込めて親父バーボと呼ぶ。俺はまだ若い、と反論していたのだが、いつの間にか定着してしまった。

　親父バーボの響きにはいまだ慣れないが、アレッシオは笑顔で応えて自分の席に着いた。いくらガキのお守りにうんざりしていても、彼らの前でその顔を見せるのは愚か者のすることだ。

　アレッシオと同じテーブルに、ノヴェラとフォーラの姿があった。二体の美しい骨董人形アンティークは、みすぼらしい子供たちの中で明らかに異彩を放っている。

「おはよう、ご主人様」

「おはようございます、殺し屋さん」

　よく似た声の二人が、勝手な名前でアレッシオを呼ぶ。深くは取り合わず「おはよう」とだけ返しておいた。子供たちの好奇に満ちた視線が集まってくる。骨董人形アンティークと一緒に食事をするなど、みんな初めてなのだ。

　食堂に集まった弾丸パロツトラは、ほんの小さな子供ばかりだった。十歳に満たない者も半分くらいはいる。親に捨てられた者、家族を殺された者、彼らが孤児になった理由はまちまちだが、みな麻薬ドウローガによって家族を失った連中だ。ルーカとリッカルドも同じで、弾丸パロツトラが麻薬に手を出さないのにはそういう事情がある。

「親父バーボ、早く食べちゃっておくれよ。みんな腹を減らしてるんだ」

　厨房で忙しそうに働いていたニコロが顔を出した。両親の大衆食堂タベルナを手伝っていたニコロが仲間になってから、弾丸パロツトラの食糧事情は好転した。埃ほこりをかぶっていた食堂の石窯に、火が入るようになったのだ。

　子供たちは、アレッシオが料理に手をつけるまで食事をしない。ア

レッシオが自分のために焼かれた肉料理にナイフを入れると、みんな一斉にクロワッサンに手を伸ばした。フォーラはまるで外食に訪れた客のようにぱちんと指を鳴らしてニコロを呼び寄せた。

「私はフルーツでいいわ」

「フルーツ？」

「ええ、パンは食べないの。覚えておいてちょうだい」

　子供たちの視線がフォーラに注がれる。

「だめだよフォーラ、わがまま言ったら」

「あら私は昔からそうでしょ。ね、ご主人様？」

　テーブルに肘ひじをついたフォーラは、組んだ両手に顎あごを乗せたポーズでアレッシオに媚こびを売ってきた。

「買っておいたオレンジがあっただろう、切ってくれ」

「分かったよ、親父バーボ」

　ニコロが大人しく厨ちゆう房ぼうに戻っていった。食堂の子供たちは不思議なものを見るような顔で自動機械人形オートマタの兄妹を眺めている。兄のノヴェラが申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません、フォーラはこういう性格で……」

「構わない。その分の料金もボスからいただくだけだ。お前は食わないのか？」

「ええ、平気です」

「食べる仕組みがないのか？」

「違います。食事をするのが苦手なだけで……」

　そこまで言ってノヴェラは口ごもった。

　フォーラはフルーツのみの極端な偏食で、ノヴェラは食事そのものを摂とろうとしない。人形は食物から動力を得るわけではないから、べつに不思議なことではなかった。街にごろごろしている電気式イミテーションは食事そのものができない。高価な骨董人形アンティークの中に、消化機構を持つ個体がいるというだけのことだ。

「ご主人様、ノヴェラは肉や魚を食べるのよ」

「昔のことだよ」

「あら、そうだったかしら」

　オレンジを口に運びながら、フォーラは何度かピンクの舌を覗のぞかせて唇をぺろりと舐なめた。そのつど、探るような視線をアレッシオに送ってくる。

　狂った人形の色目に浮かれるほど若くはない。フォーラの挑発など全て無視すればすむことだが、敏感な子供たちは気になって仕方がないようで、赤くした顔でこっちのテーブルをちらちらと覗いてくる。あちこちからの視線がうるさくて食事を楽しむどころではなかった。

「ごちそうさま、美お味いしかったわ」

　オレンジだけをぺろりと平らげたフォーラが、ナプキンで唇をぬぐった。彼女が視線を気にしないのは見られるのに慣れているからか、それとも見られていることが分かっていないのだろうか。

　ところが食事を終えたフォーラは、とたんにそわそわと落ち着きをなくした。

「居心地が悪ければ、先に部屋に戻っているといい」

「そうね、そうさせていただくわ。ここは使用人のいる場所ですもの」

　ほっとした表情を浮かべ、優雅な仕草で席を立つ。フォーラは妹のくせに、ノヴェラを家来のように従えて食堂を出て行った。

　映画スターのように振る舞う彼女を、食堂の少年たちが眩まぶしそうに見送った。弾丸パロツトラは紅一点のリタを除いた全員が男子だ。フォーラを淫売人形プツターナだと思い込んでいる彼らの視線には、物珍しいものを見る好奇心と、異性に対する欲望がないまぜになっている。

　二人が食堂を出て行くと、子供たちは朝食のジャムクロワッサンを手にしたまま、アレッシオのテーブルに集まってきた。

「まさか骨董人形アンテイークが、俺たちの食堂ねぐらに来るなんて思わなかったよ」

「あの男娼プツターノを売り飛ばせば、十年は遊んで暮らせる金が入るらしいぜ」

「ルーカが言ってたけど、二人とも頭がいかれてるんだって？」

「骨董人形アンティークは、裸になっても人間そっくりだって本当？」

「ああ、本当だ」

「アレッシオは見たいのかい、あの生意気そうなお嬢さんの裸をさ」

「下らん勘ぐりはやめて稼ぎに行ってこい。リッカルドがいないからって怠なまけたら、食うものも食えなくなるぞ」

　子供たちを追い払ったフォークで、皿の肉料理にとりかかった。鴨かも肉にくとはいかなかったが、鶏とり肉にくのローストに仮面の男マスケリーノのようにかぶりつく。白い肉をかみ締めると熱い肉汁が口の中で弾け、淡白な鶏肉に絡みながら喉のどに落ちていく。ニコロは石いし窯がま料理の名人だ。

「親父バーボはいつもよく食べるね」

「食事の快楽は存分に楽しむのがマフィアの流りゆう儀ぎだ、お前らも残すなよ」

　仮面の男マスケリーノほどではないが、アレッシオも健けん啖たん家かだった。

　命を危険に晒さらして生きるマフィアの男たちだが、賭と博ばくや麻薬ドウローガでは遊ばない。倒とう錯さく的な性交に耽ふけることもない。それらは組織にとってマイナスでしかないからだ。そのかわり、食事だけは妥協せずに楽しむのだ。

　マフィアの男たちは、皆が美食家であり大食漢だ。アレッシオは最初に世話になったマフィオーゾからそれを教わった。こうしたことは、上から下へと代々受け継がれてゆくものだ。

　そういう話をするたびに、子供たちは羨せん望ぼうの眼差しを向けてくる。彼らにとってのマフィアは、サッカークラブのスター選手と変わらないのだ。屈折を知らない瞳がアレッシオには眩まぶしすぎた。急いで肉をかっ込むと、クロワッサンでソースを残らず掬すくって口の中に放り込む。アレッシオは立ち上がり、ニコロの肩を叩いた。

「いい腕だ、今け朝さの鶏も最高だった」

「ありがとう」

　ニコロが照れくさそうに親指サムを立てる。『トラットリア・カプレット』は、ニコロのピザの注文を取ることで稼ぎを得ている。人数

の増えた弾丸パロツトラには欠かせない収入源だ。

「親父バーボ、あの二人はいつまでここにいるんだい？」

「さあな、なるべく早く出て行ってもらうさ」

「おいらたちは構わないよ、親父バーボがそう言うんなら」

　煌きら々きらとした瞳で見つめられ、アレッシオは逃げるように食堂を後にした。

　階段を昇りながら舌打ちをする。いつもこうだ。ガキどもは何を間違ったのかアレッシオを慕ってくるが、その居心地の悪いことといったらない。眩しい太陽の下に出されると、アレッシオは何をすればいいのか分からなくなるのだ。

　子供は嫌いではないし、確かにボスにもそう伝えた。しかしそれは、死線に身を置いた男がつかのまの平和に触れるような存在だったからだ。銃を捨てて保父になりたいと思ったことなど、一度たりともない。

　子供たちの綺き麗れいな瞳は、野良犬には似つかわしくない。哀れな孤児たちに手を差し伸べるのは、仮面の男マスケリーノのような力を手に入れてからでよかった。そのためにも早くボスに認められ、このスラムを抜け出すことだ。

「なんだ俺は、二十歳はたちやそこらのガキじゃあるまいし」

　子供たちに罪はない。しかし彼らと一緒にいると、欲しくもない安息を押し付けられているようで、青二才じみた焦しよう燥そう感がこみ上げてくる。

　射撃の腕だけで裏社会のトップに立つことはできない。

　そのくらいは分かっている。アレッシオは頭領カーポになりたいのではなく、自分を燃やし尽くせる場所を求めているだけだ。

　つまりは、オルマ・ロッサの殺し屋のようになりたかったのだ。

　オルマ・ロッサ──すなわち『赤い足跡』という名の組織を知らない殺し屋はいない。

　正体は謎なぞ、行動は迅じん速そく、結束は巌いわおの如く、狙った獲物は必ず殺す。

　北部に古くから勢力を持つこの組織は、死刑執行人として多くの犯罪組織からの信望を集める暗殺集団だ。アレッシオのように腕を恃た

のみにする殺し屋にとって、オルマ・ロッサの響きは羨せん望ぼうだった。マフィアに関わった人間の誰もが、その名前に憧あこがれを抱く。

そうなりたくて、この北部に流れてきた。

謎多き組織としても知られるオルマ・ロッサは、血のつながらない野良犬をファミリーに加えたりしないだろう。それでもアレッシオが北部を目指したのは、本物を身近に感じたかったからだ。この国の南部は大組織による勢力分布が完成し、人脈と経済に支配された世界だった。金銭が他のあらゆる価値を駆く逐ちくし、拳銃一丁腰にぶら下げた風ふう来らい坊ぼうは、出る幕どころか人としての尊そん厳げんすら認められなかった。

北部で畏い敬けいを集めるオルマ・ロッサは、経済マフィアとなった南部の組織が失くした、誇りの美学を残している。アレッシオは、そんな誇り高い男たちのなかにこの身を置いてみたかった。彼らの仲間になるのではなく、ひとりの男として彼らに相あい対たいしたかった。自分が本当に望む景色は、その先にあると信じていた。

半数は戦力にならない弾丸パロツトラの少年たち、ニコロのトラットリア・カプレット、若いルーカとリッカルド、それに右手の中の怪物。これがアレッシオの持つ全てのカードだ。そこに二枚、訳の分からない骨董人形アンティークが加わった。これらのカードをどう切るか、アレッシオは考えなくてはならない。

ボスからの命令はノヴェラとフォーラを預かることだった。その言葉を額面どおりに受け取って無む為いに日々を過ごしては、仮面の男マスケリーノに軽んじられるだろう。

大きく息をついた。

自分の置かれた状況を整理する──それは生きるために必要なことだが、こうも先が見えないと頭が重くなる一方だ。窓を開けて一服することにした。

馴な染じんだ拳銃を手の中で玩もてあそぶ。視界の隅ではノヴェラが廊ろう下かにモップをかけている。

命じられたわけでもないのに、ノヴェラはこの食堂トラツトリアに来るなり掃そう除じを始めた。はたきをかけ、箒ほうきで掃き、モップで拭ふいて、最後に雑ぞう巾きんで磨みがく。仮面の男マスケリーノに仕込まれたのだろうが、その執しつ拗ようさは綺き麗れい好きというよりも掃除マニアと呼ぶほうが正しそうだ。

「話がある、そこを拭き終わったら来てくれ」

アレッシオはノヴェラを自分の部屋に呼びつけた。

モップを片付けたノヴェラは、流しの前でこれまた執拗に手を洗いだした。ごしごし、ごしごしと、石せつ鹼けんを何度も泡立てる。自動機械人形オートマタの白い皮ひ膚ふをさらに漂白するつもりだろうか。

「早くしろ」

慌あわてて手洗いをやめたノヴェラが、アレッシオの部屋に小走りで入ってくる。背筋をぴんと伸ばして椅い子すに座った。拳銃を机に置いたアレッシオは、診察室の医者と患者のようにノヴェラと向き合った。

「今日からお前と妹を預かることになったが、合が点てんの行かないことがいくつかある。ほんの些さ細さいなことだ。これから上う手まくやっていくためにも、質問に答えてもらいたい」

ノヴェラは黙ったまま、緑柱石スメラルドの瞳でアレッシオを見ている。

「聞こえているのか」

「はい」

「そういうときは返事をしてくれ。俺は人間のことは分かるが、人形の考えることは分からないからな」

「はい、お答えのできるものについてはそうします」

「どういうことだ」

「主人パドローネから、余計なことを言うなと命じられています」

想定の範囲内だ。仮面の男マスケリーノが指にはめた瞳石ジエンマの煌きらめきは、まだ目の裏に焼きついている。

「余計かどうかを判断するのは誰だ」

「僕です」

「おかしいじゃないか、情報を漏らすも守るもお前の自由意志ということか」

「意志ではなく、判断です」

「同じことだ、骨董人形アンテイークにだって自我はあるだろう」

どんな判断にも主観が入り込んでくる。そう言ったつもりだったが、ノヴェラはきょとんとした顔でアレッシオを見つめた。

「僕には自我がありますか？」

緑色の瞳を丸く見開いて繰り返す。

「殺し屋さんには、そう見えますか？」

「分からんよ、お前のことを俺はまだ何も知らないんだからな」

「……そうですね、すみません」

ノヴェラが人形のように長い睫毛まつげを伏せる……いや、こいつは人形なのだ。あまりに精せい巧こうに作られすぎているから、人間と話しているような錯さつ覚かくに陥おちいるだけだ。

「骨董人形アンテイークには自我があるんじゃないのか」

「そう言われていますが、僕には分かりません」

「分かった、その話は長くなりそうだから本題に戻らせてくれ。まず、お前の目的はなんだ。それを教えてくれ」

「フォーラの異常を元に戻すことです」

「それだけか」

「ここにいることの目的はそれだけです」

彼らが食堂トラツトリアに来て、わずか半日だ。その間にもフォーラは何度か意識を失った。気絶をするのではなく、目の前に何も存在しないかのように表情と動きを止めてしまうのだ。仮面の男マスケリーノが言ったように記憶もちぐはぐで、ここがどこなのかも分からないときがある。

「フォーラのあの症状はいつからだ」

「答えられません」

「ときどきお前を無視するのはなぜだ」

「僕を嫌っているのかもしれません」

「嫌われる心当たりはあるのか」

「分かりません」

「フォーラに自我はあるか」

「分かりません」

「嫌っていると言ったじゃないか」

「それが自我ならば、自我はあります」

「兄のお前にはないのか」

「分かりません」

「どうしてボスはお前たちをこんなスラムによこした。もっとましな環境があるだろう」

「分かりません」

「フォーラの異常とは何だ。具体的にはどこに異常がある？」

「円筒シリンダの楽譜スコアです。人間にとって脳にあたる部分です」

「本当に技師には治せないのか」

「できませんでした」

「お前になら治せるのか」

「分かりません」

「治ったら、フォーラはどうなるんだ」

「以前のように戻ります」

「それを具体的に教えろ」

「答えられません」

「ボスはお前たちを人間にしたいと言っていた。それはどういうことだ」

「分かりません、答えられません」

「フォーラは昔からボスの物だったな」

「はい」

「その前の持ち主は誰だ」

「答えられません」

「ボスはフォーラを元に戻してどうするつもりだ」

「答えられません」

「また売り飛ばすのか。それとも娼しよう館かんにでも貸し出すか？」

「分かりません」

　深呼吸をして間を空けた。

　それは質問というよりも尋じん問もんに近かったが、おかげで話は早かった。

「フォーラが俺のことを『ご主人様』と呼ぶのはどうしてだ」

「分かりません。記憶が混こん濁だくしているのかもしれません」

「ボスは大量の拳銃と弾薬を俺たちに持たせようとしている。お前たちを預かることに関係はあるか？」

「答えられません」

「お前は仮面の男マスケリーノが好きか？　嫌いか？」

「……答えられません」

「これで最後だ、俺たちに手伝えることはあるか」

「分かりません」

　質問を打ち切った。予想はしていたが、ノヴェラから欲しい情報を得ることはできそうにない。フォーラの治療は、彼らのペースに委ねるしかないということだ。

「矢や継つぎ早ばやにすまなかった。フォーラを治すところを見学させてもらえるか？」

　性急な詮せん索さくは命取りになる。もう少し自動機械人形オートマタの兄妹を観察する必要があるだろう。優しい声で訊たずねると、ノヴェラは少し考え込むような仕草をした。

「それも駄目か」

「いえ、フォーラの気が散るのが心配だったのですが……構いませ

ん」

「いいのか」

「フォーラは殺し屋さんのことを気に入っているようです。なにか回復の糸口が見つかるかもしれません」

　アレッシオはノヴェラに続いて、兄妹のために用意された三階の角部屋に入った。この建物の中で食堂の次に広い部屋だが、窓枠にひびが入っていて隙すき間ま風かぜがひどい。寒さを感じない人形にはうってつけの部屋だった。

　フォーラは手鏡に向かって髪の毛を梳すいていた。ノヴェラが部屋に入っても見向きもしないが、鏡越しにアレッシオを見つけるとくるりと振り返り、からかうような笑みを浮かべる。

「ご主人様は、いつでも黒ずくめなのね」

「おかしいか？」

「ううん、黒髪がとても似合っているわ。悪魔デイアボロツォッポみたい」

　御お伽とぎ話ばなしのずる賢い悪魔に喩たとえられ、アレッシオは苦笑した。横からノヴェラが口を挟む。

「フォーラ、お話の時間だよ」

「あとにして、いまはご主人様とお話したいわ」

「だめだよフォーラ。いまじゃないとだめなんだ」

「あとがいいって言ってるのに……」

　眉まゆを寄せたフォーラだが、ノヴェラが黙って見つめるとふてくされたように下を向いた。

「もう、ノヴェラはいっつもそう！　頭が固いのよ、まるで自動機械人形オートマタみたい」

　観念したようにノヴェラの向かいに腰を下ろす。ノヴェラの治療を拒絶してはならないと、仮面の男マスケリーノに命じられているのかもしれない。

　すぐに準備が終わり、フォーラの治療が始まった。

　それはアレッシオが想像していたものとは、ずいぶんと異なる作業

だった。

　仮面の男マスケリーノに持たされた大きな鞄かばんから、四角い箱のような機械を取り出したノヴェラは、それを膝ひざの上に置くと左右についているベルトに手を通した。箱の中央は蛇じや腹ばらになっていて、左右にたくさんのボタンが付いている。電気的な機械ではなく、バンドネオンという楽器だ。

　椅い子すに腰掛けたノヴェラが、両膝に乗せたバンドネオンの蛇腹ベローを動かすと、アコーディオンオルガンに似た、哀調のある音色が流れてきた。夜のドゥオーモ広場に繰り出せば、電気式イミテーションの自動機械人形オートマタ楽団による観光客向けの生演奏を聞くことができる。しかし骨董人形アンテイークが演奏する姿を見るのは初めてだ。

　蛇腹ベローを動かして音を鳴らすバンドネオンが、同じ仕組みのアコーディオンと決定的に違うのは、鍵けん盤ばんを使わないということだ。左に三十五、右に三十七、一見不規則に並んだように見える七十二個のボタンを押すことで音階が生まれる。ボタンの操作は難解だが、これらは複雑な和音を生み出しやすく計算された配置だった。

　無数のボタンを操るノヴェラの腕前は名人と言ってよかった。正確な動きが身上の自動機械人形オートマタにとって、バンドネオンはおあつらえ向きの楽器なのかもしれない。

　寂しげな音色が食堂トラツトリアを流れる。バンドネオンの調べに誘われたリッカルドが、リタに支えられながら部屋に入ってきた。アレッシオの隣に腰を下ろして弾んだ声を出す。

「やっぱりすげえ美人だね、骨董人形アンテイークのお嬢様はさ」

　フォーラはうっとりと目を閉じて演奏に聞き入っている。蛇腹ベローを動かしながらノヴェラは妹に話しかけた。

「君の名前は」

「知っているでしょう、フォーラよ」

「僕は誰？」

「ノヴェラよ」

「僕は君の何？」

「弟だわ」

「違うよ、僕はお兄さんだ」

「いいえ、弟だわ。だって背が低いもの」

「初めて会ったときのことを覚えている？　白い屋根の教会だった。庭にはたくさんのデイジーが咲いていて、木の枝には鳥の小屋もあった」

「ブランコもあったわ。ロープで吊つるしたブランコよ」

「君はブランコを漕こいでいて、僕はそれを見ていた。僕の後ろには背広姿の大きな紳士がいて、僕を君に紹介したよ」

「弟のノヴェラよ」

「違うよ、フォーラはブランコから降りなかった。僕にブランコを貸してくれなかった」

「だって私は妹だもの、ノヴェラが遠えん慮りよしたのよ」

「僕は君の何？」

「………………兄だわ」

　フォーラが悔くやしそうに唇を噛かむ。

　交わされた言葉の数は多くなかったが、バンドネオンの演奏に乗せたやりとりは十分近くに及んだ。

「俺はてっきり、指揮棒バツケツタで円筒シリンダをいじり回すのかと思ってたよ」

　あてが外れたと言いたげにリッカルドが耳打ちをする。円筒シリンダを直接修理するには、フォーラを裸にしなければならない。

「これが治療なのか」

「はい、専門の技師が指揮棒バツケツタによる調律を幾度となく試みましたが、フォーラには手の施ほどこしようがありませんでした。あとは対話による治療しかないというのが主人の出した結論です」

「その方法は誰に教わったんだ、ボスか？」

「答えられません」

　ノヴェラが再びバンドネオンの演奏を始めた。フォーラは催さい眠みん術じゆつにかかったように目を閉じたままだ。



　自動機械人形オートマタの円筒シリンダ内部では、水銀が循じゅん環かんし、無数の小さな歯車が回り続けている。それは脳と心臓の働きを兼ね備えたものだ。ノヴェラの治療は、演奏と対話によってそこに刺激を与えるものだった。歪ゆがんだ構造の歯車を、カチリと正確に組み直してやるように語りかける。歯車の乱れを元に戻してやることで、記憶の混乱が治まるのだろう。

　姉と弟の関係を正したあとは、仮面の男マスケリーノにまつわる思い出の整理が始まった。バンドネオンでフォーラの言葉を引き出し、もつれた部分を丁てい寧ねいに解きほぐしてやる。

「案外あっけなく片付いちゃうかもな」

　拍ひよう子し抜けしたようにリッカルドが呟つぶやいた。アレッシオには理解しがたいからくりだったが、ノヴェラの治療は順調に進んでいるようだ。この調子でフォーラの記憶が回復していけば、彼らの逗とう留りゆうは短いものになるかもしれない。

「フォーラのご主人様は誰？　名前ではなくニックネームで答えて」

「仮面の男マスケリーノよ」

「彼はどんな人？」

「優しくて、逞たくましいわ。私のことも弟のことも大切にしてくれるの」

「弟って？」

「ノヴェラのことよ」

「違うよ、僕はお兄さんだ」

「いいえ、弟だわ。だって私より顔が幼いもの」

　フォーラが自信ありげに言い放つ。

「……こりゃ、長くかかりそうだね」

　リッカルドが肩をすくめてみせた。

V

　アレッシオは酒好きだが、三度の食事はしっかりと摂とる。食事を楽しむことと身体を動かすことは、この世界で生きるために欠かしてはならないことだと教わってきた。

夕方の食堂には子供の声が溢あふれている。甲かん高だかい声の合間を縫ぬうようにして、三階からバンドネオンの調べが届いてきた。ノヴェラが食事もせずにフォーラと向かい合っているのだ。

「あいつ、食べられないのかな」

口の中をパスタだらけにしたアレッシオと一緒に、ルーカが階段の上を眺める。

「なにか持って行ってやるか」

「俺はちょっと苦手だよ、人形のことはリッカルドに任せてるんだ」

「怖いのか」

「怖くなんかねえけどさ、いきなり襲い掛かってきてもおかしくないぜ、あいつら」

「それを怖がってるって言うんだ」

「そういう意味の襲うじゃなくてさ……」

そっぽを向いたルーカが大皿のパスタにがっつく。苦笑したアレッシオは、パスタとサラダ、それからフルーツを適当に取り分けて、三階に上がることにした。

「夕飯の差し入れだ」

「あら、私に？」

アレッシオが兄妹を交互に指差すと、フォーラは少しつまらなそうな顔をしたが「フルーツは私のね」と果くだ物ものを皿ごと受け取り、オレンジと葡ぶ萄どうを楽しそうにつまみ始めた。

「お前も食べられるんだろう」

「いえ、でも結構です」

「ガキが作ったものだ、食わないなら理由を教えろ」

「食べても、あとで受け付けなくなるのです」少年の自動機械人形オートマタが寂しそうに笑う。「部屋を汚したら悪いですから」

ホテルの洗面所で嘔おう吐とするノヴェラの姿を思い出した。この潔けつ癖ぺきな骨董人形アンティークは、アレッシオたちに迷惑をかけたくないようだ。

フォーラは楽しそうに葡萄の皮を口の中で剝むいている。

諦あきらめたアレッシオが紙巻きを咥くわえると、ノヴェラはなにを思ったか隣に席を移してきた。ライターを取って火をつけようとする。

「いい、自分でできる」

「けれど、主人から殺し屋さんには良くするように言われています」

チリッとした不快感が首筋に走った。

ノヴェラがアレッシオを見上げている。緑柱石スメラルドの瞳ひとみに官能の色が溶け出して、そいつが黒ずくめの殺し屋を映している。ノヴェラが身体を預けてきた。それがどういう意味かは虫むし唾ずが走るほど分かっている。眉み間けんにしわを寄せて紫煙を吐き出すと、生き真ま面じ目めなノヴェラが駄目を押してきた。

「僕では不満ですか？」

「ふざけるな！」

下から顎あごを押さえつける。初めて触れたノヴェラの肌は、弾丸パロツトラの子供たちと変わりのない柔らかさだ。殴なぐり飛ばしてやってもいいが、こいつはボスの大事な奉仕人形ときている。

いまいましい！　アレッシオは拳のかわりにパスタの皿をノヴェラの前に突き出した。中にはニコロが腕をふるったペンネのアラビア風が、まだ暖かい。

そいつをフォークで突き刺すと、口を開かせたまま強引に突っ込んでやった。じたばたと暴れるのを押さえ込む。アレッシオが手を放すと、ノヴェラはフォークを咥えたままぽかんとこっちを見た。

「何をするのですか？」

「教えてやる、俺の仕事はお前たちを預かることだ。いいか、預かるんであって、売り飛ばすんじゃない！　だから俺はお前らを高価な骨董人形アンテイークとしては扱わない。ガキどもと同じ人間として扱う。分かったら飯を食え。そして下らねえ色目は二度と使うな！」

ペンネのフォークを咥くわえたノヴェラが、殺し屋の剣幕に目を丸くする。

「けんかはだめよ」フォーラの声がした。

「……ごめんなさい」

　しばらくアレッシオを見ていたノヴェラは、ぺこりと頭を下げるとパスタの皿を手に取った。フォークで大人しく食べ始める。口の周りに赤いソースがつくたびに、ノヴェラはナプキンでそれを拭ぬぐった。

　ノヴェラの治療は食事を挟んで、夜が更ふけるまで続いた。

　アレッシオは一日を兄妹に付きっきりで過ごした。ボスから二人の様子を問われるかもしれないし、秘密だった情報がフォーラとのやり取りから洩もれてくるかもしれない。

　兵隊はボスを探ってはならない。しかし、自分たちの暮らす食堂トラツトリアで何が行われているのかくらいは把は握あくしておくべきだ。

　バンドネオンの演奏は途切れない。白い手の指使いを眺めながらスコッチグラスを傾け、シェリー樽たるの匂においのする琥こ珀はく色の液体を舌先で転がした。三百万の報ほう酬しゆうのうち、三分の二はアレッシオの取り分だ。今日ばかりはいつもの安酒でなく二十五年物のボトルを開けた。

「この治療は昔からやっているのか？」

「何度か試したことはあります」

　ゆっくりと酔いが兆してくる。ノヴェラはフォーラの主おもだった発言をノートに記録している。手持ち無ぶ沙さ汰たになったフォーラが、椅い子すごとアレッシオの向かいに場所を移してきた。

「私にもいただける？」

「平気なのか」フォーラではなくノヴェラに聞いた。

「いくら骨董人形アンテイークでも、普通はアルコールに反応する機構など持っていません、平気ですよ」

「なら、お前も飲むか」

「僕は遠えん慮りよしておきます」

　ノヴェラの言葉どおり、フォーラはダブルの氷割りを一息に飲み干した。

「いいお酒ね」

「分かるか」

「もちろんよ、美お味いしいお酒はたくさんいただいたもの」

　ぺろり、アレッシオを見るとフォーラの舌先が動く。そういう癖のある骨董人形アンティークの娼しよう婦ふをアレッシオは見たことがある。男を誘う仕草なのだ。

　黙々とノートにペンを走らせるノヴェラと、スコッチを美う味まそうに味わうフォーラ。並んで座った美しい兄妹を肴さかなに、琥こ珀はくの液体を流し込む。

「物語ノヴエラと御伽話フオーラか……」

「はい？」

「名前は悪くないな、名付け親はボスか？」

「はい」

　兄は『物語ノヴエラ』、妹は『御伽話フオーラ』、こうした単語を人形の名前とすることは珍しくない。生き真ま面じ目めな兄と、奔ほん放ぽうな妹と、それぞれの性格が名前に表れていた。

　だいぶ回ってきたようだ。五万ヴィンチは下らないボトルが、もう半分も空いている。

　ふと、ノヴェラの足元に置かれた、子供の背丈ほどもある大きな鞄かばんが目に留まった。

「見せてもらうぞ」

　仮面の男マスケリーノがノヴェラに持たせたものだ。人形の私物とはどのようなものだろう。止められないのをいいことに、勝手に開けて中を覗のぞき込んだ。

　そこには四種類のものが入っていた。

　一、バンドネオン。

　二、着替え。

　三、ノートと鉛筆。

　四、銀の仮面マスケラ。

　アレッシオはひとつひとつを手にとって眺め回した。

　最初はバンドネオンだ。これが鞄の体積のほとんどを占めていた。

中にあるのはケースだけで、本体はテーブルの上に置かれている。貴重な銀の装飾が施された、美術品のような代しろ物ものだ。

　着替えは、いつもノヴェラが着ている衣装と同じようなデザインのものばかりで、三着分が用意されていた。女物が一着まぎれているのは、何らかの倒とう錯さくした趣向を意図してのことだろう。

　ノートと鉛筆は、フォーラの症状や言動を記録するためのものだ。ノヴェラがいま書き込んでいるほかにも、予備のノートが五冊、鉛筆も二十本ほど用意されていた。いくら自動機械人形オートマタといえども、円筒シリンダに書き込まれた記憶を自由に取り出すわけにはいかないのだ。

　そして、最後の一つが不可解な代物だった。

「こりゃあなんだ？」

　銀の仮面マスケラを取り上げる。ボスの着けているものと全く同じデザインで、大きさだけがノヴェラの顔のサイズに合わせてある。

「主人からは、お守りのようなものだと聞いています」

　この仮面マスケラを自分と思えという意味だろうか。もしそうだとするなら薄気味の悪い愛情だ。

「いざってときは金に換えろってことじゃないのか」

　笑い飛ばすとノヴェラも微笑ほほえんだ。銀の仮面マスケラ、これだけで何百万ヴィンチになるだろう。

　ともあれ、四つの荷物からボスの意図を読み取ることはできそうになかった。ボスがノヴェラを預けたことに、裏の理由などないのかもしれない。弾丸パロツトラを武装させたがっていることも、単なる偶然かもしれない。

　アルコールにやられた頭で、これ以上考えても無む駄だのようだ。

　鞄かばんを元に戻したアレッシオは、椅い子すに戻るとフォーラに向けてグラスを掲げた。

「フォーラと言うなら御お伽とぎ話ばなしを話せるだろう、なにか聞かせてくれないか」

「ええ、もちろん」

　ここからは私が主役だと言いたげに、フォーラが瞳ひとみを輝かせる。

「伴奏はあるかしら。そうね、楽しい曲がいいわ……ノヴェラ！」

「いま忙しいの」

「夜だから伴奏はなしだ」

「あん、ご主人様が言うなら仕方がないわね」

　両手を上げたフォーラは、息を整えると、もったいつけるように咳せき払ばらいをした。

　それから、たっぷり間を置いて口を開く。自分の仕草に注目が集まることを分かっている顔だった。

「せっかくだから、狼おおかみの出てくるお話がいいかしら」

　なにがせっかくなのだろう。ノヴェラが目だけでフォーラの様子を窺うかがう。すぐにソプラノの声が歌うように御伽話を紡つむぎはじめた。

　それは伝統的なグリムの赤ずきんだった。

　お婆ばあさんのところにパンとチーズとワインを持って出かけた赤ずきんが狼に見つかり、狼は先回りしてお婆さんを喰くい殺してしまう。そしてお婆さんに変装して赤ずきんを待ち構えるのだ。目的に対する執しつ拗ようさ、手段を選ばぬ非情さ、そして老婆一人を食べても満足しない貪どん欲よくさは、マフィアにも喩たとえられる。

　フォーラのよく通る声を聞きながら、スコッチウイスキーを舐なめる。お婆さんの家を訪れた赤ずきんと、狼とのやり取りが始まった。大きな目と毛むくじゃらの腕を狼がごまかし、最後は口だ。

「どうしてお婆さんの口はそんなに大きいの？」

「それはね……お前を食べるためさ！」

　この国の子供なら、赤ずきんにいくつかのバリエーションがあることを知っている。狼に食われてから猟師に助けられる話と、猟師が助けに来ない悲劇の話、そして狼に食われる前に逃げ出す話。フォーラの赤ずきんはそのどれとも違っていた。

「お婆さま、貴女あなたの息は臭すぎます」

　真しん珠じゆの瞳で狼を見下ろした赤ずきんは、手にした懐中時計サポネツタを狼に投げつけた。

　銀の鎖に操られた懐中時計サポネツタから鋭い刃が飛び出し、高速

に回転しながら老婆に化けた狼の身体を切り裂さく。まずは両足を膝から切断し、敏びん捷しよう性を奪う。次に両腕を肩から斬きり落とす。銀の攻撃は狼の再生能力を奪う。致命的な逆撃をこうむった狼が苦痛に身をよじった。あとは時間をかけて嬲なぶり殺しにしてやろう、そして……。

「もういいよ、フォーラ」

　ノヴェラが鉛筆で頭を掻かく仕草をした。人形が痒かゆいということはないだろう。いまの物語の間違いをどこから直そうか、途方にくれているのだ。

　それから狼がどんな末まつ路ろをたどったのか、先の話を聞いてみたかったが、アレッシオは黙ってグラスを傾けた。ノヴェラは今の物語をもう一度最初から話させて、間違いを一つ一つ訂てい正せいする作業に取り掛かる。

「どうして食べられなくちゃいけないの？」

「狼が一度勝つんだよ、それから猟師が……」

「嫌よ、狼なんかに負けないわ。それに伏ふく線せんもなしに猟師が出てくるなんておかしいじゃない」

「猟師を出さなくてもいいよ。食べられておしまいの物語でも」

「だから狼に負けるのは嫌だって言ってるでしょう、分からない坊やね」

「僕は君の兄だよ」

「いいえ弟だわ、だって……」

　ダブルのスコッチウイスキーを流し込む。すっかり気分が良くなってきた。もうノヴェラが弟でも構わない気がしている。聞き分けのないフォーラに手を焼きながらも、ノヴェラはなにか確信するものがあるように、バンドネオンで妹の手を引こうとする。

「フォーラの好きな食べ物は何？」

「私は果くだ物ものしか食べないわ」

「狼の好物は何？」

「人の血と肉よ。ノヴェラも肉や魚を食べるわね。だめよ、口に肉の臭いをさせていたら、ご主人様に可愛かわいがってもらえないでしょ。気をつけなさい」

偉そうに説教をして、ノヴェラの鼻頭をツンとつつく。

ベルッチの館からベルモントに戻る車の中で、フォーラは五感の全てを閉ざしたかのように押し黙っていた。ノヴェラが語りかけても返事ひとつせず、その姿は円筒シリンダを抜き取られた人形のようだった。その後、ヴィラ・ベルモントのスイートルームで仮面の男マスケリーノの背後にいたフォーラは、指輪の命令でずっと笑っていた。

それに比べると、今日のフォーラは人間らしく生き生きとしていた。変に艶つやっぽい仕草をするのは困りものだが、ノヴェラとのやりとりからは、気の強い、それでいて無む邪じゃ気きな性格が透けて見える。話の内容はときに辻つじ褄つまがおかしかったが、ノヴェラと一緒にいる彼女の心は安定しているように感じられた。

「フォーラに幸さちあれ」

酔よいに任せてグラスを掲げる。

たとえフォーラが狂っていたとしても、目の前の兄妹は満ち足りて見えた。

vi

「最近またおかしな連中がうろつき始めてるんだ。あんたも知ってるだろう」

「ガキどもか」

「そうさ、最近のガキは大人より始末が悪い。おっと、あんたの所の弾丸パロツトラは別だよ。どいつも可愛かわいい連中さ」

頭を搔かいたバールの店主が、木箱から取り出した黒いボトルを持ち上げた。

「こいつはおまけだ、持って行ってくれよ」

ハイランドの銘めい酒しゆだった。ラベルを見たアレッシオの口元が自然とほころぶ。

「悪いな」

「いいさ、あんたには世話になってる」

店主はレジの底から二枚の紙し幣へいを丸めて、ボトルと一緒にアレッシオに渡した。一万五千ヴィンチ、毎月のみかじめピツツオだ。

みかじめピツツオの集金はマフィアの伝統的な仕事だ。月に一度、

縄なわ張ばりを巡回して各商店からそれぞれ決まった金額を受け取る。かわりに店が騒ぎに巻き込まれたときはマフィアが介かい入にゅうして丸く収めるという仕組みで、いわば保険のようなものだ。組織によっては金だけ集めて知らぬ顔をすることもあるが、仮面の男マスケリーノは古来からの相互関係を重んじていた。

　観光客の歩く表通りの治安は市警察の縄張りで、裏通りの治安はマフィアの縄張りだ。アレッシオも何度か連中のために身体を張ったことがあり、それなりの信頼を得ていた。

「何かあったらガキどもに報しらせなよ」

　親指サムを立ててバールをあとにした。ランビキ地区の建物はどれも薄汚れている。それは古代復興運動の狙いとする時代を経た汚れではなく、煙突や車の排気、整備されていない下水道から溢あふれた生活排水の汚れだった。マフィアに支配された南部に比べれば、北部の経済は安定している。しかしベルモントのスラムは、発展から取り残された貧困層の住む場所だ。みかじめピツツオの収益も、ボスへの上じよう納のう金きんを差し引くとすずめの涙しか残らない。

　裏道を抜けると眩まぶしい午後の陽差しが黒ずくめの殺し屋を照らした。雨宿りをするように商店の軒のき先さきを渡り、また裏通りへと滑り込む。やはり陽差しは好きになれない、いつからこんな性分になってしまったのだろう。

　市場まで足を伸ばし、ニコロに頼まれた大量の食材や調味料、ジュースや酒をまとめ買いした。ボスの送ってきた銃弾は９ミリパラベラムばかりだったので、アレッシオのM84に使う銃弾も補充する。

　車に戻り、ルーカに運転させて食堂トラツトリアに引き返す。この一週間でアレッシオがしたことといえば、ガキのお守りとみかじめピツツオの集金、それに買い出しだけだ。そんな暮らしがもう七ヶ月になる。

「アレッシオ聞いたかい、バンビーニのことをさ」

　ハンドルを握ったルーカの運転は、いつものように荒っぽかった。

　バンビーニはここ一週間ほどの間に、スラムで名前を売り始めた新興のグループだ。弾丸パロツトラにあてつけるように麻薬取引を活動の中心に据えている。そんな連中が縄張りに入り込んできたのだから、ルーカの表情は険しかった。

「バンビーニの奴らは、組織の麻薬ルートを広げるためにスラムに入り込んできやがったんだ。でさ、ここからが大事なところだぜ。俺の推理なんだが連中の正体は……」

「ファビオたちか」

ルーカが頷うなずく。ベルッチの別荘からフォーラを強奪し、ファビオたちを追放したのが十日前。バンビーニと名乗る連中が活動を開始したのが七日前だ。

「子供にしては素早い身の振りようだが、ベルッチを通じて以前から組織とつながっていたと考えれば、ありえない話じゃないな」

バンビーニが短期間で勢力を広げたのは、彼らに強力な後押しがあるからだ。

「ベルッチのところへ逃げ込みやがったのかな、あいつら」

「簡単にことを構えるなよ、ベルッチの後ろには組織がいる。つまり、バンビーニというグループが新しく生まれたわけじゃない。マフィアや売人どもが寄り集まってベルモントの販はん売ばい網もうを開拓するために用意した仕組みの上に、バンビーニという飾りを乗っけたんだ」

「手を出すとひどい目にあうって言うんだろ。なあ、やっぱりベルッチもファビオの野郎も、始末しておいたほうが良かったんじゃないのかな」

口を尖とがらせたルーカがアクセルを踏み込む。

「少しは考えろ。そうしたら俺たちは今ごろバンビーニなんかじゃなく、市警察と撃ち合いになっているさ」

「そんなもんなのか」

「気の回らない頭領カーポはファミリーを不幸にするぞ」

「頭領カーポか……そうだな、気をつけるよ」

マフィアの言葉にルーカが眩しそうな顔をする。まるで昔の自分を見ているようで、アレッシオは苦笑した。

車が食堂トラットリアに着いたのは夕方だった。弾丸パロットラにとって『食堂トラットリア』といえば、ねぐらのことを指す。リッカルドが迎えに出て三人で荷物を降ろした。

「もういいみたいだな」

「明日にはフットボールも蹴けっ飛ばせるさ」

リッカルドが建物の裏手に顎あごをしゃくる。

いつもルーカが銃の練習をしている空き地で、子供たちがサッカーに興じていた。人数が半はん端ぱだったのかノヴェラが巻き込まれている。

「手が空かなくてさ、俺の代わりに子供の相手をしてもらってんだ」

見ればノヴェラは奪ったボールを足先で器用にコントロールしている。骨董人形アンティークに激しい運動は向かないという先入観を持っていたが、ノヴェラの身のこなしには思ったより無駄がないようだ。

「あいつ、けっこう使えるかもしんないぜ」リッカルドが白い歯を見せた。

「それはいいけどさ、どうしてお前の手が空かないんだよ」

「人使いの荒いお嬢様の、執しつ事じ役やくをおおせつかったのさ」

「だからどうしてお前が？」

「さてね、紅茶の淹いれかたが上う手まいからじゃないのかな」

肩をすくめたリッカルドを呼ぶ声が窓の上から聞こえた。よく通るソプラノはフォーラの声に間違いない。リッカルドがいそいそと建物に戻っていった。

「なんだよあいつ、情けねえな」

「人形のことを任せたのはお前だろう」

ルーカが砂を蹴ける。この一週間、怪け我がの熱で三階にこもりっきりだったリッカルドは、すっかり自動機械人形オートマタの兄妹と打ち解けていた。

サッカーゲームを終わらせた子供たちが車の近くに集まってくる。荷物運びに加わろうとする子供たちに交じって、ノヴェラも積み下ろしを手伝っている。

「ここはいいからフォーラを見てやれ」

「はい」

「リッカルドをこき使わないように注意してやれよ」

「分かりました、アレッシオ」

挑発的なフォーラと対照的にノヴェラは従順な自動機械人形オート

マタだ。ボスの意向に反しない限り、アレッシオの言葉はなんでも聞くし、他の子供たちとも積極的に関わり役に立とうとしている。もとの性格が温厚なのだろう。そのうえ生き真ま面じ目めなノヴェラは、子供たちのいい玩具おもちゃにされていた。

「あいつ、ちょっと変わったかな」

「そう思うか」

「声が元気になってきた。それに『アレッシオ』なんて呼んでるぜ」

「ここの居心地がいいんだろうさ」

「人形のくせにかい？」

　ノヴェラの細い背中が小走りで食堂の中に消えてゆく。後ろ姿だけなら、髪の毛の短い少女で通じそうだ。

「あいつ、本当にボスのペットだったのかな？」

「ルーカ、ノヴェラにボスのことを聞くのは厳げん禁きんだ。子供たちにもそう伝えておけ」

「なにかあったのかい」

「そいつは話せない。だが、俺たちの今の仕事は何なのかってことだ。ボスから命令されているのは、集金のほかにはノヴェラとフォーラを預かることだけだ。だから連中は大事にしないといけない」

「かしずいて働けというのかい、リッカルドみたいに」

「そうじゃないが、宝石のように金庫にしまっておけば済む話でもない。大事なのは連中のことを理解し、その目的を尊重してやることだ」

「人形の目的だって？」

「そうだ、それはボスの目的にも重なる」

　ルーカは、少し考えてからゆっくり頷いた。

「分かったけど、俺たちはそれをいつまで続ければいいんだろう」

　ルーカの疑問は、そのままアレッシオの苛いら立だちにつながるものだった。

　昨夜ゆうべのことだ、アレッシオは小さなへまをやらかした。

この兄妹のことを知ろうとするあまりに、ノヴェラを追い詰めてしまったのだ。

バンドネオンの治療にしばらく付き合ったアレッシオは、堂々巡りを繰り返す会話に疲れて屋上で風に当たっていた。尻しりのポケットから携帯酒瓶ヒツプフラスクを出し、口につける。六オンスの標準サイズ、表面に滑り止めの黒革を巻いたお気に入りの酒さか瓶びんだ。

ふと背後に気配を感じて振り向くとノヴェラが立っていた。

この人形は気配を持っている。それはこの一週間で何度も感じたことだ。失われた錬れん金きん術じゆつによって動く骨董人形アンティークについてアレッシオは詳しくないが、ノヴェラにも控えめな好悪の感情があることは実感していた。

男だん娼しようみたいな真ま似ねをしたのを叱しかり飛ばしてからというもの、ノヴェラはアレッシオによく話しかけてくるようになった。たいていはフォーラの症状の報告で、弾丸パロツトラの子供たちのことを聞かれることもある。だが、その夜は少し違っていた。

「こんばんは、殺し屋さん」

「いい加減その名前はやめてくれ、名前でいい」

「はい、アレッシオさん」

「さん付けもいい」

「分かりました……アレッシオ」

人間を呼び捨てにするのに慣れないのか、ノヴェラはもじもじと下を向いた。アレッシオの許可を待ってから隣に腰を下ろす。

「骨董人形アンティークってのは照れるんだな」

「照れていません！」

「嘘うそもつけるようだ」

酒の勢いで笑い飛ばしてやる。言葉に詰まったノヴェラは、なにか言いたそうにアレッシオを見上げた。

沈黙が通り過ぎた。緑柱石スメラルドの瞳ひとみがアレッシオを映している。そこに媚こびるような濁にごりの色はなく、澄んだ緑色がまっすぐこっちを向いている。

御お伽とぎの国から見上げる星空はくすんでいる。そいつを眺めな

がらノヴェラの言葉を待った。

「……確かに、嘘をつきました」

「お前は思ったより感情を面おもてに出すんだな」

「この感情は、魂を持っている証あかしとなるでしょうか？」

「魂だと？」

　わざわざ屋上に上がってきたノヴェラが話し始めたのは、とんと馴な染じみのない話題だった。

「難しい質問だな、それは心みたいなものか」

　親指で自分の左胸を指してみせる。ノヴェラが静かに首を振った。

「そこにあるのは血流のポンプです。心があるとするなら、こっちだと思います」

　白く細い指がアレッシオの額に向けられる。笑って携帯酒瓶ヒツプフラスクをあおった。

「俺は医者じゃないから、人体のことはそんなに分からない。だが殺し屋としてお前さんの言うことは少し分かる。拳銃で敵を狙うとき、動きを止めたければ脳みそを吹き飛ばすことだ。心臓ポンプにぶち込んでも相手の攻撃はすぐに止やまないからな」

　的が小さくても当てられる技ぎ倆りようがあればこその芸当だ。神妙な顔で頷いたノヴェラが、自分の鳩尾みぞおちのあたりを指差した。

「もしも人の魂が脳にあるのなら、自動機械人形オートマタの魂は円筒シリンダにあります」

　この人形はいったい何を話したいのだろうか。アレッシオは黙って言葉の先に耳を傾けた。

「主人は僕のことを人間ではないと言いました」

　ノヴェラは自分の手を見つめている。白はく磁じの指先は人間と同じくらいに、いやそれ以上にデリケートな動きをしてバンドネオンをかき鳴らすことができる。しかし人形の演奏する音楽はどこか規則的だ。情感に訴える響きのない、譜面スコアどおりの理論的な音楽だった。

「主人の言葉です……人形には自我がない、自己がない、つまり魂が

いない。感情を持っているが、それだけだ。人形の感情は魂のうねりから生まれるのではなく、外部からの刺激に反応する歯車の規則性にすぎない」

　ノヴェラの声がわずかだが大きくなった。この感情も、外部からの刺激による反応にすぎないのだろうか。

「結局、自動機械人形オートマタは命令に従うだけのロボットだ。それに感情のような反応をくっつけて、人間らしくこしらえたものにすぎない……と」

「それが人形なら、仕方のないことだろう」

「そうかもしれません。そうかもしれませんが……」

　言葉を切ったノヴェラがアレッシオを見上げる。結論の見えない話に軽い苛いら立だちを覚えた。

「それならフォーラの頭……いや、腹の中と言ったほうがいいか？　そいつはもっと簡単に治せそうなものだがな」

　携帯酒瓶ヒツプフラスクに口をつけた。安物のスコッチが喉のどに沁しみる。

　このベルモントに暮らす以上、アレッシオのようなマフィオーゾでも自動機械人形オートマタについての知識をそれなりに持っている。しかし人形の心や感情について踏み込むほど、アレッシオは自動機械人形オートマタに触れてきたわけではない。ましてや骨董人形アンティークのような貴重品はさっぱりだ。いったい俺は、いつまでこの兄妹を預らねばならない。

「……すみません、治療の目め処どが立てられなくて」

「洞どう察さつ力りよくもあるのにな」

　肩を叩たたくとノヴェラは少し寂しそうに笑った。

「今日で一週間、どうだ？」

「どう？」

「漠ばく然ぜんとした質問はだめか」

「いえ、平気です。まずここの暮らしは快適です。フォーラの症状を見つめながら、自分とは何なのかをゆっくり考えることができました。自動機械人形オートマタの魂とは……」

　またその話に戻ってきた。仮面の男マスケリーノの言葉が彼を縛しばっているのだ。再び、堰せきを切ったように疑問が溢あふれだしてくる。

　魂とは何なのか。

　人間にあって自分にないものは何なのだろうか。

　一銭にもならない問いかけが、ノヴェラの腹の中で渦うず巻まいているようだった。

「……お前の中で答えは出ているのか？」

　苛立ちが声に表れたかもしれない。ノヴェラが不安そうな面おも差ざしでこっちを向いた。

「いま僕が考えていることは、記憶と電気と魂についてです」

「ほう」

「主人の言っている魂とは記憶の集まりではないか、そう思いました。自分の性格も、感情も、信念も、全ては記憶の堆たい積せきの上に存在するのではないかと」

「誰でもそういうことを若いうちは考えるもんさ」

「でも、人形にも記憶はあります。外からの情報は全て円筒シリンダの楽譜に更新され、蓄ちく積せきされます。ならば僕は魂を持っていることになるのでしょうか」

　分からない。首を振った。最初に彼を尋問したときのことを思い出す。あのときノヴェラは、僕に自我はあるのでしょうかと迫ってきた。

「記憶以外の何かが魂ならば、それはここにいるのでしょうか」

　白い指がふたたびアレッシオの額を指す。

「何個もこいつをぶち割ってきたが、中に入っていたのは、血と体液と脂し肪ぼうみたいにぶよぶよの脳みそだけだったぜ」

「……忘れていました、アレッシオが殺し屋だってことを」

　ノヴェラが笑い、アレッシオも笑った。

　魂は見えない。本当はないのかもしれないし、あるのかもしれない。

もしも魂が存在するのなら、その居場所は心臓か脳ということになるのだろう。どちらであれ自動機械人形オートマタにとっては円筒シリンダの中だ。人形には前ぜん頭とう葉ようも海かい馬ばもない。円筒シリンダの中で複雑に組み合わされた歯ギ車ヤと水銀が、人間の脳と同じ働きをしている。

俺も忘れていた、こいつは人形なのだ。ジリジリと焼けつく不快感が這はい上がってくる。

「本当に骨董人形アンテイークの円筒シリンダは、人間の脳と同じ働きをしているのでしょうか」

「さあな、それは最初に自動機械人形オートマタを作った奴に聞いてみるしかないな。偉大なるペテン師のカリオストロ伯はく爵しやくに会ってきてだ」

「素敵ですね」

建物に切り取られた星空を見上げてノヴェラが呟く。カリオストロ伯爵は十八世紀の人物で、ルイ王朝を惑わせた錬れん金きん術じゆつ師しとされている。本名はジュゼッペ・バルサモ、出身はマフィアのルーツであるシチリアだ。彼の錬金術の精せい華かと、天才時計技師ジャケ・ドローの技術が結びついて最初の自動機械人形オートマタが誕生したという話は、歴史の教科書にも載っている。

「僕は、人間の脳と、円筒シリンダとの違いを知りたいと思っています。僕たちの円筒シリンダは歯ギ車ヤと水銀で動いている。人間の脳は神しん経けい繊せん維いと電気信号で成り立っている。ひょっとすると、魂は電気なのかもしれませんね」

酒を流し込む。ノヴェラの腹の中はその話でいっぱいだ。愛玩人形ダツチワイフの分際で人間の在ありようにまで踏み込もうとしている。だが彼に罪はない。瞳石ジエンマの命令に従って考えているだけなのだから。

いつしか行き場のない不快感がアレッシオの脳内を駆け巡っていた。これも電気の仕し業わざか、くだらない！

「その謎なぞ解ときを、フォーラがおかしくなった理由から考えてみたらどうだ？」

「え？」

目を丸くする。魂のないノヴェラは、アレッシオの悪意にすら気づかない。

「ボスは寝室でお前たちに何をした？　お前たちは何のために作られた？　話したくなければ話さなくてもいい。だが、お前の仕事はフォーラを元に戻すことだ。その糸口は、案外そのへんに転がっているんじゃないのか？」

　一瞬だった。ノヴェラの表情が固まった。歯車が高速で回転し、彼の腹の中に刻まれた記憶という名の自己が掘り返されていることだろう。ボスはマフィオーゾにあるまじき倒とう錯さく趣味の持ち主だ。ノヴェラとフォーラはその欲望を満たすためだけに莫ばく大だいな金額で取り引きされ、人間の真ま似ねをして生きている。愛玩人形ダッチワイフが自分の存在を問うたところで、何の役に立つというのだ。

　少年は華きゃ奢しゃな両足で弾かれたように立ち上がった。屋上の反対側まで走っていき、倒れるようにうずくまる。苦しそうな呻うめきが聞こえた。細い肩が夜風の中で顫ふるえている。その姿を見たとたん、後悔がアレッシオの酔いを醒さました。

　ノヴェラは嘔おう吐としていた。

　夕食を抜いたので、出てくるのは体液の代わりに流れている冷却液だろう。しかし肉体が異物を拒絶する苦しさは本物だ。

　ボスとノヴェラが寝室で何をしていたかなど、分かりきった話だ。ホテルの洗面台で今と同じようになったノヴェラを、アレッシオは見ているのだから。肩を貸そうと屈かがんだとき、ノヴェラの声が聞こえた。聞き取れないくらい小さい声で、同じ言葉を繰り返している。

　ペンソ・ドゥンケ・ソーノ。

　ペンソ・ドゥンケ・ソーノ。

　ペンソ・ドゥンケ・ソーノ。

　床を這はい、冷却液にまみれたノヴェラが呟いている。吐と瀉しゃと一緒に、腹の中の想いを全てぶちまけるように。

　ペンソ・ドゥンケ・ソーノ――我思うゆえに我あり。

「それを考えて飯が食えるのか」

　首を振る。人形の全身を巡る鉄線が、発条バネが痙けい攣れんを起こしている。ノヴェラの苦しみなど、しょせんは浮世離れした嗜し好こう品ひんが抱えた贅ぜい沢たくな懊おう悩のうだ。血の通わない、頭でっかちな自己探求にすぎない。だのに、その想いだけでノヴェラは壊れてしまいそうだ。

　ぜえぜえと息を乱し、喘あえぐように言葉を吐き出す。それはすさまじい執しゆう念ねんだった。

「人間になれ……ご主人様は、僕に、そう命じました」

「そんなことができるのか」

「分かりません」

「どうしてそれを俺に話す」

「……余計なことではないと、思ったからです」

　ノヴェラが顔を上げた。その表情はアレッシオの無神経な詰きつ問もんを責めているのではなく、初めてパスタを食べたときの照れくさそうな顔だった。

　魂のないノヴェラは悪意に気づかない。

　同様に彼は、そのときアレッシオが感じていた強烈な後悔にも気づかなかっただろう。

　買い出しの荷物を厨ちゆう房ぼうに放り込むと、夕食の前にアレッシオはリッカルドの様子を見に行った。バンビーニという集団がスラムに入り込んできていることについて、ルーカの相棒の意見を聞いておきたかったのだ。

　病やみ上がりのリッカルドは、流しの前でティーカップを洗っていた。奥の部屋からフォーラと子供たちの遊ぶ声が聞こえる。どうやら小さい子供たちほど、骨董人形アンテイークに抵抗なく打ち解けられるようだ。

「あのお嬢さん、人形のくせに人使いが荒いよ」

「好きでやっているんだろう？」

　ティーカップを洗うリッカルドと並んで、少しだけ立ち話をした。直情的なルーカに比べてリッカルドは慎しん重ちようだ。バンビーニにファビオが関わっているのなら、一度コンタクトを取ってから対応を考えるべきだというのが彼の主張だった。

「前にホテルでお前は、二度と顔を見せるなとファビオに言わなかったか」

「そうだったね。じゃあ俺とルーカ以外の奴が交こう渉しように行けばいい。案外、ノヴェラがいい仕事をするかもしれないぜ」

「あいつは駄だ目めだ。弱腰で言いなりになるか、反対に向こうを怒らせるかだろう」

「構わないさ。いざとなったらアレッシオが行ってくれるんだろう？」

「俺が出張るにはボスの許可が必要だ。いいか、忘れちゃいけないのは、それはお前たちも一緒だってことだ。俺たちはボスの命令なしに戦争なんてできないのさ」

「バンビーニの背後にいる組織と、仮面の男マスケリーノの話し合い次第だっていうんだろう。分かってるよ、けどあてにしてるぜ」

　ぴかぴかに磨みがいたティーカップを持って、フォーラの部屋に吸い込まれていく。入れ替わりにリタが飛び出してきた。リッカルドにわざとぶつかってツンと顔を背ける。

「父さんバーボ、見てよこれ。あのへんてこりんなお人形にやられたのよ！」

　小さな身体でどすどすと足を踏み鳴らしたリタは、白いワンピースの胸を指して頬ほおを膨ふくらませた。胸の開いた大人っぽいデザインの右胸に、もとはハンカチだった布切れが丸く縫ぬい付けられている。ピンク色で熊くまのイラストが描かれている。

「台無しよ、こんなんじゃお客に笑われちゃうわ！」

　フォーラは裁さい縫ほうが得意のようで、昼間は子供たちの破れた服を繕つくろったり、アップリケをつけたりしている。縫い目はミシンを使ったように整っているが、デザインのセンスはなさそうだ。

「あの人形、いつになったら治るのかしら。私たちが話しかけてもニコニコしてるだけだし、ここがヴェネツィアかベルモントかも分かってないの。できることといったらお裁縫だけよ。しかも今度ときたら、リッカルドのシャツに蛙かえるのアップリケなんか付けてるの。父さんバーボも気をつけたほうがいいわよ。朝起きたら、その黒いジャケットにイチゴのワンポイントが付いてるかもしれないから」

「そいつは願い下げだ」肩をすくめて笑った。

　部屋の中からリッカルドのだらしない笑い声が聞こえる。若さゆえの回復力だが、それもリタの甲か斐い甲が斐いしい看病のたまものだ。

「だいぶ良さそうだな」

「せいせいしたわ。おかげであたしもさっさと仕事に戻れるし！」

　えらくご機嫌斜めなのは、せっかく看病してやったリッカルドが骨抜きにされてしまったからだろう。気持ちは分かるがリタはまだ十一歳だ。フォーラと張り合うには早すぎる。

「リッカルドって心底女好きなのね。治りが良かったのだって、あのお人形さんのことばっかり考えてたからよ」

「お前にも感謝してるだろうよ」

「そんなことないわよ。当たり前のことをしただけだもん」

　足音を立てて階段を降りかけたリタは、ふいに立ち止まってアレッシオを振り向いた。歳としに似合わぬ小悪魔めいた笑みを浮かべる。

「ねえ父さんバーボ、あたし知らなかったんだけど、自動機械人形オートマタってちゃんと射しゃ精せいするのね」

「ノヴェラと寝たのか？」

「まさか、手でイかせただけよ」

　十一歳のリタが、右手でその動きを真ま似ねてみせる。リッカルドへの面当てのつもりか、リタは得意げに胸を張った。

「吐いただろう」

「失礼ね、そんなことないってば。人形のくせに恥ずかしがっていたわ」

　親指サムを立てたリタが鼻歌を歌いながら階段を降りてゆく。彼女はこの年で娼しよう婦ふをやっているのだ。まともに客を取ることもあるし、美人局つつもたせをすることもある。見かけによらず大胆な小娘で、半年ほど前にはアレッシオを誘惑したことすらある。

　毒気を抜かれたような気分でアレッシオはリタを見送った。煙草たばこに火をつける。ノヴェラは全ての性せい交こう渉しようを拒絶するわけではないようだ。相手があの仮面の男マスケリーノでは無理もないが、彼の円筒シリンダの中で歯車は何を思わせているのだろうか。

　階し下たからニコロの呼ぶ声がして、夕飯の時間になった。部屋から子供たちが溢あふれ出してくる。最後にリッカルドのエスコートでフォーラが現れた。

「なんだよ、まだいたのかよアレッシオ」

照れるリッカルドの胸でコミックの蛙が笑っている。急に彼の手を放したフォーラが、引き寄せられるように歩み寄ってきた。緑柱石アクアマリーナの瞳がアレッシオを捉とらえる。

そして彼女は、こんなことを言った。

「あなたはまだお姉ちゃんを探しているの？」

「何のことだ」

内心の動どう揺ようを押さえ込んで聞き返した。フォーラは顎あごに手を当てて少し考える仕草をしていたが、やがてはっと思い至ったようにアレッシオの腕を取った。

「行きましょ、ご主人様」

腕を組み、踊るように階段を踏みながら声を弾ませる。置いてきぼりにされたリッカルドが慌あわてて追いかけてきた。

フォーラは狂っているわけではない。いくつかの記憶は断片的に存在し、それらをつなぐ糸が宙をさまよっているのだ。ノヴェラの治療は、バンドネオンの問いかけでその糸をまっすぐに通す作業なのだろう。

いまフォーラの瞳にはなにが映り、円筒シリンダはそれをどう認識しているのだろう。緑柱石アクアマリーナの瞳は、夕映えを受けてオレンジに煌きら々きらと輝いていた。

vii

七日目から取り掛かった赤ずきんの修正作業は、十日目には狼おおかみに食われた赤ずきんが猟りよう師しに助けられる普通の物語にいったん落ち着いたが、翌日には猟師が懐中時計サポネツタを振り回し、赤ずきんが「おー、すげー」とはしゃぐシュールな物語に変わっていた。

兄妹がトラットリア・カプレットに滞在して二十日、潔けつ癖ぺきなノヴェラのおかげで食堂はすっかり片付いた。弾丸パロツトラは兄妹の恩おん恵けいをたちどころに理解して、ノヴェラの存在も受け入れられるようになった。意地っ張りのルーカだけが、まだ兄妹によそよそしい。

ノヴェラと弾丸パロツトラが打ち解けた頃には、フォーラに対する子供たちの好奇心も落ち着いてきた。ノヴェラは邪じや魔まの入らない兄妹の部屋で、毎日根気よく対話による治療を続けている。

　スコッチウイスキーで口を洗う。

　アレッシオは先の見えない毎日を持て余していた。

　バンビーニとの接触は、互いの下したっ端ぱ同士の喧けん嘩かがきっかけで中断したままだ。ノヴェラの治療は一進一退。この生活からいつ解放されるのか見当もつかない。月例の報告で執事のガエターノに会ったときなど、ここが踏ん張りどころだと肩を叩たたかれる始末だった。

「酒量が増えていませんか？」

「人間にはそういう時もある、放っておけ」

「はい」

　食堂の片隅でノヴェラは人体に関する本を読んでいる。

　リタが図書館からくすねてきた分厚い本だ。開いたページに大きく脳の図説が載っている。

「また、我思うゆえに我ありペンソ・ドウンケ・ソーノか？」

　揶や揄ゆされたのを理解したノヴェラは照れくさそうな顔を上げた。こうした表情のニュアンスは人間とまるで変わりがない。

「ここに魂はいません」

　ノヴェラが指差した本のページを覗のぞき込む。そこにあるのは脳の写真と解説だ。いくつも線が引っ張られて、説明が書かれている。神しん経けい繊せん維い、ニューロン、それらの複雑な交差、シナプスと酵こう素その反応──誰の頭ず蓋がい骨こつにもこいつが入っており、これが人間の全てだった。

　細胞の中には記憶が収納されているのだろう。微弱な電気がそれを引き出し、新しい認識と判断が生まれ、結果として得られた情報を再統合する。それで人間は動いている。動けてしまうのだ。なら、魂はどこにある？

　人は肉で考え、自動機械人形オートマタは歯車で考える。

「だったら人形と人間はどこが違うんだ」

「分かりません」

　しばしの沈黙、その間もノヴェラはアレッシオから視線を外さない。

「でも、フォーラは魂を持っているかもしれない」

「同感だ」

「フォーラは人間でしょうか？」

「俺には答えようがない」

「すみません……アレッシオ、貴方あなたは僕やフォーラに優しいですね」

「ボスからそうするように言われているだけだ」

　スコッチをあおる。しち面倒くさい問答に付き合いながら、六オンスの携帯酒瓶ヒツプフラスクが半分に減っている。酔よいの兆したアレッシオにノヴェラは好奇の瞳ひとみを向けてくる。

「アレッシオ、また質問してもいいですか？」

「好きにしろ」

「貴方はどうして組織に入りたいのですか？」

「なんでだろうな」ノヴェラはこっちを見ている。首を振って言い直した。「組織は関係ない。俺には俺の目的があり、そのために拳銃こいつで人殺しをしているだけだ」

　それは事実であり、詭き弁べんでもあった。アレッシオが殺人を繰り返してきたのは生きるためだ。その最大の理由を除くとするなら、残る動機は復ふく讐しゆうのようなものだった。貧困の街に自分を放り出したこの国への、この世界への復ふく讐しゆうがアレッシオを動かしていた。

「僕には、貴方に二つの魂があるように見えます」

「二つ？」

　ノヴェラが金色の頭を頷うなずかせる。

「立身出世を望み、子供たちのお守りを疎うとんじているアレッシオが一人。親父バーボとして、子供たちを少なからず大切に思っているアレッシオがもう一人。どちらのアレッシオが本物なのですか？」

　アレッシオは返事をしなかった。

　ノヴェラの思索につきあうのは疲労する。まるで二十歳はたちやそこらの、抜け切らない全能感を理論武装した若造と話しているよう

だ。これこそ最悪の仕事だった。犬の糞くそみたいな与よ太た話ばなしにつきあって無む駄だに頭を揺さぶられる。アレッシオの苛いら立だちを察したノヴェラが、すみませんと頭を下げた。

「リタと寝たのか？」

　腹立ち紛まぎれに聞いてみるとノヴェラは面白いほど狼ろう狽ばいした。

「ちがいます、そんなことはしていません！」

「声がでかい。頭に響くだろうが」

「……すみません」

「手を出したって怒るような筋合いじゃない。好きにしろ」

「してないですってば」

　不満そうなノヴェラが上目づかいになる。この自動機械人形オートマタは、こういうときに人間らしい表情をするようだ。

「吐かなかったそうだな」

「はい、相手が女性なら平気です」

「あんなチビでもか？」

「不可抗力でした！　それにあの子は……」

　椅い子すから立ち上がったノヴェラは、自分が激していることに気づくと、とたんに顔を赤くして大人しく席に戻った。本のページを行ったり来たりさせる。

「……不思議です。人間ではない僕も、自分の内側には踏み込まれたくない」

「人間かどうかは別にして、案外お前には魂があるのかもしれんよ」

　ただし、青っちろい若造の魂だ。苦笑してスコッチを流し込んだ。

「どうして主人が僕たちをここに来させたのか、分かるような気がします」

　ノヴェラが呟つぶやいた。

　自動機械人形オートマタの円筒シリンダは人間の魂を持つことがで

きるのだろうか。アレッシオにはそれが途方もない挑戦のように思える。しかしノヴェラの外見は、どこから見ても人間と変わりがない。

　行くあての見えぬまま、ノヴェラのバンドネオンが悲しげな旋せん律りつを紡つむいでいる。ボタンの上で指を躍らせるその姿は哲学者のようにも見える。

「ここにいたのねノヴェラ。仕事なの、一緒に来てくれる？」

　商売用のコートを羽は織おったリタが乱暴にドアを開けて飛び込んできた。口笛を吹いて冷やかしてやると自動機械人形オートマタの少年は赤くなって立ち上がり、頭を下げて食堂を出て行った。

　二人が出ていくと、とたんに食堂はがらんと広くなった。

　残りのスコッチをみんなやっつけてやろう。アレッシオは食堂に残ったまま、携帯酒瓶ヒツプフラスクを傾けた。こいつは禁酒法時代のアメリカでマフィアにも市民にも好まれた酒さか瓶びんだ。アレッシオにとっては、輝かしかった時代のマフィアの象徴だった。

　弾丸パロツトラが邪じや魔まなのか、大切なのか。

　その矛む盾じゆんはアレッシオ自身が痛いほど感じている。

　ならば、どちらの気持ちが本物なのか？

「くだらねえな、なんてくだらねえ問いかけだ」

　そんなものは、自分を不安に追い込む考え方だ。

　考えたところで先の展開も読めたものだ。どちらが本物だか分からない。自分自身が幻のように思え、独ひとり相撲ずもうで神経をすり減らす。そうやって消耗する奴は必ず周りに迷惑をかける。

「人形ごときが……」

　アレッシオは苛いら立だっていた。

　ノヴェラが悪いのではない。仮面の男マスケリーノの命令に縛しばられているだけであり、それはアレッシオも同じだった。

　スコッチで喉のどを焼くと、さらに気持ちが落ち着かない。

　そうだ、この怒りこそが俺の魂なのかもしれない。

　アレッシオは立て続けに琥こ珀はくの液体を流し込んだ。

白い肌に潜り込んでゆく。

懐かしい場所へ手を伸ばす。

肉の感触、肌の温もり、その奥底に歯車の鳴る音。

彼女の身体は渇かつ望ぼうと絶望でできている。

甘い吐息と粘ねん膜まくのうねり。

それは求めるものの写うつし身みであり、全く別のものでもある。

俺が抱きしめようとしているものは幻想だ。

いくら手を伸ばしても、そこには決して届かない──。

頭痛に耐えかねてアレッシオは目を覚ました。毛布のすえた臭いと煙草たばこの臭い、それにスコッチと胃液の臭いが入り混じって、眩まぶしくも吐き気のする朝だ。

夢見は最悪だった。

覚えているのは黄き金んの螺ら旋せんを描いたフォーラの髪と、その肌の柔らかさだ。

部屋を出て流しで顔を洗う。水をがぶがぶと飲み、濡らした髪の毛を櫛くしで整えると、ようやく頭の中の靄もやが晴れてきた。

「俺はこのまま爺じじいになっちまうんじゃねえのか」

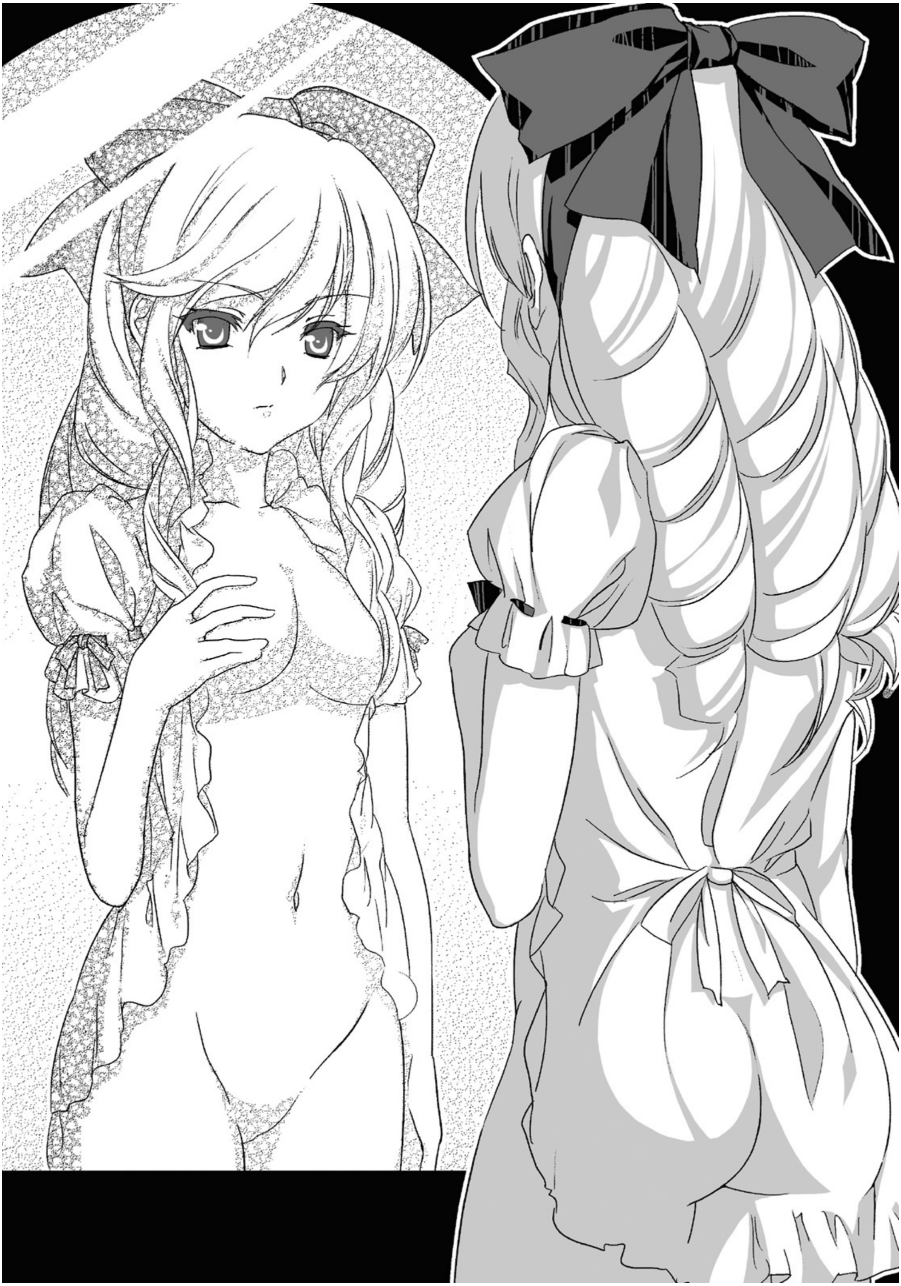
大きく伸びをしながら階段を降りた。

朝食の喧けん騒そうが過ぎ、子供たちが仕事に出かけると、トラットリア・カプレットは日曜の学校のような静けさに包まれる。今日はノヴェラとリタが美人局つつもたせをやるそうだ。ボスに持たされた女物の衣装を無理やり着せられたノヴェラが、リタとリッカルドに引きずられて出て行った。ルーカはみかじめピッツオの集金に行っている。つまり建物にいるのは、フォーラとアレッシオの二人きりだ。

屋上で一服するアレッシオの耳に、音程の外れた子守唄ニンナナンナが飛び込んできた。

彼女と二人きりになるのは初めてのことだ。廊ろう下かから兄妹の部屋を覗のぞき込む。

　ノヴェラとリッカルドがまめに掃そう除じをしているのか、部屋の中は片付いている。テーブルの上にはノヴェラのノートがあり、その向こうにフォーラがいた。



　寝巻きからドレスに着替える最中だったのだろう。フォーラは下着の前をはだけた半裸の姿で鏡台の前に立っていた。姿見ほどの大きな鏡台もボスから贈られてきたものだ。

　アレッシオは息を呑のんだ。

　広い鏡面に、肌き理めの細かい白い裸身が映し出されている。喉のどが鳴った。いい年をした大人が魅み了りようされたように彼女の肌に吸い込まれ、身じろぎもできなかった。

　フォーラは鏡に映した自分の肉体をじっと見つめていた。

　瞳の形、睫まつ毛げの跳ねぐあい、頬ほおの肉付き、それを効果的に見せるにはどの角度、どんな目線か。乳ち房ぶさの形、控えめに浮き出した鎖さ骨こつの線、腰のくびれと下腹の緩ゆるいカーブ、細い腕にすらりと伸びた脚線の流れ。スタイルは完かん璧ぺきだ。それをさらに活かすためのポーズは何か。

　フォーラがしているのは美び貌ぼうの点検だった。アレッシオは娼しよう婦ふがそういうことをするのをヴェネツィアで何度も見ている。この肌に男はいくら積むだろう、今日は何人の男がこの身体を求めにくるだろう。決して安売りはしない。強い意志を持って自分の品質を高めてゆく。

　緑柱石アクアマリーナの瞳ひとみには自分の裸だけでなく、かつて侍はべらせた大勢の男たちが映っているのだろう。あるいは仮面の男マスケリーノかもしれない。

「おはよう」

　ドアをノックするとフォーラが振り向いた。

　瞳の焦点を取り戻したように黒目が大きくなる。

「あら、もう起きてたの？」

　両手で乳房を隠すが下半身はそのままだ。「朝からそんな目で見ないで」フォーラは恥ずかしそうに微ほほ笑えんだ。

　アレッシオに後ろを向かせたフォーラは、たっぷり時間をかけてドレスを身にまとった。ようやく振り向くのを許されたアレッシオの前で、いたずらそうに微笑んでみせる。それから彼女は、踊るようにステップを踏んで腕にしがみついてきた。

「階し下たでお茶でもどうだ」

「いいの？　嬉うれしいわ！」

　声を弾ませたフォーラは満面の笑みでアレッシオを見上げた。ノヴェラにも子供たちにも見せたことのない無む邪じゃ気きな顔だった。黄金の髪の眩しさに、二日酔いの頭痛が抜け落ちるような気がしてくる。

　彼女をエスコートして食堂に降りると、今日もニコロが厨ちゅう房ぼうで夜の仕込みを始めていた。

「すまんな、寝坊して」

「平気だよ。そんなことだろうと思って朝食は作らなかったんだ」

　隅すみのテーブルに彼女を座らせ、エスプレッソを淹いれてもらう。ニコロはフォーラのためにオレンジを搾しぼったジュースをトレイに乗せてきた。

「まあ、ありがとう。シェフは気が利きくのね」

「おいら、シェフなんて上等なもんじゃないよ」

　フォーラはいつにも増して上機嫌のようだ。照れくさそうに親指サムを立てたニコロが厨房に逃げ帰る。彼女はごくごくと喉を鳴らしてジュースを飲み干すと、打って変わって丁てい寧ねいな仕草で唇をぬぐった。ナプキンを畳たたみ、それからじっとアレッシオを見つめる。

「なんだ？」

「ううん、見てるだけ」

　テーブルに肘ひじをつき両手を交差した上に顎あごを乗せる。娼しょう婦ふじみたそのポーズが、彼女のお決まりの仕草なのだろう。憎らしいほど似合っている。

　アレッシオは隅の棚たなに置かれたバンドネオンに手を伸ばした。美人局つつもたせのあとでフォーラの治療をしようと、ノヴェラがここに置いたのだろう。足を組み、箱を膝ひざの上に乗せる。

「ノヴェラに少し教わったんだ、こいつはドレミの位置もバラバラなんだな」

　蛇腹ベローを動かしながらボタンを押した。爪つま弾びくというよりもスイッチを押す感覚に近い。しかし蛇腹の扱いひとつで音は大きく変わる。

「グレゴリオ聖歌ね」

「ノヴェラの弾いているまんまさ」

　単たん旋せん律りつで弾く聖歌は和わ音おんを使わないので、ボタンの位置さえ分かっていればなんとか演奏できる。蛇腹ベローの押し引きで違った音が出るのが難しく、何度も間違えながら最後まで弾き通した。

　息をついて顔を上げる。フォーラはすっかりしょげた顔をしていた。

「かわいそう、下へ手たっぴなのね」

「そう言われると、なおさら可哀想だ」

「あら、ごめんなさい」

　口に手を当てたフォーラがくすくすと笑う。

「ノヴェラのように上手くはいかないな。あいつの演奏を聞いていると、フォーラの御お伽とぎ話ばなしを聞きたくなる」

「なにか語って聞かせましょうか？」

「そうだな、どうせなら狼おおかみが出てこない話がいい。テレジーナの結婚はどうだ」

「あら……！」

　フォーラはきょとんとした顔でアレッシオを見た。丸いテーブルに差し向かいで彼女と見つめ合う。それはヴェネツィアで何度も聞いた御伽話だった。

「知っているか」

「ええ、知ってるわ。そうね、久しぶりに話すお話よ……」

　バンドネオンを棚に戻す。フォーラは少し考えていたようだったが、薄い唇がやがてゆっくりと懐かしい物語を紡つむぎはじめた。

　テレジーナの結婚。

　それは美しい娘と王子が、互いに気があるにも関わらず意地悪を応おう酬しゅうする喜劇だった。

　魚屋に化けた王子がテレジーナを騙だましてキスを盗み、テレジー

ナは仕返しに王子を騙してロバの尻しりにキスをさせる。二人の騙しあいは片方が命を絶つ寸前までエスカレートするが、最終的にはめでたく結ばれて物語は終わる。相手が王子でも毅き然ぜんと立ち向かう勝ち気なテレジーナは、フォーラによく似ていた。

　子供の頃は同じ物語を姉にねだったものだ。マフィオーゾと呼ばれるようになり、流れ着いたヴェネツィアでも、姉によく似た娼しょう婦ふが寝物語に聞かせてくれた。この御お伽とぎ話ばなしを聞くたびに、アレッシオは切なく懐かしい気持ちに浸ひたることができる。

　なにより、御伽噺を締めくくる最後の言葉が好きだ。

『この話を聞いた人も聞かせた人も、地獄へ落ちることは決してないはず。私の話はこれでおしまい』

　それは血ち腥なまぐさい世界にいた若い殺し屋にとって、大きな救いでもあった。

　煙草たばこに火をつけ、肺いっぱいに煙を染み込ませる。身体をベルモントに置いたまま、アレッシオの心は遠いナポリとヴェネツィアを回遊している。

「聞いているの？」

　はっと我に返ると、目の前にフォーラの顔があった。

　緑柱石アクアマリーナの青い瞳が、黒い殺し屋を映している。

　青い瞳──ヴェネツィアの娼婦も青い瞳だった。

　骨董人形アンティークの娼婦。

　俺は、渇かつ望ぼうと絶望でできた彼女の白い肌に潜り込んで……。

　悪夢の続きを見ているようだ。

　封じ込めていた過去の記憶が突如として蘇よみがえる。

　そんなことがありえるのだろうか。

　しかし……この街は御お伽とぎの国ベルモントだ！

　アレッシオはその青い瞳を知っている。

　彼女の白い手が、火ほ照てった男の肉体に情欲の炎を灯ともすのを知っている。

彼女の青い瞳が、隠していた心の闇を見通すのを知っている。

彼女の透き通った肌が、あてがった手のひらに優しく吸い付いてくるのを知っている。

彼女の微笑ほほえみが男を惑わし、憂うれいの眼差しが男を惹ひき付けるのを知っている。

男たちの憧あこがれるヴェネツィア最高の娼婦──そこにいるのは彼女なのか？

椅い子すに縛しばり付けられたように身動きができなくなった。

まさか、フォーラが彼女なのだろうか。

しかし間近に覗のぞき込んだ緑柱石アクアマリーナの青い煌きらめきは、疑いようもなく彼女のものだった。

八年も前のことだ。

まだ二十歳はたちを過ぎたばかりの若いアレッシオはヴェネツィアで彼女に出会っていた。

アレッシオは小さな組織のちんぴらとして血ち腥なまぐさい毎日を送っていた。彼女は御お伽とぎ話ばなしと同じテレジーナという名前で、最高級の娼しよう婦ふとして名の通った娼しよう館かんにいた。

アレッシオは金をつかむたびに、テレジーナのいる娼館に通いつめた。

たいした稼ぎもないちんぴらだから、それこそ持てる金の全てを注ぎ込んでもテレジーナとは滅多に会うことができなかった。娼館が組織の縄なわ張ばりに入り、みかじめピッツオを取り立てるようになって、ようやく満足に彼女と口がきけるようになったのだ。

下したっ端ぱのアレッシオにとって高級娼婦は高たか嶺ねの花だった。にも関わらず彼女のもとに通い続けたのは、テレジーナが死んだ姉と瓜うり二つだったからだ。性格は少しきつかったが、顔立ちはもちろんのこと、青い瞳に漂わせた勝ち気で物もの憂うげな二つの色合いまでがそっくりだった。

唯一の肉親だった姉を、アレッシオは十二歳のときに事故で失っていた。

あのときアレッシオがもう少し勇ゆう敢かんであれば、姉は死ななかったはずだ。

その後悔はしばしばアレッシオに襲い掛かり、魂を揺さぶった。ましてや若い頃とあっては、姉にそっくりな娼婦への好奇心を抑える術すべも知らなかった。

髪の色こそ違ったが、テレジーナに姉の面影を重ねたアレッシオは足しげく娼館に通った。彼女が骨董人形アンテイークで、瞳石ジエンマが緑柱石アクアマリーナだということも知らなかったが、そんなことはどうでもよかった。肉体も精神も若く、そして死と隣り合わせの殺し屋稼業だ。あっという間に深みにはまっていった。

セックスをすることがあっても、それが目的にはならなかった。幼いころの姉の面影に甘え、御伽話を聞きながら眠りに落ちるだけで満ち足りていた。

ある日、急に彼女が姿を消すまで、アレッシオの生活の中心にはテレジーナがいた。

あのときテレジーナを奪ったのは、もしや仮面の男マスケリーノだったのだろうか――。

テレジーナの白い手が首にからみつく。

姿形は変わっても、青く輝く瞳石ジエンマはまぎれもなく彼女テレジーナのものだ。

「だめよ、どこかよその世界に遊びに行っちゃ」

「まさか、フォーラ、本当に君は……」

「おしおき」

唇が重ねられた。テーブルに腰をかけたフォーラテレジーナがアレッシオの頭を抱き寄せる。歯の隙すき間まから舌が入ってくる。八年前のヴェネツィアでも、彼女のお仕置きはキスだった。

理性が働く前にアレッシオは舌を絡めていた。恋人のように唾だ液えきを混ぜ合わせ、粘ねん膜まくと粘膜のあいだで舌を踊らせる

フォーラテレジーナに身体を預けられ、アレッシオは床の上に押し倒された。

唇は離れない。その細い腰にしがみついた。

「君はどうしてここに来た？　ここで何をしたい？」

「だめ、今はそんなこと考えないで」

「答えてくれ」

　白い手がアレッシオの頰ほおを挟み込む。唇を離したフォーラテレジーナは、顔を近づけたまま囁さささやいた。

「私は王子様を待っているの」

　それは彼女テレジーナの口癖だった。舌が首筋を下り、シャツのボタンを外す。

「呪のろいをかけられてしまった醜みにくい娘は、王子様に助けられるわ」

　シャツの前がはだけられる。アレッシオの腰にまたがったフォーラテレジーナは、うっとりした目で自分よりはるかに背の高い黒髪の殺し屋を見下ろした。

「アレッシオ、あなたずいぶん大きくなっちゃったのね」

　アレッシオは悲鳴を上げてフォーラを引き剝はがした。

　床の上を這はいずり、テーブルにしがみつく。

「どうしたんだい？」

「なんでもない、フォーラがじゃれついてきただけだ」

　厨ちゆう房ぼうから顔をのぞかせたニコロを追い払う。

　なんとか立ち上がり、そこでようやく息をついた。

　フォーラは仰あお向むけに倒れていた。アレッシオに引き剝がされた格好のまま、じっと天井を見上げている。緑柱石アクアマリーナの瞳には何も映っていないように見えた。

「テレジーナ……フォーラ？」

　言い間違いを慌あわてて訂正する。これ以上関わってはいけない。この悪夢はベルッチの別荘を襲撃したときから始まっていたのだ。このままではフォーラの閉じ込められた狂気の世界に、アレッシオまでが引きずり込まれてしまう。二度とそうなるわけにはいかなかった。テレジーナの深みにはまって、ヴェネツィアで何年を無む為いに過ごしたと思っているんだ！

　フォーラの瞳に視点が宿る。アレッシオは怯おびえたように飛び退いた。

「あら……」

　立ち上がったフォーラは、尻しり餅もちをついているアレッシオを不思議そうに見下ろして、軽く首をかしげて笑った。

「フルーツを食べません？」

「いや、俺はいい」

　もう、ヴェネツィアの娼婦と全く同じ微笑ほほえみにしか見えない。アレッシオはかすれる声で首を振った。

　あんな御お伽とぎ話ばなしを話させるのではなかった。アレッシオにとってテレジーナとの出会いは失った半身との再会であり、黒い後悔との直面でもあったのだから。

「じゃあ私の分だけね、いい子で続きを待っていて」

　厨ちゆう房ぼうに消える彼女を呆ぼう然ぜんと見送る。しばらくするとニコロが血相を変えて飛んできた。

「来てくれないか親父バーボ、あの子の様子がおかしいんだよ」

　このうえ何だというのだ。恐る恐る厨房に入ると、フォーラはオレンジを左手で支え、右手にナイフを持ったまま固まっていた。

「あのまま動かないんだ」

「どうしたんだ、フォーラ？」

　声をかけると彼女はアレッシオのほうを振り向いた。視線は宙をさまよい、両手はぴくりとも動かない。嫌な予感がしてアレッシオはフォーラから距離を置いた。ニコロを退がらせる。いつでも拳銃を抜けるように肩の力を抜いた。

　フォーラはしばらくそのまま立っていたが、やがて焦点のない瞳できょろきょろと辺りを見回し始めた。最初はなにをしているのか分からなかったが、どうやら彼女の目は厨房の中を飛び回る蠅はえを追っているようだ。ナイフで蠅に斬きりつけようとでもいうのだろうか。

　やがて蠅を見失ったフォーラは、ナイフとオレンジを置くと空の皿を持って厨房を出た。テーブルの中央に皿を置き、椅い子すに座って髪の毛を梳とかし始める。アレッシオも席に戻り、その様子を間近から見守った。

　髪をすっかり整えたフォーラが両手を組む。

　それから彼女は、何事もなかったかのように中断した御お伽とぎ話ばなしを続けたのだ。妃きさきとして迎え入れられたテレジーナを王子が脅かそうとするシーンだった。

「あら？」

　テーブルに置かれた空の皿を見てフォーラは怪け訝げんそうな顔をした。口に手を当てて、どうしてここに皿があるのかを考えている。やがてフォーラは頰を赤らめ、上目づかいでアレッシオにこう訊きいた。

「ご主人様、おかわりをもらってもいいかしら？」

ix

　ヴェネツィアは水の都。

　水面を渡る風が吐息のように頰ほおを撫なでると、旅人は魂の探し求めていた癒いやしの国を訪れたことを知る。

　窓を開けると、湿り気のある涼やかな潮風が入り込んできた。レースのカーテンが揺れて、太陽の輝きが煌きら々きらと部屋の中を踊る。光の中を舞う塵ちりまでが輝きに包まれて見える。

　私はベッドに腰を降ろして、大きな伸びをした。

　屋敷での生活にもずいぶんと慣れた。朝も夜も遅い毎日だけど、私はヴェネツィアの生活が楽しくて仕方がない。ご主人様はどんなときも私を特別扱いしてくれるし、外に行きたいと言えばいつでもゴンドラを出してくれる。愛人という立場に不満がないわけではないけれど、最後までなびいてくれないところもご主人様の魅力だった。

　朝の入浴をすませた私は、バスローブを脱いで黒いドレスに袖そでを通した。ストッキングは白、短いスカートからわざとガーターベルトを覗のぞかせる。ご主人様はいつも私の細い足をうっとりと見つめてくれるから、これは当然の身だしなみだ。鏡台に向かって髪を念入りに梳とかし、頭の上でリボンを結ぶ。今日も完かん璧ぺき。薄く口紅を引いて、私は世界で一番の愛人になる。

　廊下に出るとバンドネオンの音が遠くに聞こえた。

　単旋律のグレゴリオ聖歌、ノヴェラが朝から賛美歌を奏でているのだ。調子のいいときは途中から和音が混じってくる。私はノヴェラがそんなに好きじゃないけれど、ノヴェラの演奏が乗っているときは、スキップをしたくなるほど気持ちが浮き立ってくる。あいつの唯一の取り得なのだ。

掃除をしている自動機械人形オートマタに「おはよう」を言って、階段を駆け下りる。優雅でおしとやかな上流階級の愛人のイメージとは違うかもしれないけれど、そんなことは気にしない。だってご主人様は形式にこだわるような人じゃないし、活発な性格も愛してくれるから。

もちろん洋服がしわになっても困らない。なぜって私は、洋服やお化け粧しようでごまかさなくても綺き麗れいなのだから。

起きたらすぐに顔を見せるように言こと伝づてされたので、私はうきうきしながらご主人様を探した。途中で何体もの自動機械人形オートマタが挨あい拶さつをしてくる。みんなこの家の召使いで、ご主人様のコレクションだ。

弟のノヴェラと一緒にヴェネツィアの屋敷に引き取られて、もう三年。

貿易の会社を経営しているご主人様は、お金には何一つ不自由のない生活をしていたが、恋愛運はいまいちらしくて心からの愛情を求めていた。私はそんなご主人様のためにここにいる。ご主人様の器を私の愛で満たしてあげるために、このヴェネツィアで三年も過ごしている。

だから私は美び貌ぼうを磨くのだ。私を隣に並ばせたご主人様が、他の誰よりも誇らしく思えるように。

「おはようございます、ご主人様っ」

二階のテラスで安あん楽らく椅い子すに腰掛けたご主人様は、運河を行き来するゴンドラを眺めていた。その視界を遮さえぎって、目一杯の笑顔を投げかける。語尾が跳ねたのはわざとじゃない。ご主人様を前にして、私の胸のうきうきが最高潮に達したからだ。

手元には小さなテーブル。ワイングラスには濃い薔ば薇ら色の液体が半分くらい残っている。私は飲みかけのグラスを勝手に取って、ワインを口に含んだ。

葡ぶ萄どうの熟成した香りを楽しみながら、ご主人様の首に抱きつく。唇を合わせ、口の中のワインを流し込むと、ご主人様の喉のどがゆっくりと鳴る。

ワインがみんなご主人様の喉を通るころには我慢ができなくなる。少しずつ、ご機嫌を伺いながら舌を挿いれてみる。それを受け止めたご主人様の腕に強く抱かれて、ウエストを中心に身体がしなる。喘あえぎ声がこぼれ、膝ひざの上に乗って唇と舌を絡ませあう。身体がどんどん熱くなって、私は腰を擦すり寄せる。今日はお仕事もお休みの

ようだ。朝から昨夜ゆうべの続きをしてもらえるかもしれない。

　けれど、ご主人様の向こうにはあいつがいた。

　それを見てしまった私は、しょんぼりしてキスをやめるしかなかった。

　小さく咳せき払ばらい、名残なごり惜しいのをこらえて膝から降りる。私はこみ上げてくる羞しゅう恥ち心しんを押し殺して、いつの間にかテラスに来ていたノヴェラの隣に並んだ。ご主人様が呼びつけたのは、私だけじゃなかったのだ。

「どうしてこうなるのかしら！」

　私はぷんぷん怒りながら、八つ当たりするみたいにはたきをかけた。埃ほこりをかぶったノヴェラがくしゃみをする。

「ご主人様のご命令だからだよ」

「そんなことは分かってるわ。掃そう除じくらい簡単よ。私が言ってるのは、どうしてノヴェラと一緒にしなくちゃいけないのかしらってこと！」

「ご主人様のご命令だからだよ」

「じゃあ、ノヴェラがこーんな格好をしてるのもご主人様のご命令？」

　私はノヴェラの頭に乗った大きなリボンをつついてやった。私のとそっくり、黒くてきらきらしている。きっと私のために買ってくれたやつだ。

「これもいろいろ事情があるの！」

「狼おおかみが赤ずきんを食べちゃうのだって、事情があるに決まってるでしょ。私が言いたいのは、これってやっていいことなのって話」

　短いスカートをつまむと、下着が見えそうになったノヴェラが慌あわてて前を押さえる。

「やめて、フォーラ」

「ノヴェラこそ、そんな格好やめなさい。男でしょ？」

　本当に憎たらしい。ノヴェラは男のくせに私より細い脚あしをしてる。

「どう見てもおかしいわ。やだ、下着まで女物じゃない。最低のセンスだわ」

　スカートの裾すそからピンクのショーツがちらっと見えた。信じられない！　ノヴェラの無む駄だに伸びた髪の毛を掻かきむしりたくなる。

「これはもう趣味ね。そうとしか思えないわ」

「違うって言ってるのに！」

　私の手を振り払ったノヴェラが掃除を始める。華きゃ奢しゃな後ろ姿を無性に蹴けっ飛ばしてやりたくなった。何なのかしら、雑ぞう巾きんがけをするときのお尻しりを突き出したポーズは。あんな下品な誘いかた、みえみえで姑こ息そくだわ。

「邪じゃ魔まよ、ノヴェラ」

　スカートのお尻を箒ほうきでひっぱたいてやった。私が癇かん癪しゃくを起こしても、ノヴェラは黙って雑巾がけをしている。もう慣れたって顔が、ますます癪しゃくにさわった。

　まったく、どうしてこんな召使いみたいなことをしなくてはならないのかしら。長いこと使われていなかった埃ほこりっぽい書しょ斎さいで掃除道具と格闘しなくちゃならないなんて、こんなの愛人のやることじゃない。自動機械人形オートマタにでもやらせておけばいいお勤めなのに！

「いっつも変なご命令ばっかりなんだから、ご主人様は」

　ぶつくさ言いながらはたきをかける。埃が鼻先をくすぐって、くしゃみが立て続けに出た。三回だから悪口を言われている！

「僕じゃないよ」

「何も言っていないでしょ」



ご主人様はなにかにつけて私とノヴェラを競わせたがる。プレゼントをくれるときも、必ずどっちかに高価なものを渡そうとする。すぐにピンときた。ノヴェラの女装も、部屋の掃除も、さては遊びの一環なのね。私の勘かんはいつだって的中するから、きっと間違いない。

最後に採点をするのがご主人様なら、私が負けるはずはない。

「じゃあ、この半分から右は私の陣地ね。左側はノヴェラのよ。どっちが先に終わるか勝負しましょ」

「うん、分かった」

内なる闘志を秘めた瞳ひとみで、女の子のノヴェラがこっくりと頷うなずく。大人しそうな顔をして私と張り合おうとする弟はちょっと嫌いだ。ついでに、ご主人様の優柔不断なところも。

ご主人様は、私と弟のノヴェラのどっちを正妻にするのか、いまだに決めないでいる。私にはそれがどうしても納得できないのだ。

だって私はもともと愛人で、弟のノヴェラは使用人だった。なのにいつのまにか同列のライバルみたいに競わされている。どうしてこんなことになったのか、私にはちっとも分からない。ノヴェラが男だって話は、もう当たり前すぎて指摘するのも馬鹿らしいくらい！

私はお裁さい縫ほうが得意で、いっつもご主人様に褒ほめられている。

ノヴェラは読書が好きで、本を読むばかりの役立たずだ。

食事だって、ノヴェラは魚や肉を食べる。

私はお腹なかが空かない体質なので、食べるのはフルーツとお酒を少々。油の臭いのしないものだけを食べるのが、身だしなみだって思っている。

そんな私とノヴェラが一緒くたにされて、こんな埃ほこりだらけの部屋を掃そう除じさせられているなんて！

深呼吸をして気を取り直した。

考えれば腹の立つことばっかりだけど、今日はお姉様が来る日かもしれない。朝からそんな予感がしていたのだ。

「こらノヴェラ！　ひとが考え事してるのをいいことに、なにテキパキ掃除しちゃってるの。アンフェアよ。ストーップ！　終了ーっ！」

「だめだよ、途中で掃除をやめるのは命令違反」

「分かったわ、なら陣地はやっぱり横で分けましょ。いいこと、あなたはここから向こうのテーブルまでみんな綺き麗れいに片付けなさい。それが終わったら私と交代するの」

「フォーラは？」

「私はここから手前の半分をやるわ。あなたと交代するまでね」

「それは公平じゃないよ」

「ハンデくらいつけてくれてもいいじゃない。ノヴェラは召使いなんだから」

「だめだよ、ご主人様にはそんなこと命令されていないから」

「命令命令って、あんた自動機械人形オートマタ？」

「え？」

「だってそうじゃない。人間ならもっと自分の意思を持ちなさい！　そうよ、お姉様を大事にしようって意思を持たないと駄目！　だいたいノヴェラはいつだって……」

「話してるうちに終わっちゃうよ」

「あ、ちょっと待ちなさいってば！」

　薄情なノヴェラは、私をほうっておいて、どんどん掃除を進めてしまう。こうなったら奥の手を使うしかない。背後から箒ほうきの柄えでスカートをめくり上げてやった。

「うわっ」

　ノヴェラが慌あわててお尻を押さえる。私は背後から弟の華きゃ奢しゃな身体を抱きしめた。

「なによ、さっきからずっと興奮してるんじゃない。そんな勃たったままじゃ掃そう除じするの大変でしょ？」

　スカートをめくって、ノヴェラの恥ずかしそうな顔をじっと見つめてやる。なにを照れているのかしら、ばかみたい。

「私が楽にしてあげてもいいわよ」

「やめて、フォーラ」

「さっきけなしたのは嘘うそ。その格好、本当は似合ってるわ。ほら、ご主人様にお情けをもらうときのポーズになってごらんなさい」

「やめてってば！」

　突き飛ばされた。本当は気持ちいいことが大好きなくせに、潔けつ癖ぺきなふりをするノヴェラはだいっ嫌い。こんな見栄っ張りで面白みのない奴を、どうしてご主人様は可愛かわいがったりするのかしら。

「いつもご主人様の前でしてることじゃない。もっと楽しいこと教えてあげるわよ」

　身体を触られるのが苦手なノヴェラに、わざとべたべたしてやる。

「やだ！　フォーラったら、いいかげん弟離れしなよ」

「そんなこと言って、私の胸に肘ひじを押し付けてないかしら？」

「胸なんてどこにあるんだよ」

「失礼ね、あるわよほら」

「それは脂し肪ぼうを寄せてるだけの……」

「ひどい！」

　こんなやつ弟でもなんでもないわ。私はノヴェラを突き飛ばして、箒で頭を小突いてやった。ノヴェラも応戦してくる。

「やめろってば、怒られるから」

「もう怒ってるわ！」

　カツン、カツンと木の合わさる音がして、箒の柄が風を切る。フェンシングはご主人様と見に行ったことがあるから、これだって負けるわけにはいかない。

　思いっきり箒を突き入れると、ノヴェラの細い身体が横に飛ぶ。すんでのところで躱かわしたりするものだから、勢いあまって本ほん棚だなにぶつかってしまった。

「きゃあ！」

　ぎぃぃぃ……と大きな音を立てて、身長よりも高い本棚が倒れてくる。地響きがして、部屋中がまた埃ほこりだらけになった。

「フォーラ、どうするの？」

「ちょうどいいわ、隅すみ々ずみまで綺き麗れいにできるじゃない」

　結局、掃そう除じは夜までかかってしまった。

　途中まではははかどっていたのに、いつものあれが来てしまったのだ。体調を崩くずすと身体が動かせなくなる。この厄やつ介かいな体質が、完全無欠な私の唯一の欠点だった。

　私はベッドに横になり、ノヴェラのことを考えていた。

　掃除は私の勝利。完全勝利に間違いない。けれど体調を悪くした私は、ご主人様に抱いてもらえなかった。今ごろは女の子になったノヴェラがお情けをもらっているのだろうか。

　涙が出るほど悔しかった。

「けれど私はノヴェラよりも大切にされているわ。だってご主人様は、動けない私のお見舞いに来てくれたもの！」

「それは良かったですね」

　気配もなく、ベッドサイドに人が立っていた。

　鎖くさりの音、それから時を刻む懐中時計サボネツタの音。嬉うれしい！　私は顎あごをのけぞらせて後ろを見た。プラチナの長い髪、それから私を魅み了りようする真しん珠じゆの瞳──ペルラ姉様だ。

　私の大好きなペルラ姉様が、いつの間にか部屋の中にいた。やっぱり今日は姉様が来てくれる日だったのだ。憂ゆう鬱うつな気分もすぐにどこかへ飛んで行ってしまい、私は甘えながら姉様に泣きついた。

「聞いて姉様、ノヴェラったら今日もひどいの、あいつってば私の胸のこと……」

　ついつい愚ぐ痴ちになってしまう私の話を、ペルラ姉様は優しい目でじっと聞いてくれる。彼女は教きよう煌こう庁ちようで働いている『超』のつく才さい媛えんで、ご主人様マスケリーノとはお仕事のパートナー。おまけに私の遠縁の親しん戚せきだというのだ。そんな素敵な偶然に、私はいつだって感謝している。なぜって、綺麗で、頭がよくて、気品と艶あでやかさを兼ね備えていて、そんな雲の上のペルラ姉様が、いつだって私のことを気にかけてくれるのだから。

「体調はいかがですか」

「私はとてもいいわ。姉様のおかげよ」

緊張しながら答える私に、姉様は特別の笑みを投げかけてくれる。

「貴女あなたはいつも元気で幸せそうですね」

「ええ、ご主人様のことを想像しているだけで幸せなの」

「そうですか」こんどは姉様が表情を曇らせる。

ご主人様とトラブルでもあったのかしら。私は姉様との楽しい空気を壊さないように、ことさら明るい声を出す。

「ペルラ姉様はいつもどんなことを考えているの？　まじめなこと？　難しいこと？　うんと難しいことを考えたら、私も姉様みたいに綺き麗れいになれるかしら」

姉様は私の枕まくら元もとに顔を寄せてきた。骨董人形アンテイークでもお人形さんは匂においがしないのが残念、姉様が人間だったらきっと甘やかな香りがするはずだから。

「私が考えているのは、しごく当然な自然の仕組みについてです。つまり、死というものについて……」

囁ささやくように話しかける。窓からのそよ風が頬ほおを撫なでて、私は幸せな気持ちで姉様の言葉に耳を傾ける。

「私は死というものが不思議でなりません。死の不思議は、つまり生の在あり方の不思議です。ふつうに考えて死は忌いむべきものであり、恐怖の対象です。人間はみな死を恐れます」

「姉様は？」

「人形は瞳石ジエンマの指輪に逆らえません。逆らうことは死を意味するからです。命令に背けば、円筒シリンダの軸じく受うけに使われた瞳石ジエンマが砕け、やがて壊れてしまいます。私たちはそう作られています。指輪の命令は絶対で、私も例外ではありません」

姉様の言葉はまるでワインのアルコールみたいに私の中に染みこんでくる。私は、言葉ひとつひとつの意味を解釈するのではなく、全体を聴きながら姉様という存在を感じる。こうして姉様のお話が聞ける時間は大好きだ。

「人形はその仕組みに逆らえません。生きることは善であり、死は悪……それは絶対の価値です。ですが、人間はときにその悪を望むことがあります」

「わかった、今日は殺し屋のお話ね。私はかっこいい女暗殺者がいいわ。たくさんの賞金がかかっていて、兵隊を次々に斬きり殺して行く

の」

「斬られるのは人間の警官ですか？」

「もちろんよ、だって人形は簡単に死なないもの」

「では、その話は次にして差し上げます。今は別のお話を聞いてください」

　真っ白な天井を見ながら頷うなずく。私が笑いかけると、姉様は少し戸惑うような顔をした。

「生は過か酷こくです。生まれてしまったのだから、生きなくてはなりません。そのときそのときの快楽を寄せ集めて、飢えを満たしてやらねばなりません。やがてそれができなくなっても、死ぬまでは生きなくてはなりません」

「つらいわ」

「そうです、つらいことです」

　ペルラ姉様と話していると、私は麻薬を吸ったみたいに興奮したり、深い森の中にいるようにリラックスできたりする。血腥なまぐさいマフィアの世界や、砂糖菓子のように甘い恋の話を聞いて、自分がその中の登場人物になったような気がしてくる。姉様に言わせると、これは私の感受性が高いせいだという。

「これはある人の物語です。その人はマフィアの手によって全身を拘こう束そくされ、深い地下の一室で無抵抗に縛しばられています。この人は普通の生活を営む善良な市民でした。それがあらぬ誤解を受けてマフィアの拷ごう問もんに晒さらされるのです」

　姉様が瞳を伏せる。その唇は微ほほ笑えんでいる。

「人は、肉を削そがれるだけで狂ってしまう。本当に痛みに弱い生き物です。犠牲者を捕らえたマフィアは、足のつま先から切れ味の悪いナイフでゆっくりと肉を切り開いてゆきます。金属バットで顔を殴なぐるような手抜きはしません。もっと時間をかけて、ゆっくり行います」

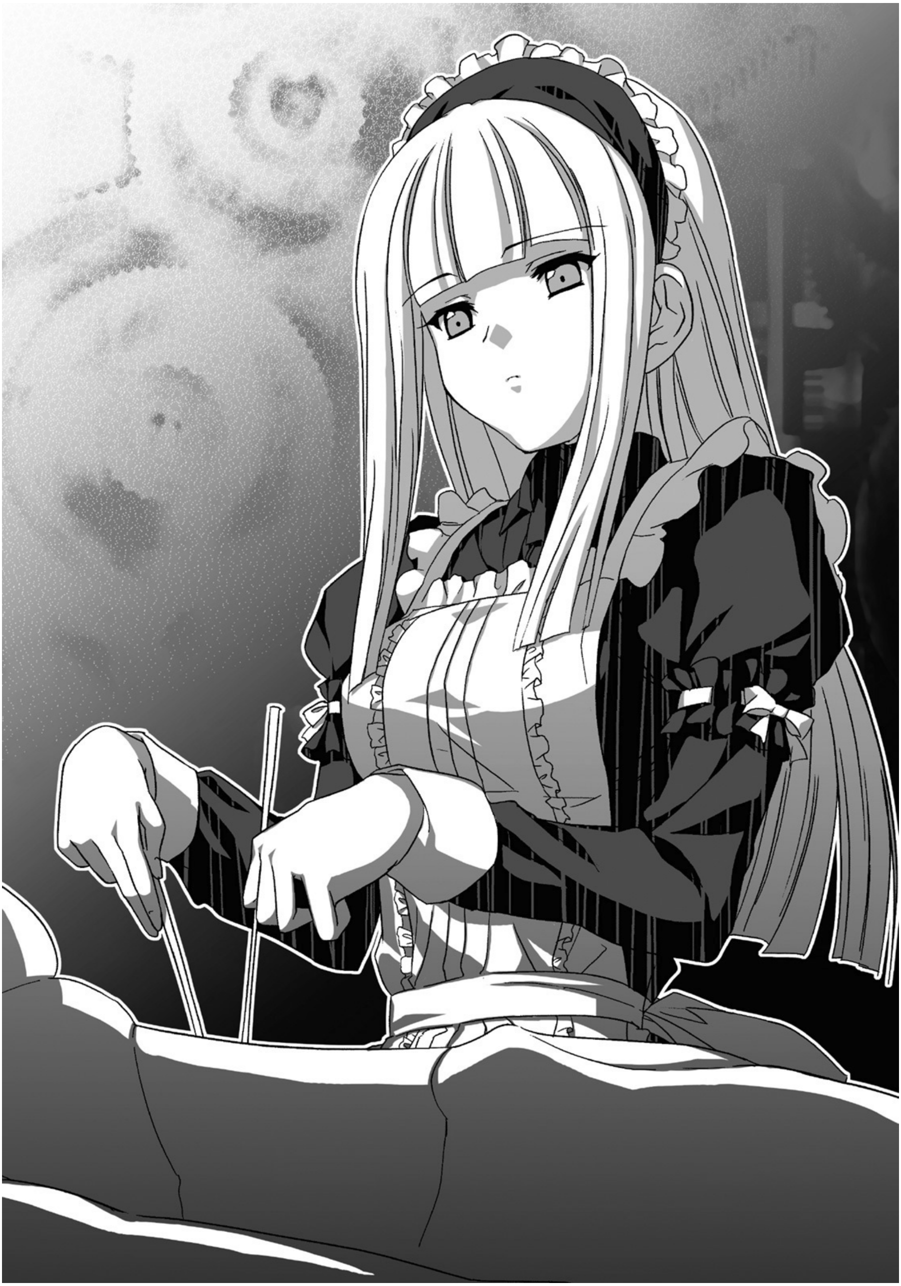
「服は？」

「裸です」

「恥ずかしいわ」

「そうです、逆さかさ吊づりにされて、マフィアの男たちに全てを見

られています。白い肌も、怯おびえて縮こまった乳首も、真新しく綺き麗れいな性器も、肛こう門もんに落ち窪くぼんだ皺しわの数まで……」



「嫌よ、嫌だわそんなの」

「平気です。脊せき髄ずいを焦がすような痛みが羞しゅう恥ち心しんなど忘れさせてくれます。犠牲者を逆さに吊つるすのは、頭に血を集めて気絶させないためです。痛みに敏感になりますし、出血も少なくなります。口を割るまでは、簡単にくたばらせてはいけません。そして、肉を切り刻んでゆきます。最初はどこから……そう、痛いのは神経が通っているからですね。人間の身体で神経の密集している部分、たとえば指です、最初は指先から咲かせます。肉を削そぎ落とすのではなく、十文字に切り裂いて、オレンジの皮を剝むくように肉を開きます」

「痛そう、すごく痛いわ、それは」

　心臓の鼓動が速くなる。美しいペルラ姉様は表情を動かさずに残ざん酷こくな言葉を紡つむぐ。

「錆さびた刃物が肉に入り、神経を切断しながら外に出てゆきます。羞しゅう恥ちなど感じる余裕はありません。神経から送り込まれてくる激烈な情報が頭の中で渦うずを巻き、荒れ狂う嵐のようです。雷鳴が悲鳴となって口からほとばしります。肉が開き、次々に真っ赤な花が咲きます。最初は血が出ますが、そのための逆さ吊りなので、だんだんと出なくなります。あまり出血が多いときは手当てをします。頭の中の嵐に犠牲者が我を忘れたら、自白をすれば必ず助かると励まして差し上げます」

「怖いわ、待って姉様」

「両手の指がバナナの皮のようにめくれ、十輪の花が咲きます。先端からゆっくりやるといいので足にもやります。マフィアにとって、これは処刑ではなく拷ごう問もんです。真実を知るための行為でしかありません。皮肉なのは、ここに吊るされているのが、全く無関係な何も知らない市民であったことです。自白する中身を知らないのですから、その前には死しか残されていません」

「お願い、姉様ったら」

「そこで！」

「きゃっ」

「もう終わりだ、お前はじきに死ぬ──そう告げてやります。不思議なのは、死を宣告されたとき、犠牲者は助かったとでもいいたげな安あん堵どの表情を浮かべるのです。柔らかい肉を裂さかれ、血の滴したたる赤い花をたくさん咲かせたのちに、ようやく人はそこに至るよう

です」

「死ねば苦しくないから？」

「はい、苦しみの到達点が死です。どんなに苦しくても、いつかは死ねます。死は解放です」

　姉様の笑顔が柔らかくなった。私は悪夢から醒さめたようにびっしょり汗をかいている。この綺麗な身体が切り刻まれるなんて、そんなことになったら私は痛みより先に死んじゃいたくなると思う。

「人はみな、苦痛の果てに死ぬ可能性を抱えて生きています。生しよう涯がいのうちに拷問を受ける人は稀まれでしょう。ですが、そうでない人もみな、死までの苦しい道のりを生きています。そのよすがは希望です。希望をなくしたときに生命の価値を見失う……それが人間です」

　姉様のお話が終わる。私は笑った。少し瘦やせ我慢をしている。

「面白いお話だわ、私は自分から死ぬなんて考えられないけれど」

　強がる私に姉様が微笑ほほえみかける。

「ええ、そうでしょうね」

「ペルラ姉様はいつまでも生きられるのよね、お人形ですもの」

「自動機械人形オートマタの円筒シリンダも永遠ではありません。刻一刻と磨ま耗もうしていきます」

　予想外の答えに、少しがっかりした。

　それから、なんとなくドアの向こうを覗のぞいた私は、見たくないものを見てしまった。

　ご主人様とノヴェラが楽しそうに立ち話をしていたのだ。ますます気分が滅め入いってくる。いったいご主人様は、あんな小こ賢ざかしい弟のどこがいいのだろう。私の御お伽とぎ話ばなしに文句ばかりつけて、しまいには自分は兄で、私は妹だなんて言いはじめる奴なのに。

　そんな私をなだめようと、ペルラ姉様はフルーツを剝むいてくれた。

「貴女あなたはいつも感情的ですね」

「人間はみんなそうよ、ペルラ姉様は骨董人形アンティークだから分

からないかもしれないけれど」

「貴女はそんなに活発でなくてもいいのですよ」

「私は今の私が好きよ」

「そうですか」

　いけない、無神経な言葉で姉様を傷つけてしまったかもしれない。私はせめてこの体の温もりを分けてあげようと、姉様と小指をつないだ。

「フォーラさん……」

「ごめんなさい、こうしてると安心するの」

「罪作りなことです。貴女の周りの人は、みんな貴女のすることに惑わされ、気持ちを掻かき乱されてしまいます」

「それなら全ての宝石にも罪があるわ。姉様のその美しい真しん珠じゅの瞳にも」

　やりこめられた姉様が困ったように微笑ほほえむ。それだけで私は得意になってしまう。

「そろそろ時間です」

　ペルラ姉様が綺き麗れいな銀色の懐中時計サポネツタを取り上げた。

「待って、最後に楽しいお話をしてくださる？」

「ええ、いいですよ。残りの時間は十分三十二秒です。どのお話がよろしいですか？」

　時計の文字盤を見ながらペルラ姉様がささやく。

「じゃあ赤ずきん。前に聞かせてもらったのを忘れてしまったの。悪い狼おおかみを派手にやっつけちゃう話がいいわ」

「かしこまりました」

　フルーツの香りに誘われたのか、小さい虫が飛んできた。ふらふらと彷徨さまようように部屋の中を飛び回る。気が散るので、私は虫を潰つぶしてやろうと手で追った。ふわりふわり、風圧に押された虫がどうしても潰せないので、私はむきになって手のひらをぱちぱちと合わせる。

「ふつう、自動機械人形オートマタは命令がなければ生き物を殺しません」

「そうなの？」

「ええ。ですから命令がなくても殺せる自動機械人形オートマタは、人になれるかもしれない」

　呟つぶやいた姉様の手が鞭むちのように伸びて、虫を握り潰した。

「……あなたは、何を殺せますか？」

　姉様が口だけで笑った。ぞっとするような笑みに、私は吸い込まれそうになった。

　　　X

　男だん娼しようとして街に立つのは久しぶりだ。

　普段と変わらない街の雑ざつ踏とうが、客を待つ気持ちになるだけで様相を一変させる。

　手が汚れているような気がして、ノヴェラは無意識にハンカチで手を拭ぬぐった。

　窓の外を埃ほこりっぽい風が吹きすぎてゆく。整備のされていない石いし畳だたみの車道は、ところどころが隆りゅう起きしていて、ぼろのシートの下から突き上げるような揺れを感じる。

　ノヴェラは外がい套とうつきの盛装で運転席に座っていた。助手席にはリッカルドがいる。車はまっすぐにスラムの外へと向かっている。

「姉ちゃん、いいセンスしてるよな」

　ハンドルを握ったまま横を向くと、ダッシュボードの上に両足を投げ出したリッカルドが、シャツの胸部分に縫い付けられたカエルのアップリケをつまんでみせた。

「それはセンスがいいの？」

「斬ざん新しん」

「そうかな、けれどフォーラは妹だよ」

「そんなはずはないぜ。だってノヴェラは背が低いもの」

裏声でフォーラの真似をする。

「似てないよ」

からかわれているのが分かって、ノヴェラはアクセルを踏み込んだ。バランスを崩したリッカルドがずるずるとシートの中に沈む。

フォーラの召使い役を嬉き々きとしてこなすリッカルドは、ノヴェラにも弾丸パロツトラの仕事や車の運転を教えてくれた。彼に言わせるとノヴェラは優秀な生徒らしい。自分には敬語を使わないように言われたことも、ノヴェラはきちんと守っている。

「器用なもんだよな、あんなボタンだらけの楽器を弾けるんだから当然か」

「自動機械人形オートマタに人間のような演奏はできないんだ。決められた楽譜スコアをなぞっているだけで」

「機械類の操作にはうってつけさ、特技だって鼻を高くしていいんだぜ。これならレースにだってすぐに出られそうだ」

「レース？」

「そっちのほうが、お前には合ってる気がするんだけどな」

白い歯を見せてリッカルドが笑う。ランビキ地区を出ると車の通りが増えてくる。歩道の隅でリタと弾丸パロツトラが五人くらいで手を振っているのが見えた。ブレーキをゆっくり踏み込む。

「お待たせ」

コートを着たリタとハイタッチを交わして、ノヴェラの仕事が始まる。

美人局つつもたせは、麻薬ドウローガに頼れない弾丸パロツトラの大事な収入源の一つだ。普段は弾丸パロツトラの雑用をしているリタも、このときだけはお姫様みたいになる。十一歳の彼女が艶いろっぽい格好で街角に立つだけで、そういう趣味の観光客が放ってはおかないのだ。

ひと仕事を終えたリタは車に乗り込もうとして、盛装したノヴェラの格好を上から下まで眺め回した。仮面の男マスケリーノがしつらえた貴族趣味の服はそのままに、短いズボンの下は白い素足。客を待つ男だん娼しようのような格好は、リッカルドのコーディネートだ。

「あたしは女装のほうが似合ってたと思うけどな」

「リタの気持ちは分かる。確かに似合ってたし、俺も惚ほれるかと思ったよ。けどこっちのほうが金持ちが釣つれそうな気がするんだ」

「そういうものなの？　リッカルドが言うなら信じるけど」

「まあ見てなって。こいつ、お前の倍は稼かせぐからさ」

「ありえない！」

　車に乗り込んだリタが、ポケットからなにかを取り出してリッカルドに渡した。三人の弾丸パロツトラを乗せた車がゆっくりと動き出す。ノヴェラの横を通り過ぎるとき、リタはもう一度窓から顔を出した。

「上手くできたら、またいいことしてあげるね」

　親サ指ムを立てて、三人の弾丸パロツトラと一緒に走り去っていく。こういうときはどんな顔をすればいいのだろう。分からないときはなにもしないのが円筒シリンダの導き出す答えだった。

「行くぜ、今日はこっちだ」

　二人の弾丸パロツトラと一緒にリッカルドの背中を追いかけ、オッタヴィーノ地区の下町に入る。猥わい雑ざつな裏通りを抜けた菓子屋のショーウインドウの横が、今日のノヴェラのポジションだった。

「観光客の中でも、通ぶった連中がこっちに繰り出してくるんだ」

　ショーウインドウの横、路地の入口から表通りを眺める。雑多な普段着の人々に交じって、スーツ姿の紳士や、カメラを下げた女性たちの姿が見える。この中に今日の客がいるのだ。

　ノヴェラが美人局をやるのはこれで三回目だ。前の二回は女装をさせられて、今度は男娼になる。だがこれはノヴェラから望んだことだ。

　弾丸パロツトラの一員にはなれなくても、彼らのビジネスを手伝うことはできる。ノヴェラはもっと彼らの輪の中に入ってみたかった。仮面の男マスケリーノのもとで過ごした裕福な生活の下に、どんな世界があるのかを知りたかった。

　みかじめピツツオ、ニコロのピザ、美人局つつもたせ、それにひとりひとりが街で稼ぐ合法的な労ろう賃ちんを合わせても、仮面の男マスケリーノへの上じよう納のう金きんと生活費を差し引いたら何も残らない。それでも、弾丸パロツトラのような子供たちがこの街で生きていくために、仮面の男マスケリーノの庇ひ護ごは必要不可欠だっ

た。

弾丸パロツトラは、麻薬ドウローガに手を染めないかわりに美人局をする。十一歳のリタが街角に立って、彼女を買おうとする観光客から金銭を巻き上げるのが常じよう套とう手段だ。

「子供と寝たがるような変態から、少しだけ分け前をもらうのさ。今日はホモの変態だ。俺たちだって馬鹿じゃないから、身み包ぐるみ剝はぐようなまねはしないよ。警察に届け出て恥はじをかくくらいなら、泣き寝入りのほうがましだって思う程度のお駄だ賃ちんを失敬するんだ」

「客引きはしないでいいの？」

「いるもんか、黙って立ってたほうがそれらしいんだ。前みたいに『いらっしゃい』とか『安いよ安いよ』とか絶対に言うなよ」

親サ指ムを立てたリッカルドたちが路地に消えていった。

通りに出る。

自分はうまく笑えているだろうか。そう思ってノヴェラは笑顔を作った。笑いというのは突き上げてくる感情ではなく、表情の選せん択たく肢しの一つでしかない。

覚悟はできている。ただひとつ心配なのは記憶の暴動だった。

前回と違うのは、今日の客が男としてのノヴェラを買いにくるということだ。ご主人様の同類だ。吐いてしまわないだろうか。それだけが心配で円筒シリンダが緊張している。

通りに立って人々の視線を浴びたとたん、円筒シリンダが激しく動き始めた。

―いつものがきた。

ノヴェラは目を瞑つむり、歯を食いしばった。

円筒シリンダの中で過去の記録が再生される。

それは、仮面の男マスケリーノのもとで奇異な愛情を注ぎ込まれた日々。

古い娼しよう館かんの窓から水銀灯の灯あかりを眺めていた日々。

古い木の匂におい。きしむ床板。狭い部屋に小さいベッド、薄汚れたシャワールーム。

かつてのノヴェラを包んでいた風景が、円筒シリンダの中で鮮明に輪りん郭かくを現し、現実の世界からノヴェラを引き剝がそうとする。

のしかかる肉にく塊かい。打ち付けられる肉の杭くい。

快楽を伝達する鉄線と、それに反応する円筒シリンダの軋きしみ。

嫌悪。恐怖。混乱。激痛。快楽。恍こう惚こつ。絶望。

円筒シリンダは、その場面を繰り返し再現する。ノヴェラの意思とは無関係に！

弾丸パロツトラとの生活に安らぎを感じていても、記憶の再現は繰り返される。

いつもは押さえ込んでいる何かが、些さ細さいなきっかけで暴動を起こすのだ。

—人間になれ。

全てはその言葉のためにある。

ノヴェラはそこから一歩も前に進むことができない。

目を開けて、またハンカチで手をぬぐった。汚れている。まだ手が汚れている。

物語ノヴェラはまだ、仮面の男マスケリーノの望む筋書きになれていない。

最初に声をかけてきたのはスーツを着こなしたビジネスマン風の男だった。ノヴェラを見下ろした爬は虫ちゆう類るいのような目は、仮面の男マスケリーノのそれとかけ離れていた。

身体をべたべたと触られ、車に乗せられそうになったが、リッカルドたちがナイフを突きつけると男はとたんに怯おびえだし、言いなりの迷惑料を支払った。

二人目は筋肉質でアクセサリーをたくさんつけた男だった。熱っぽい目をしたその男はノヴェラを強引に連れ去ろうとしたが、やはりリッカルドたちに脅されて大人しくなった。財布の中は空に近かった。

「あいつ、お前をレイプするつもりだったんだぜ」

想像をすると身体の奥から何かがこみ上げてくる。三人目に向け

て、ノヴェラが気持ちを立て直そうとしたところで、警察の車ガゼツラが姿を現した。

「逃げろ！」

　弾丸パロツトラは散り散りになってその場を逃げ出した。二人が左右に分かれ、リッカルドはノヴェラの手を引いて路地の奥へと走り出した。市場の人ごみを抜けて、物売りの屋台をすり抜け、さらにさらに奥へ。

「ははは、市警察の連中もカンが良くなったな」

　曲がりくねった路地を走りながら、リッカルドが楽しそうに笑った。つかまったら牢ろう屋や行きになるというのに、その声はまるでゲームを楽しんでいるようだ。

「リッカルドはいつも明るいね」

「いつだったかな。どうやら捨て子になったって気づいた時から、俺は楽しく生きるって決めたんだ」

　息を切らしたリッカルドが二本指の敬礼をしてみせる。彼くらい表情に喜き怒ど哀あい楽らくがつけられると、人間らしく見えるかもしれない。ノヴェラの手を引いてどんどん先へ行く。

「そんでもって、俺が楽しく生きるには弾丸パロツトラが必要なのさ。フォーラとお前が来て、もっと楽しくなってきた」

　大通りを横切ってスラムにたどり着く。古い工場のロッカーの鍵かぎをリッカルドが開けて、中から大き目のバッグを取り出した。

「服を脱げ！」

　仮面の男マスケリーノからもらったひらひらの服を剝はぎ取られたノヴェラは、かわりにぼろのシャツとハーフパンツを渡された。リッカルドも動きやすいＴシャツに着替えて、サッカーボールを脇に抱える。拳銃だけはズボンに差したままだ。スラムで遊ぶ子供たちにまぎれてしまえば、警官は見分けがつかなくなる。

「な、楽しいだろ。お前も楽しめよ」

　楽しむというのは主人パドローネがすることで、ノヴェラの役割は楽しませること。それが円筒シリンダに刻まれた行動原理だ。ノヴェラには楽しむということが分からない。

　ロッカーを閉めたリッカルドに「楽にやろうぜ」と肩を叩たたかれた。

「楽に？」

　聞いたことのない言葉。

　それは、まるで異国の呪じゆ文もんだった。

「どうした」

「う、ううん……僕にできるかな」

　片目をつむったリッカルドが親サ指ムを立てた。

　それだけで、なにかができるような気がしてくる。

　歯車の回転に勢いがつき、体内の細管を水銀が駆けめぐる。リッカルドの言葉は、ノヴェラのバンドネオンのように歯車の回転を変える力があるのかもしれない。

　空き地には、リタのほかに弾丸パロツトラの少年が五人ほどいた。手を上げて彼らと合流する。リッカルドとボールを蹴けり合っていると、通りの向こうを警官が小走りに通り過ぎていくのが見えた。警官はこっちの姿に気づいたが、声をかけようともしなかった。

「すごいね、バレないんだ」

「あいつらの目は泥どろ玉だまでできてるんだよ」

　笑ったリッカルドが大きくボールを蹴り上げた。ノヴェラの頭上を越え、太陽の光を遮さえぎって後ろに飛んでいく。反転してそれを追いかけた。

「銃き創ずはもう平気なの？」

「ああ、もうすっかり治ってるよ」

　強めに蹴り返したボールを、腹でトラップしたリッカルドが顔をしかめる。

「ま、時々痛むけどな」

「それは『すっかり』じゃないよ」

「細かいね」

　蹴り返されたボールを太ももで受ける。この遊びにもだいぶ慣れてきた。

　サッカーボールで遊んだことなど、食堂トラツトリアで暮らすまでは一度もなかった。ノヴェラの遊びというのは、ご主人様の上に乗ってするものか、フォーラとのままごと遊びばかりだったから。

　足の発条バネを使ってボールを追う。円筒シリンダから送り出された水銀が身体を発熱させせる。それはノヴェラの知らない世界だった。

「なあ、お前たち自動機械人形オートマタってのは、命令がないときは何してるんだい？」

　ボールが飛んでくる。今度はノートラップで蹴り返す。

「いろいろだよ。みんな個性を持ってるから」

「フォーラはひとりでも楽しそうだもんな。お前と正反対だ」

「どこが？」

「ノヴェラは暗い顔しすぎだぜ」

「暗い？」

「ああ、けっこう暗いぜお前。フォーラが心配なんだろうけどさ」

「そんなつもりはないけど……」

　暗いというのは、精神的な落ち込みが表面に現れていることだ。ノヴェラには自分が落ち込んでいる自覚はないが、さっきのように記憶の暴動が押し寄せてくることがある。

「じゃあ、アレッシオも暗い？」

「あいつは……うーん、大人だから仕方ない」

　リッカルドの蹴ったボールが、また頭上を越えていった。

　車が二台、空き地の向こうに止まったのはそのときだ。ドアが開き、空中で大きな放物線を描いたボールを、中から出てきた誰かが受け止めた。大人のように背の高い少年だった。あとから七人くらいの子供が空き地に入ってくる。弾丸パロツトラの仲間かと思ったが、それは違っていた。

「久しぶりだな、リッカルド！」

　背の高い少年からサッカーボールを受け取った別のひとりが、リッカルドの名前を呼んだ。

ノヴェラは彼を知っている。ベルッチの別荘を襲撃したときに見た顔だ。歯車が動き、記憶が引き出される。少年は弾丸パロツトラを破門されたファビオだった。

「これはこれは、バンビーニの諸君じゃないか」

両手を広げたリッカルドが、ファビオを迎える仕草をした。弾丸パロツトラが彼の背後に集まる。ファビオと向き合うと、リッカルドは人差し指を相手に突き立てた。

「二度と俺の前に姿を見せるなと言ったはずだぜ」

「そうかいリッカルド、お前はそんなことを言ったのか。あいにくだが、俺はそんな台詞せりふを覚えちゃいないぜ」

「無理もねえや、そんときお前は鼻水垂たらしてべそかいてたんだからな」

ファビオの眉み間けんにしわが寄った。空気がピリッと張り詰める。

「バンビーニは、スラムで麻薬ドウローガを売るつもりなのかい？」

「お前らに関係のない話だぜ」

麻薬ドウローガの密売をしているバンビーニの後ろには大きな組織がついている。ひとりひとりの体格を比べても、年ねん齢れいの高そうな彼らのほうががっちりとしている。ファビオの態度も強気だった。

「ベルッチに、別荘襲撃の実行犯がお前たちだってバラしてやったぜ。うすばかのルーカに伝えな、弾丸パロツトラはもうおしまいだってな！」

ファビオがナイフをサッカーボールに突き立てる。空気の抜ける音がして、ボールから張ちよう力りよくが失われていった。

「そこにいるの、あんときの骨董人形アンテイークじゃねえか？」

「だったらどうなんだよ」

「お前らで輪姦まわしたのか？」

「下げ種すなお前らと一緒にするんじゃねえよ」

「へっ、そんな度ど胸きようもねえか」

ファビオの背後にいた大柄なバンビーニが、両陣営の中間地点にいたノヴェラの腕を引っ張った。

「お前はこっちに来いよ、いい思いをさせてやるからさ」

さっきサッカーボールを受け止めた奴だ。嫌も応もないうちに抱きしめられた。間近からそいつの顔を見上げる。一人目の男にそっくりな爬は虫ちゆう類るいの目をしていた。

「さすがは娼しよう婦ふと寝た数を競ってる連中だぜ、腐くさってやがる」

リッカルドは迷わなかった。仮面の男マスケリーノがアレッシオに贈り、アレッシオが彼に渡した拳銃を抜くと、そいつに向けて引き金を引いた。

パン！

炸さく裂れつ音おんがしてバンビーニが地面にひれ伏す。銃た弾まは命中しなかったが、そいつは腰を抜かしてへたり込んだ。

「ベルッチのところで二人撃った。麻薬はやらねえが、人殺しは大好きなんだぜ」

いつも笑っているリッカルドが、ファビオを睨にらみつけている。ファビオも銃を抜いた。

互いに銃口を突きつけて火花を散らす。

「撃てよ、最初に撃ったほうが多分勝つぜ」

「いかれてるよお前は、リッカルド」

「お互い様だろ」

唾つばを飲んだ。うかつに動いたら、そのとき二人の銃口から轟ごう音おんが響いてしまいそうで、ノヴェラも、リタも、他の少年たちも身動きができなかった。

重い沈黙がスラムの空気を止めてしまったようだ。やがて、あきらめたように銃を引っ込めたファビオが大声で叫んだ。

「アウトードロモだ！」

その言葉で空気が動き出した。震えて、沸わき立った。リッカルドが口の端を引きつらせて笑う。弾丸パロツトラとバンビーニと、両方の少年たちが拳を突き上げて同じ言葉を叫ぶ。歓声が古いビルの間に

谺こだまする。

「アウトードロモだ！」

xi

　埃ほこりっぽい風が老ろう朽きゅう化した建物の間を吹き抜けていく。ランビキ地区のスラムは広く、入り組んだ道路は体内に張り巡らされた鉄線のようだ。

　スラムの最果て、市警察も立ち入らないアウトードロモ。

　それは、かつての地域ホールと、それに隣りん接せつする集合住宅の廃はい墟きよを一周するコースのことだ。ここの車道は道幅が広く、入り組んだスラムの中で唯一車の走りやすい場所だった。スラムの人間はここを、サーキット場を意味する『アウトードロモ』と呼んでいる。

　そこで今、二台並んだ車のエンジンが、空ぶかしブリッピングの轟ごう音おんを上げている。

　ひとつは弾丸パロツトラの、もうひとつはバンビーニのもので、両方とも古いシトロエンをベースにした合成獣キメラだった。

　古代復興運動のおかげで、町を走る車は古いデザインのものばかりだ。ワーゲンにしろフィアットにしろ、丸みを帯びた懐かしい形がベルモントの街並みにはよく似合う。中でも安価なシトロエンの人気は根強かった。

　合成獣キメラの外見はそれらの車と変わりがない。駆く動どう部だけが積み替えられているのだ。軽量で空気抵抗を受けやすいシトロエンに、車台シヤーシの強度も顧かえりみず、ただただ速いエンジンを組み合わせたバランスを欠いた畸き型けい車両──それが合成獣キメラだ。

「ノヴェラ！」

　灰色の合成獣キメラの運転席から顔を出したリッカルドが叫んだ。

「すげーだろ、今度お前にも運転させてやるよ」

「レースなんてして平気？」

「いいんだよ、アレッシオもルーカも連中のことで気を揉もんでるんだ。ここらでカタをつけないとな」

片目をつむったリッカルドが親サ指ムを立ててみせる。

一周二千メートルのアウトードロモを、速く回って戻ってきたほうが勝者だ。単純なルールだが、安定の悪い車で舗ほ装そうの剝はがれかけた道路を暴走するのは危険極まりない。

ファビオが負けたらバンビーニはスラムから撤てつ退たいする。

リッカルドが負ければ弾丸パロツトラはノヴェラを差し出し、バンビーニの営業を邪じや魔ましない。

これが勝負の条件だった。

「そうだこれ、リタがお前の分も作ってくれたんだ」

リッカルドはシャツのポケットから、紐ひものようなものを差し出してみせた。

「弾丸パロツトラの証あかしだよ」

彼の胸にも、リタの胸にも、ルーカやニコロや他の弾丸パロツトラの胸にも同じものが下がっている。銃弾を加工して革かわ紐ひもを通したネックレスだ。

「まあ、まだ早いけどな」

見せるだけ見せて、リッカルドがネックレスをポケットにしまう。ノヴェラは首を振った。

「受け取れないよ、僕はここに残れないから」

「顔は、ほしいって言ってるぜ」

「嘘うそだよ」

「赤くなってるじゃん」

目を泳がせるノヴェラに、リッカルドは拳銃を渡した。ずっしりと重い鉄の感触が手のひらに乗る。

「スターターはお前だ、こいつを頼むぜ」

「うん、分かった」

親サ指ムを立てる。笑ったリッカルドが窓を閉めた。拳銃を手に、コースの真ん中に立つ。

「さっさとしろ人形野郎！」

「勿もつ体たいつけるなよ、淫売プッターノ！」

　小馬鹿にしたような野や次じが飛んでくる。ノヴェラがレースの賞品なのだ。珍しい男の骨董人形アンテイークをベルッチにさばけば、相当な大金が転がり込んでくるだろう。

　二台の車に向かい、握った銃を掲げる。灰色の合成獣キメラがリッカルド、クリーム色の合成獣キメラはファビオの車だ。銃口を上に向ける。引き金を絞しぼり、スタートの合図を撃ち鳴らせば、二台の合成獣キメラは爆音を上げて荒れた道路を疾走していくだろう。

「早くしろってば！」

　バンビーニの声が聞こえる。ファビオと一緒にいたノエルという少年だ。彼らはファビオの運転技術に信頼を寄せているようだが、リタたちもリッカルドが出るので安心した顔をしている。これは二人の勝負だ。

　フロントガラスの向こうにはリッカルドがいる。ノヴェラはゆっくりと引き金を絞った。

　パン！

　銃声にエンジンの音が重なり、二台の車が同時に走り出した。最初にインコースを取ったのはクリーム色の合成獣キメラ、ファビオの車だ。そのまま二台が小さくなっていく。

「大丈夫かな？」

「平気よ、誰が運転していると思ってるの、リッカルドよ」

　リタが親サ指ムを立てて笑ったが、その声は少し緊張していた。

　轟ごう音おんが遠ざかってゆく。やがては自分もあれに乗るのかもしれない。リッカルドはノヴェラに美人局つつもたせよりもレースをやらせたいようだ。

　やがて遠くから爆音が戻ってくるのが分かった。先頭を走っているのは灰色の合成獣キメラだ。

「ほらね、リッカルドはブレーキを踏まないもの」

　アスファルトがめくれてできた障害物を高速で躱かわす。リッカルドは安全運転だとアレッシオは言っていたが、レースになると人が変わるようだ。ファビオが車を当ててきた。向こうのほうが性能はいい

ようだ。それをリッカルドのハンドルが押さえ込んでいる。

　楽にやろうぜ──リッカルドの言葉が蘇よみがえり、細管を流れる水銀が沸わきかえった。

「行け、ぶっちぎっちゃえ！」

　リタの叫び声にノヴェラも釣られた。

「がんばれ、抜かせるな！」

　こんな大声を出したのも、自分の中にこんな塊かたまりを感じたのも初めてだ。指輪の命令なしに誰かを応援するのも、誰かに親身になるのも、その相手はフォーラでしかありえなかった。

　ノヴェラが叫び、弾丸パロツトラもバンビーニも全員が大声で思い思いの声せい援えんと罵ば声せいを浴びせかける。

　最後のカーブだ。リッカルドはほとんどスピードを緩めずに、そこに差し掛かる。

　そのときだった。

　──パン！　パン！

　声援にまぎれていたが、確かにノヴェラは炸さく裂れつ音おんを聞いた。遠くない、見える範囲で誰かが拳銃を二回撃った。直後にリタの悲鳴！　カーブを曲がり損そこねたリッカルドの車が、スピードに乗ったまま廃はいビルのエントランスに突っ込んでいく。

　エンジンの轟音が子供たちの喧けん騒そうに塗り潰される。ノヴェラは走りだした。

　リッカルドは運転席にいた。

　エントランスロビーの壁にぶつかって、ぐちゃっと潰れた車に閉じ込められていた。

　ハンドルを握ったまま前のめりになっている。

　ハンドルと座席に胸を押し潰されたのだ。心臓は破裂し、息はなかった。

　駆けつけたのはノヴェラが一番だった。次に駆け込んできたのはバンビーニのノエルだ。ショックで竦すくんでいた弾丸パロツトラの少年たちが、あとからばらばらと入ってきた。ノヴェラはノエルの手を借りて、動かなくなったリッカルドを車から引きずり出した。

リタが悲鳴を上げる。泣き崩くずれる。ほかの弾丸パロツトラも呆ぼう然ぜんと立ち尽くしている。これが人間というものなのか。リッカルドの身体を床に寝かせた。

魂のある人間は、こういうときパニックになる。

いまは、魂のない自動機械人形オートマタのノヴェラが、なすべきことをしなくてはならない。

気持ちを落ち着ける。円筒シリンダが回転を緩ゆるめて、感情が静まってゆく。

ノヴェラはほんの数十秒前までリッカルドだった肉にく塊かいの前に屈かがみ込んだ。手を取るとまだ温かい。ぎゅっと強く握っても、リッカルドは目を瞑つむっている。

「そのアップリケはかっこ悪いよ、斬ざん新しんじゃない！」

ノヴェラは自分の言うべきことを言った。

さっきもそう言いたかった。言いたかったのに、言えなかった。

「元に戻してあげるから」

手を伸ばしてカエルのアップリケを剥がそうとしたが、それは血に濡れたシャツとひとつになっていて駄だ目めだった。何度か爪つめで引っかいて、指先が赤く染まる。

「リッカルド？」

作業を中断したノヴェラは、親友になれたかもしれない少年に声をかけた。

リッカルドは目を瞑っている。

どうして動かない。

リッカルドの魂はどこへ行った。

リッカルドは、円筒シリンダの抜けた人形のようになってしまった。

身体をゆする。

リッカルドの腰から拳銃が落ちた。

そして、ノヴェラの体内で円筒シリンダが高速に回転を始めた。

魂のない自動機械人形オートマタは、なすべきことをしなくてはならない！

「撃ったのは誰だ！」

リッカルドの銃を構えて振り返った。喉のどの奥から叫び声が衝ついて出る。

弾丸パロツトラが場所を開けた。

そこにいたバンビーニが、知らないといった顔で手を上げて外に逃げ出した。

逃がすものか。銃を手に立ち上がる。

魂のない自動機械人形オートマタは、なすべきことをしなくてはならない！

ふいに、肩に手を置かれた。

「連れて帰ってやろうよ」

さっきまでパニックを起こしていたリタが、涙声でノヴェラを抱きしめる。

ノヴェラはうなだれて拳銃の右手を下ろした。

リッカルドは目を瞑っている。

なけなしの金でジャンク屋に組んでもらった合成獣キメラは、廃車になっていた。ノヴェラたちは手押し車にリッカルドを乗せて、食堂トラツトリアまでの道のりをとぼとぼと歩いた。

夕闇が迫ろうとしている。

二ブロック先の食堂トラツトリアに戻るころには、風が冷たくなってきた。

空き地の前で、アレッシオがノヴェラたちの帰りを待っていた。

いつものように携帯酒瓶ヒツプフラスクに口をつけ、手持ち無ぶ沙さ汰たにしている。その姿を見たとき、リタが泣き出した。大声で、叫ぶように泣き喚わめく。それがきっかけだった。弾丸パロツトラの少年たちも次々に泣き出し、しゃくりあげながら手押し車を押した。

涙の葬そう列れつの中心で、ノヴェラは下を向いて黙々と足を運んだ。

自動機械人形オートマタに魂アニマはない。

彼らのように涙は流れてこない。

そのことが悔しく、情けなかった。

xii

「どうだね、最近のマフィアのやることは。銃と爆薬でなんでも片付けようなどと、野や蛮ばん極まりないと思わんかね。今け朝さも検察官が爆殺されたニュースで起こされた。まったく安眠妨害だよ、煩わずらわしいことこのうえない！」

ペトルチアーニは、いつものようにテーブルに並んだ食事を平らげながら唾つばを撒まき散らした。向かいに座った真しん珠じゆの瞳ひとみの自動機械人形オートマタが、黙ってその様子を窺うかがっている。

ここは銀の城。

ベルモントの地下に作られた、銀の結界だ。

内装の全てに銀製品があしらわれ、シャンデリアの光に乱反射を起こしている。テーブルの上にも銀の食器、柱すら銀のメッキで塗り固められている。

地下なのに窓を付けたのはペトルチアーニの趣味だった。銀ぎん糸しを織り込んだレースのカーテンが引かれると、窓ガラスの向こうには鉄板がある。

この銀色の地下室こそが、仮面の男マスケリーノペトルチアーニの拠ね城じろだった。

「だいたいくだらない人間が多すぎるのだ。金が欲しい、金が欲しい、ああ金が欲しい！　連中が言うのはそればかりさ、どいつもこいつも資本教徒で狂信者だ。おまけに連中はこう嘯うそぶくのだよ、『金が欲しいのではなく、金が必要なのだ』とね！　とんだ詭き弁べんさ。金がなければ息が詰まって死ぬとでも言うのかい？　ばかげた正当化さ。本当のことを言うとだね、連中は病弱なのさ。中流意識を満足させられないと鬱うつ病びようにかかるのだよ。稼かせいだ金はその医療費に消えるって寸すん法ぽうだ。こんな無む駄だはないよ！」

「貴方あなたの鬱うつ憤ぷんは充分に分かりましたが、知ったことではありません。報告は簡潔に願います」

真珠の瞳の自動機械人形オートマタは冷たく言い放った。

ペトルチアーニは内心の喜びを隠しながら、大げさに残念がってみせた。

「そんなにつれないことを言わないでくれたまえ。この銀の城には、薄汚い人狼おおかみどもも近寄れぬから安心だ。今日はたっぷりと時間をとってくれたのだろう？」

「時間はありますが、それは下水を流れる腐くさったネズミの死し骸がいにも劣る無む駄だ話ばなしを聞くためではありません。貴方あなたの行動を、私の主人も不可解に思っています」

「教きよう煌こう庁ちようのお偉えら方がたには分からんよ。この私の感じていることなど、なにひとつね」

「抽象的な話も結構です。スラムのギャングがひとり死に、それがどうしたと言うのです」

「私の思おも惑わくは外れておらんということさ。究極の古代復興運動リナツシメントは進行中だ。安心してくれたまえ」

「その台詞せりふは何度も聞きました。他に報告することはないのですか」

「他には何もないよ、全く、何ひとつ！」

「嘘うそをついても無駄ですよ」

「ペルラ君、これでは公平な取り引きが成立せんよ。私は報告をするばかりで、何の情報もいただけないのかね」

「教煌庁は貴方の活動に対し一切の妨害をしないという、最高の条件との等価交換です」

「まるでマフィアの脅きよう迫はくじゃないか。君たちだって骨董人形アンティークのノウハウを持っているだろう。そいつを私にも分けてくれないかね」

「存命中の人間で骨董人形アンティークの製法を知るのは、貴方だけです」

ペトルチアーニは真珠の瞳を盗み見た。

ペルラは絡みつく視線を受け流した。

「貴方は、錬れん金きん術じゆつの技術を復活させ、ノヴェラと

フォーラという新型の自動機械人形オートマタを作り上げることに成功しました。驚嘆すべき事業です」

「私が作りたかったのは、辛かろうじて動く欠けつ陥かん人形ではないよ。かつて、あのジャケ・ドローが生み出した幻の傑けつ作さくにして原初の自動機械人形オートマタ、つまり君のような『銀貨アルジエント』だ。その物言いは皮肉に聞こえるね」

「二百年前に銀貨アルジエントを作られたのはカリオストロ伯はく爵しやくです。彼が円筒シリンダをつくり、ジャケ・ドローは軀く体たいを作ったにすぎません。円筒シリンダこそが自動機械人形オートマタの証あかしです」

「嘆かわしい。銀貨アルジエントたる君の理解もその程度なのかね」

「どう受け取られようと構いません。これ以上は時間の無む駄だですので、単たん刀とう直ちよく入にゆうに伺います。カリオストロの遺い稿こうはどこにあるのですか？」

「何度も言っているでしょう。燃やしましたよ。私の命を守るためにね。中身は全てこの灰色の脳みその中だ。いや本当は白いのだよ、灰色の脳というのは修辞レトリツクでね。ともあれ私の頭にしまっておく限り、君も、君の主人パドローネも私に手をだせない。拷ごう問もんをするなど愚ぐの骨こつ頂ちようだよ。私の体内には絶命するための秘密の装置が十三個仕掛けられている。絞首台の階段と同じ数字なのだよ。もし君が私を拘こう束そくしても、それら全てを取り除く前に私が死んでしまうというわけさ。痛いのや苦しいのは真まっ平ぴらだからね」

　ペルラは黙った。

　ペトルチアーニは得意になった。

「どうかね、私の銀の城は。君たちにとっては居心地のいい場所だろう。今日は泊まっていくといい」

「遠えん慮りよします」

「私も君も、そう遠い仲ではないと思うのだがね」

「近しい仲とも思えませんが」

「美しい顔が紅こう潮ちようするのはたまらんな。君の円筒シリンダには、さぞかし美しい楽譜スコアが刻まれているのだろう」

　ペルラは懐中時計サポネツタを手にして時間を確かめた。

　ペトルチアーニはその仕草をうっとりと眺めた。

「貴方あなたが犬の糞くそのように薄汚い脳みその中で私のことをどれだけ陵りよう辱じよくしようと、それは勝手です。興味もありません」

「ところが君の主人パドローネは、糞の臭いを嗅かぎたくて仕方がない好き者だよ。おっと、武器をしまってください。私たちは互いに欲情していても、あるいは軽けい蔑べつしていても、パートナーではありませんか」



　ペトルチアーニはわざと敬語で話しかけた。

　ペルラはテーブルの下で拳を握り締めた。

「……それほど、私をお望みですか？」

「欲しいね、私は君を見るたびに欲情する」

「私が貴方あなたと一夜を過ごすのなら、閨けい房ぼうではなく地下室を選びます。貴方を逆さ吊りにし、頭に血を上らせてからのこぎりを使うために……」

「ペルラの拷問で死んでいった犠牲者を、私は哀あわれとは思わんよ。妬ねたましいくらいだ」

「のこぎりは同性愛者への刑けい罰ばつですが、殺すことを目的とはしません。刃はの粗あらいのこぎりを股こ間かんにあてがい、悲鳴を搾しぼり取るように前後に動かします」

「待ってくれ、ペルラさん」

「どんなに哀れみを請うても、決して力を緩ゆるめることはありません、的確に挽ひきます。貴方の薄汚い生せい殖しよく器きが血まみれのひき肉となるまで、懐中時計サポネツタの秒針がじっくりと時を刻むように、一晩がかりでお世話をいたします。それはまるで……」

「もうやめてください、射しゃ精せいしてしまいそうだ！」

　ペトルチアーニは咀そ嚼しやくした肉を見せて笑った。

　ペルラは引き結んだ唇の内側で白い歯を嚙かみ合わせた。

「ペルラは私を嫌っている、いや憎にくんでいるね」

「答える必要はありません」

「私はそれが欲しい。あの役立たずのノヴェラにそれを与えてやりたいのだよ。人を憎む心、恨む心、君のような銀貨アルジエントにはそれが備わっている。だからこそ私の心を惹ひきつけてやまないのだ！」

　ペトルチアーニは立ち上がった。テーブルについた手で肥満した肉体を支えながら、おぼつかない足取りでペルラのところへ歩み寄る。テーブルクロスがよじれ、料理を乗せた皿が絨じゆう毯たんの上に落ちた。

「そうだ、もっとその見下した目で私を見てくれたまえ。ノヴェラとフォーラの体内に眠った機構が覚かく醒せいするためには、その憎しみが必要だ。ペルラ、君は完かん璧ぺきな人形だ。私が欲しいのは君の完璧さなのだよ！」

　ペトルチアーニはペルラの肩に手を乗せた。太い指先でその頰ほおを撫なでる。唇に触れ、ゆっくりと左右になぞる。

「手をどけてください」

「ペルラ、私はそのうちに君の瞳石ジエンマも手に入れてみせる」

　大きい手のひらが首筋から服越しに鎖さ骨こつの上をなぞり、ペルラの乳ち房ぶさに触れる。息を荒げたペトルチアーニは恍こう惚こつの世界に身をゆだねている。

「手をどけるように言いました」

「君がどけたまえ、その美しい指で」

　ペトルチアーニの指が服の上から乳首を探る。

「皆が仮面の男マスケリーノにうんざりしているのです。これ以上、貴方あなたが情報の出し惜しみをするのなら、少々は痛めつけることもやむを得ないとの旨むねを、主人より申しつかっております」

「いいぞ、その冷たい瞳だ。私は君の瞳を見るたびに、そこに舌をねじ込んでやりたくなるのだよ」

　ペルラが顎あごを引いた。テーブルの下、銀の懐中時計サポネツタが高速で回転を始める。刃が飛び出し、鎖くさりが銀の光となってほとばしる。

　衝撃！

　硬質の激突音がして、ペトルチアーニの巨体は部屋の隅まで吹っ飛ばされた。高速に回転する銀の刃は、分ぶん銅どう鎖さのようにあらゆるものを打ち砕く。乳ち房ぶさに触れていたペトルチアーニの右腕は肩から切断され、銀の照明を浴びて宙に舞った。

　ペルラの口元がほころぶ。静かに笑いながら、彼女は心からの快感を味わっていた。転がった右腕を蹴けり飛ばし、うずくまるペトルチアーニの背中に尖とがった靴くつのつま先を乗せる。

「貴方は知りえた情報だけを吐き出せばいいのです。それ以外の発言は許しません」

つま先に力をこめる。最初からこの対応でよかったのだ。あとはこの醜みにくい仮面の男マスケリーノから悲鳴を搾しぼり取るだけだ、ゆっくりと時間をかけて……。

「それでは君を楽しませてあげられんよ」

ペルラは弾かれたように飛びのいた。ペトルチアーニの声が常つね日ひ頃ごろと変わらなかったのだ。真しん珠じゆの瞳が丸い巨体と転がった右腕を交互に捉とらえる。そこに出血の跡はなかった。

「ペルラにひとつ、とっておきの秘密を明かしてあげよう」

ごろりと、絨じゆう毯たんの上でペトルチアーニの巨体が仰あお向むけになった。

アラビア風の服を脱ぎ捨て、贅ぜい肉にくを晒さらす。

「貴方は……」

「そうさ、見てくれたまえ。これが私の肉体だ。その美しい真しん珠じゆの瞳で、隅々まで視し姦かんするといい！」

ペトルチアーニが笑う。その身体は両手両足が根元から作り物だった。彼の本体は頭と胴体、そして贅肉に埋もれたペニスまでで、あとは骨董人形アンテイークと同じ部品で作られた義ぎ手しゆ義ぎ足そくが取り付けられ、人の手足のように蠢うごめいていた。

「君ともあろうものが驚いたかね。私と君は遠くない間柄だと言っただろう。どうだねこの姿は？　私は自分にあだ名をつけた。『半分機械人形ハーフマタ』というのだよ。なかなかとんちが利きいているだろう？」

ペルラは黙ってペトルチアーニの裸体を見下ろした。この男に拷ごう問もんをするならば、致命傷を与える覚悟が要る。そもそも苦痛に屈するだろうか。彼女の円筒シリンダは判断に迷っていた。

「貴方は復ふく讐しゆうのために兄妹を作ったのですか？」

「ペルラの洞どう察さつ力りよくを私は愛すると誓ちかうよ。そうさ、私はもうじき、あの糞くそったれの人狼おおかみどもを駆逐してやるのだ」

ペトルチアーニが笑った。

ペルラは無言で懐中時計サポネツタをしまった。

「さあどうするペルラ君？　私はこの手だ、もう人形をいじられん

よ！」

「それがどうしました？」

「なにをとぼけている。直すのだよ、君が！　この私を！　君は自動機械人形オートマタの修理ができるのだろう？　さあ、隣の部屋にベッドがある、早く私を連れて行きたまえ。そこで続きの話をしよう！」

　ストレッチャーに仰向けになったペトルチアーニの横にペルラは立った。高さを調節して、修理の準備をする。それは簡単な鉄線と細管の連結作業だった。

「君の指先が私の肉体に触れる、この日をどれほど私が待ち望んだか分かるかね」

　ペルラは答えない。ただ機械的に修理を完了させるべく指先を動かしている。

「ああ、そうだ、肩口の神経はそこで切断されている。その先は駆く動どう部だ。分かるだろう、私には両手両足の感覚がないのだ。君の唇や乳ち房ぶさに触れても、なにも感じないのだよ」

「本当の手足はどこにあるのです？」

「緑の大地だよ。いやいや、本当なのだよ、その間の過程を省はぶきはしたがね」

「過程とは？」

「私の手足は糞くそったれ人狼おおかみの牙きばに嚙かみ砕かれ、錆さび臭い胃液で消化されたあげく、本物の糞になって緑の大地にばら撒まかれたのさ。君なら哀あわれと思ってくれるだろう？」

「いえ、特に」

「冷たいね。もっともそういうところがたまらないのだが」

「続きの話とやらをお聞かせください」

　ペルラが指揮棒バツケツタを動かすたびに、ペトルチアーニの頰がだらしなく緩ゆるむ。仮面マスケラの上から両方の目玉に指揮棒バツケツタを突き立てることを想像しながら、ペルラは淡々と修理の手を動かした。

「私がなぜ、彼らにノヴェラとフォーラという名をつけたと思う？　それは、彼らに私の物語を完結してもらうためだ、分かるかね？」

　ベッドの上のペトルチアーニがいったん言葉を切った。

　それからさらに大きい声で続ける。

「物語ノヴエラは御伽話フオーラと出会うことで魔法物語フイアーバとなる！　分かるかね、私は魔法物語フイアーバの誕生を待ち焦こがれているのだよ」

「魔法物語フイアーバ……」

「つまりは君たちのようなものだ。銀貨アルジエントの存在は、すでにして魔法物語フイアーバだよ。魂のない自動機械人形オートマタは人間としての完全な魂を持つことで、君たち銀貨アルジエントのような対魔兵器としての性能を持つことができる……あるいはそれ以上のね」

　ペルラは答えない。ただ黙々とペトルチアーニの修理を続行する。

「物語はそこへ向けて進むのだ、それは私の復ふく讐しゆう譚たんでもある！」

　息が上がった。ペトルチアーニは急いで空気を貪むさぼる。

　人心地のついた仮面の男マスケリーノは、修理に専念するペルラの横顔に見とれた。

　少なくともこの瞬間、彼はペルラを支配している。贅ぜい肉にくの隆りゆう起きの向こうでペニスが反応を始めた。

「なあペルラ君、私は右手がない。そいつを満たしてやれんのだ。かわいそうと思うのなら、その美しく白い手で傷しよう心しんの私を慰めてもらえんかな」

「その必要を認めません。ですが、貴方あなたが何をしようと関知しません。左の手が動くのなら、好きにすれば良いでしょう」

「つれないね、だがそれでこそペルラだ。ああ、私はいま幸せだよ。心から幸せだ」

　修理の最中にペトルチアーニは自じ慰いを始めた。ペルラは彼の呼吸に耳をそばだてながら修理を続けた。左手がせわしなく動く。嗚お咽えつが漏れる。やがて彼の興奮が絶頂に達そうとするそのとき、指揮棒バツケツタで腋わきの下の神しん経けい叢そうをかき回してやった。

「ぐおおおおっ！」

「射しゃ精せいをしたければしなさい」

　初めてペトルチアーニが悲鳴を上げた。絶叫の余よ韻いんをかみ締めながら、ペルラは修理を完了した。醜しゅう悪あくなペニスはすっかり縮こまり、肉の間に埋もれていた。

　汗まみれになったペトルチアーニが、目を見開いて天井を見上げている。息は荒く、時おり喉を引きつらせ、鼾いびきのような音を立てる。

「やりすぎました。貴方の心臓を止めてしまっては意味がありません」

「いいんだペルラ、私はあの日から、今日ほど満ち足りたことはない」

「なぜ、情報を盾たてに私の身体を求めないのです」

「それではつまらないのだよ。君は所しょ詮せん、瞳石ジエンマの命令に逆らえない人形に過ぎないのだからね」

　嘲ちょう弄ろうするように半分機械人形ハーフマタのペトルチアーニが笑う。

　ペルラはなにも言わずにきびすを返した。

xiii

　頭の上で大気が裂さける。

　いくつものワイヤーが藪やぶを突き破り、複雑に絡みあって薙なぎ倒す。

　まぎれもなく、あの糞くそったれの銀貨アルジエントどもだ！

　逃げろ、逃げろ、逃げろ。

　誇り高い戦士の俺が、どうして逃げろなんて言う？

　立ち止まったら殺されるからか？

　勝ちの目がどこにもないからか？

　畜ちく生しよう、この屈くつ辱じよくと死と、どちらが重い？

　脚に食い込む銀の糸、そいつを鉈ベイダナでぶった斬ぎる。

激痛。そして何よりも怒り！

それは、俺を鎖くさりにつなぐ奴らへの復ふく讐しゅう。

奴らと、奴らを操る機構システムへの報復。

人形どもを作ったのは誰だ？

大地の神を殺したのは誰だ？

本能が下すのはシンプルな命令だ。

喰くらえ！

煉れん瓦がの家に潜ひそむ奴らの、血のしたたる内臓を食い破れ！

振ふり子この裏に潜む奴らの、白く柔らかい脳のう髄ずいを噛かみ潰つぶせ！

右の腹をワイヤーがえぐる。顔の肉が食い破られる。

人形遣いプラッテイナイオめ、その哀れな人形を許してやれ。

俺たちをもう踊らせるな。血の海で踊るのはお前たちだ。

奴らは殺さつ戮りくのために生まれた。

俺は復ふく讐しゅうのために生かされた。

はびこる豚ぶた山や羊ぎを殺すために。

爪つめと牙きばの存在意義をこの手に取り戻すために！

地ち下か牢ろうの中で意識を取り戻した。

壁を伝う水滴が神経を鋭敏にする。男は、自分が長い夢から覚めたことを知った。

闇を見通すことのできる黄き金ん色の瞳は、両手両足に食い込んだ銀の鎖を捉えている。身動きはできない。岩肌を湿らせた露つゆの冷たさだけが、男の意識と現実とをつなぎとめている。

狭く冷たい牢ろう獄ごくにつながれて、どれだけの時が過ぎただろう。

とうに時間の感覚はなくなっていた。

夢と現実と、どちらが重要かといえば現実だ。

理由はひとつ。現実が重要なのは、そこに継続性があるからだ。

男は一匹狼だった。

ただ一人、世の中に見捨てられ、泥水をすすって生き延びてきた。

それでも男は、狼の誇りだけは失っていなかった。少なくとも、この別荘に群れている連中に比べれば！

全身に受けた切り傷は、もうほとんどが塞ふさがりかけている。しかし銀の鎖で縛しばられた狼は無力だった。相手がその気になれば、持てる力をなんら発揮することなく殺されるだろう。漆しつ黒こくと静寂に支配されたこの地下牢に光が差し込み、銀の得物を持った処刑人が姿を現せば、彼の存在はこの地上から永遠に消えてなくなる。

為なすべきことはした。あとは暗い地下でその時を待つだけだ。

この上に自分の命運を握った男がいる。その男のことを、彼は名前しか知らなかった。

オルマ・ロッサの副頭領ヴイーチエカーポシルヴィオ。

そいつが生死を決める。

いったいどれだけ夢を見ていた。半日か、それとも半月か、あるいは半年も過ぎただろうか、肉体の傷は塞がったが、心は決壊寸前まで追い詰められている。

ここはオルマ・ロッサ。

北部にその名を轟とどろかせる犯罪組織オルマ・ロッサの本部、闇に生きる人狼たちの住すみ処かだ。

沈黙の掟オメルタに背そむいた裏切者を閉じ込めるための地下牢で、男は賭かけをしていた。それは強固な決意に支えられている。

復ふく讐しゅう！

己が力のみを恃たのんできたはぐれ狼が、他者に命運を委ねたのはそのためだ。そのためには組織に屈することもためらいはしない。

ここにあるのは永遠の沈黙と、彼の息づかいのみ。

やがて──地上につながる鉄の扉が重い音を立てて開き、眩まぶしい外の光が差し込んできた。

「出ろ」

短い言葉だった。銀の鎖と地下牢の岩壁をつないでいたフックが外される。

ようやく立つことを許されたフランチェスコは、自分の賭かけが前に進んだことを実感した。

「フランチェスコか、ふざけた名前だ」

スーツを着た大柄な男が、黒こく檀たんのデスクの向こうで葉巻を吹かしている。恰かつ幅ぷくはいいが、顔つきは若かった。

「名前は自分でつけた」

短く答えると、男は紫煙を吐き出しながら笑った。フランチェスコというのはポピュラーな聖人の名前だ。狼がそれを名乗るのは聖人を穢けがすことにつながる。

「あんた、ちったぁ口の利きき方に気をつけたほうがいいぜ」

隣に立った別の若いマフィオーゾが凄すごんでみせる。フランチェスコはそっちを一いち瞥べつすらしなかった。葉巻の男の視線がフランチェスコを捉えている。ここでおかしなそぶりを見せれば、彼の命はこの二人によって奪われることだろう。

「黙っちまった。あんた、こないだの威勢はどうした。すっかり牙を抜かれちまったか？」

若いマフィオーゾが挑発するように顔を覗のぞき込んでくる。

「カルメロ」

「おいおいおい、手前てめえに名前で呼ばれる筋合いは、これっぽっちもねえぞ」

「君とこれ以上やりあう筋合いもない」

態度は下げ衆すなちんぴらそのものだが、この若いマフィオーゾは相当な腕利きだ。そいつとフランチェスコはいさかいを起こし、互ご角かく以上に戦ってみせた。

「カルメロ、そいつは強かったか？」

葉巻の男が口を開いた。

「クソみてえなもんですよ、相手が蠅はえならいい勝負ですがね」

「なるほど、よく分かった」

　はぐれ狼が組織の者に逆らえば死は免まぬがれない。喉を鳴らして笑った葉巻の男は、赤い目でじっとこちらを値踏みしている。フランチェスコの戦闘能力を利用しようと考えているのだ。

「フランチェスコ、貴様はどうして俺のところへ来た」

「貴方あなたのところ？」

「白を切るんじゃねえ。下手な駆け引き打とうなんて考えると、命はねえものと思え」



　カルメロと呼ばれたちんぴらが凄すごんでみせる。笑っているところを見ると、本気ではなさそうだ。汚い言葉で遊んでいるようでもある。

「……組織ファミリーに入りたい」

「イカレてやがんのか？　手前みたいな野良犬がおいそれと入れる仲良しグループじゃねえですぞ」

「だから俺のところに来たんだよ、こいつは」

　葉巻を灰皿で押し潰つぶした男が立ち上がった。その姿は巨大だ。フランチェスコの胸倉をつかんでいたカルメロが、慌あわてててその手を放す。

　この男がシルヴィオだ。国内全土に名を轟とどろかすオルマ・ロッサの副頭領ヴイーチエカーポ、フランチェスコの命に値段をつける男。

「貴き様さまが持っていた情報は実に面白い、それは認めてやろう。だが馬鹿正直に本部の人間と接触しても、こんな情報ものはゴミと一緒だ。そこで貴様は考えた。この俺が相手ならば、情報の値を吊つり上げられるだろうとな。そのために、わざとカルメロに突っかかってきやがった、違うか？」

「副頭領ヴイーチエカーポは話が早い」

　シルヴィオが後ろを向いた。窓を開けると、北からの夜気が運ばれてくる。

「俺はまだ蠅はえクラスの腕前を見てねえ。見せてみろ」

「ご随ずい意いに」

「俺の下したっ端ぱに、組織を抜けようとした馬鹿がいる。始末してみろ」

　受話器を取ったシルヴィオは、どこかへつながると「奴を逃がせ」と命令した。

「狼ですか？」

「そうだ、銀器なしにやれるか？」

「銀など触るのも願い下げですな」

　シルヴィオが笑う、フランチェスコも笑った。腕試しは想定のうちだ。せいぜい高く売りつけてやろう。

　三人で外に出た。

　灯あかりは必要ない。狼の視力と嗅きゆう覚かくがあらゆる地形を闇の中に浮かび上がらせる。シルヴィオの案内で、三匹の狼は月明かりの草原を見下ろす崖がけの上に来た。

　シルヴィオから愛用の武器が返される。

　鋼鉄の鉈ベイダナ──無慈悲な鉄の塊かたまり。

　こいつは獲物を切り裂さくのではなく、斬きり砕くのだ。

「じきにこの下を通るから殺せ。牢ろう獄ごく暮らしのハンデとして、地の利を貴き様さまにやる」

「光栄の至り」

「カルメロ、いざというときはとどめを刺せ」

「マジっすか、オレがこいつの手伝いを？」

「二人にとどめを刺せと言ったんだ」

「そういうことならうってつけです！」

　小躍りして喜ぶカルメロを無視して、フランチェスコは茂みに伏せた。大地の臭いがする。手には愛用の鉈ベイダナ、月はじきに満月。身体中の狼の血が歓喜に沸き立っている。

　隣からカルメロが首を突き出してきた。

「なあ、あんたバテてない？」

「平気だ」

「ずっとつながれてたんだぜ、あんなクサい穴倉でよ」

「今は気分がいい」

　ちらと後ろを気遣ったカルメロが声を落とす。

「兄貴には内緒だが、今年に入ってからオレが殺したのは、男が二十五人に女が五人、人形が三つだ。あんたは？」

「覚えていない」

「おいおい、待ってくれ。ゼロってことはないだろうな」

「ゼロで問題があるか？」

「大ありだ。遊びでやってんじゃねーんだぞ。もしもしくじったら、オレがお前の脳天にナイフだの斧おのだのを突き立てんだ。とっても嬉うれしいじゃねーか！」

「そうかい」

　フランチェスコは闇夜に身を躍らせた。崖がけ下したまで十五メートル。すでに右手は鉈べイダナを抜いている。すぐに一人の男が姿を現した。身を隠すように走ってきた若い男が、フランチェスコの着地地点に入る。

　風を切る気配に男が上を見た。手には回転式リボルバーの拳銃。銃口が一瞬でフランチェスコの眉み間けんをとらえる。

　撃ってこい！

　引き金の指が絞られるよりも速く、鉈べイダナの一いつ閃せん。

　月の照らす草原に甲かん高だかい音が響いた。銃声ではない。鋼鉄の鉈が頭ず蓋がい骨こつを叩たたき割った音だ。フランチェスコは着地と同時に身を翻ひるがえし、男のひしゃげた頭部に第二撃を叩き込む。頭蓋が粉ふん砕さいされ、白い脳組織が見えた。男は動けない。そこに手を突っ込んで、ぶよぶよした脂し肪ぼうの塊かたまりを引きずり出す。

　大脳半球が崩れたプディングのように手の中に納まった。残った脂肪も掻かき出して、フランチェスコは走り出した。脳をえぐられた男が動き出す。銃口が火を噴いた。肉体の反応だ。肉体はしばらく生きている。脳みそを口に咥くわえて崖を駆け登った。上ではカルメロが呆あっ気けに取られたような顔をしている。

「今年は狼が一匹だ、これで満足か？」

「てめェ……」

　鼻はな白じろんだカルメロは、すぐに表情を崩くずした。

「手前てめえは、面白え！」

　握手を求められる。その手の上にフランチェスコは暖かい脳みそを置いてやった。仰ぎよう天てんしたカルメロはそいつを地面に叩きつけ、踏みにじる。土の上で脂肪の塊が溶け、やがて泥になった。これであの人狼は本当に死んだ。

「同族は喰ったことがないのか？」

　手の中に残った狼の脳のう髄ずいを舐なめ上げる。少し嗜し虐ぎゃく的な気分になっているようだ。死体を穢けがしたい。刃物を使わずに、ばらばらに引き裂いてやりたい。しかし、ここはシルヴィオの前だ。

「腕前はよく分かった。フランチェスコ、満足だ」

「光栄ですな」

「取ってこい」

「は？」

「人ひと攫さらいだよ。貴様の情報どおり、銀貨アルジエントに比ひ肩けんする新型の自動機械人形オートマタがベルモントにあるというのなら、そいつを見せてもらおう。真実それを手に入れた暁あかつきには、貴様が組織に入れるように俺が図ってやる」

　赤い目がフランチェスコを射い貫ぬく。ひょっとすると自分は動揺したのかもしれない。ベルモントに立ち入るということは、天敵のような戦闘機械と戦うということだ。

「私ひとりで？」

「支援してやりてえが、ベルモントには組織オルマ・ロツサの者が立ち入れない協定がある」

「なるほど」

　フランチェスコの口が無意識のうちに笑っていた。

「私はいつベルモントに向かえばよろしいか」

「今夜のうちだ」

「もうすぐ満月になりますが」

「だから俺たちは人里に下りねえ。誇り高き狼にとって人喰いはタブーだからな」

「私はまだ野良犬というわけだ。ならば、最後の謝肉祭カルネヴアーレを楽しませてもらうとしましょう」

　こんなものか。フランチェスコは鼻で笑った。

　そんなに甘くはないと思っていたが、この副頭領ヴイーチエカーポは思った以上に懐ふところが狭い。誇り高きオルマ・ロッサのナンバーツーといえども、この程度の器量なのだ。

「私の武器は？」

「預かっておく。あんなでかい鉈ベイダナを持ち歩いていたら、目立って仕方がないからな」

「副頭領ヴイーチエカーポの御ぎよ意いのままに」

　芝居がかった仕草で忠ちゆう誠せいを誓ちかってみせる。これが組織だ。自分に言い聞かせる。この男はフランチェスコに、丸腰であのおぞましいベルモントに潜入しろと言っているのだ！

「できる限りの支し援えんはしてやる。カルメロに車で送らせよう」

「オレがですか？」

「ベルモントの地理にお前は明るいだろう？」

　狼ろう狽ばいするカルメロに、シルヴィオが牙きばを見せて笑った。

　カッキアーノからベルモントまで、半日近くかけて移動する。途中、市場で軽い食事を済ませ、また車に乗り込んだ。古代復興運動の影響で道路整備まで手が回らないのか、悪路だった。舗ほ装そうの悪いアスファルトに車ががたがたと揺れる。

「ままならねぇ、畜ちく生しよう、全くままならねぇ！」

　ハンドルを握りながら、カルメロは何度も同じ言葉を吐いた。

「何がままならない？」

「黙ってろよ、ああクソままならねぇ！」

　仲間の脳みそを食うような野良犬の運転手をさせられているのが腹立たしいのだ。それでも副頭領であるシルヴィオの命令となれば、従うしかない。

「どうして手て前めえと仲良くドライブとしゃれこまなきゃならねえんだ？」

「組織なんてくだらないな」

「なに言ってやがる、手前が入りたがってるんだろーが」

　そうであろうと、くだらないものはくだらない。

　沈黙の掟オメルタを守り、人を喰らわずに生きることに、この連中はどんな意義を見み出いだしているというのか。

「ああ、胸クソ悪ィったらねぇ。兄貴もなんでこんな奴を……」

「安心しろ、私は副頭領に利用されているだけだ」

「なんだと、どういうことだ？」

「気になるなら話してやろう。私はまだ組織の人間ではないから、沈黙の掟オメルタにも縛しばられない」

　ひとたび剣を交えた相手にはそれなりの敬意をもって接するのが、フランチェスコの流りゆう儀ぎだ。それに、この若いちんぴらには、どこか自分に近いものを感じる。

「副頭領ヴイーチエカーポは私の情報を奇き貨かと思っても、賭けに乗ろうとはしなかった。私が運良くこの無茶な命令を果たせば、そのときは手て駒ごまに使うつもりなのだろう。賭と博ばくもみみっちく張るタイプだな。器うつわの程が知れる」

「おい、手前」

　カルメロがブレーキを踏んで急停車させた。前のめりになった胸倉をつかまれる。

「もういっぺん言ってみやがれ。兄貴のことをその臭ぇ口でよ！」

「私は間違っているか？」

「兄貴は手て前めえを信用したんだ、それを手前は！」

「丸腰でベルモントに行かせることが信用か？」

「なに？　そ、それは分かんねーよ、そこまでは信じちゃいねーんだろ」

「ずいぶんと頼りのない話だな。まあいい、私も言い過ぎた。今のは悲観的なほうの推測だ」

　唾つばを吐き捨てたカルメロが、また車を出した。さっきよりは速度を上げてベルモントへ急ぐ。

「楽観的なほうの推測を話してみろよ」

「シルヴィオは、頭領カーポになるつもりだ」

「なんで手前にそれが言える？」

「そうでなければ私は君に始末され、私の情報も上に報告されただろう。偉大なる頭領カーポヴァレンティーノに取って代わる野望があればこそ、私というカードを懐ふところに入れたのだ」

「手前の情報ってのは、双ふた子ごの自動機械人形オートマタのことか？」

「銀貨並みの戦闘力を持った化け物だ。彼はそいつを切り札にするのだろう。おおっぴらに動きたくはないから、組織とは無関係な私を手駒にした。そう考えれば副頭領ヴイーチエカーポは有能な男だ」

「じゃあそっちで考えやがれ！」

「そうだな、独ひとりの生活が長すぎたのか、発想がひねくれていけない」

「自覚してるんなら努力しろ。あんた、ちょっと異常だぜ」

「どこがだね？」

「躊ちゅう躇ちょなく殺せるんだろう、同族を」

　カルメロは前を見ている。この若いマフィオーゾは、フランチェスコの歩んだ道みち程のりを想像すらできないだろう。

「狼は群れをなす生き物だ」

「あぁ？」

「一匹狼は狼ではない。私はもう、なにか別の化け物になっているのかもしれない」

「チッ」舌打ちの音がした。

「それが狼に戻りたがるのを、軽けい蔑べつするか？」

　カルメロは答えない。フランチェスコは問いを重ねた。

「あの男は優しいか？」

「あんたにそんなことを話す筋合いはねーよ」

　アクセルが踏み込まれる。車の揺れがひどくなる。ちんぴらの口調

が、こころなしか丸みを帯びている。

「……組織に入れたら教えてやる」

「上首尾を祈っていてくれ」

「無残にくたばっちまうほうに祈ってやるよ」

　フランチェスコは、カルメロにハンドルを任せて目を閉じた。

　ベルモントでの仕事に平穏は望めまい。

　首尾よく果たしたとして、シルヴィオはどう出るだろうか。

　組織へ迎え入れるというのも嘘うそっぱちかもしれない。過去に何度も苦い思いをしてきたからそう考えるのだ。シルヴィオは、流れ者の狼を利用するだけ利用して殺す気かもしれない。その推測に何の不思議もない。

　手札の悪い賭かけだ。しかしフランチェスコには、そのカードに張っていくしか道が残されていない。

「カルメロ、人間を喰ったな？　最近だ」

「な、なに言ってやがる。あんた妄もう想そう癖へきまであんのか」

「騒ぐな、臭いで分かる。おまけに麻薬ドウローガの臭いもたっぷりとな」

　舌打ちの返事がくる。自分と似たものを感じたのは、この人狼が人喰いだからか。

「フランチェスコ、あんたは何人喰ったんだ」

「小さな町くらいだ」

　カルメロが口笛を吹いた。

　フランチェスコは欲望を押さえつける連中の気が知れなかった。組織などと格好をつけて、自然の法則に逆らう愚かな連中だ。

　そんな組織をシルヴィオは変えようとしている。だからフランチェスコはここにいる。

「カルメロ、オルマ・ロッサは変わるよ」

　聞こえるように呟いた。変えるのはシルヴィオだろうか。ひょっと

すると自分かもしれない。

　車はアルノ川に沿って南下してゆく。

　小高い丘の向こうにベルモントの町並みが見えてきた。

　　　xiv

　死体はゆっくりと運び込まれてきた。

　シーツに包まれた腹部が赤く染まっている。顔が綺き麗れいなのは幸いだった。

　食堂の長テーブルにリッカルドの身体が寝かされ、その横に真新しいＭ９が置かれた。彼を囲んだ弾丸パロットラの誰もが目を赤く腫はらしていた。ただノヴェラだけが、綺麗な瞳ひとみで寂しそうに下を向いている。

　子供たちが動どう揺ようしないように、アレッシオは一人一人に声をかけてやった。フォーラは奥のテーブルで髪を梳とかしている。リタが、ノヴェラが、一緒にいた弾丸パロットラの少年たちが、震える声でリッカルドの最さい期ごを語った。

　アウトードロモの最終カーブを曲がりそこなったリッカルドの車は、車道から飛び出してビルのエントランスに正面から突っ込んだ。轟ごう音おんとともに白い煙があたりを包み込んだ。合成獣キメラは大たい破はし、駆けつけたノヴェラたちが運転席からリッカルドを引っ張り出したときには、すでに手遅れだった。

　話を聞いたアレッシオは、すぐに車を出させて現場に駆けつけた。目の前は真っ黒だったが、喪失感に身を委ねてしまう前にするべきことがある。

　スラムの奥には市警察も立ち入らない。ガラスの飛び散ったエントランスに足を踏み入れると、事故を起こした合成獣キメラはそのままの姿で残されていた。ひん曲がったドアが転がっている。車のダッシュボードには真新しい血ち反へ吐どがぶちまけられている。ここでリッカルドの生命が破壊されたのだ。

　ノヴェラは事故の直前に銃声を聞いたと言っていた。ライトを当てて合成獣キメラのタイヤを調べる。曲がれなかったのなら前輪をやられたはずだ。果たして前輪の右タイヤが破裂バーストしていた。さらに中を覗のぞき込む。見つけた。アレッシオは血が沸ふつ騰とうするのを感じた。分厚いゴムの亀き裂れつ、そこに二箇所の銃じゆう痕こんがあった。

「クソが！」

　唾つばを吐き捨てた。その場にアレッシオが居合わせていても、これではどうしようもなかっただろう。ぎりぎりのバランスで走行する合成獣キメラは、二発の銃弾であっけなく制御を失ってしまったのだ。アレッシオを運んできた弾丸パロットラの少年が、神妙な顔をしてこっちを見ている。前輪の異状に気づかれないように車に戻った。

　バンビーニの仕し業わざに間違いなかった。

　騒ぎのうちに勝負は無効となった。ノヴェラを奪われることはなかったが、バンビーニはこれからもスラムを拠点に麻薬販売にいそしむだろう。

　食堂トラットリアへ戻る車。窓の外は暗く、目ばかりをぎらつかせたアレッシオの顔が映り込んでいる。携帯酒瓶ヒップフラスクに口をつけ、底に残ったアルコールを一息に飲み干した。

　リッカルドの無念が痛いほど伝わってくる。だがアレッシオは、仮面の男マスケリーノの配下として弾丸パロットラの激発を抑える側の人間だ。彼らとともにバンビーニを壊滅させる立場ではなかった。

　目を瞑つむらなくてもリッカルドの笑顔が窓の外に浮かぶ。『どちらが本当のアレッシオですか？』ノヴェラの緑の瞳がそう問いかけてくる。

　夜中に帰ってきたルーカは、そこで初めてリッカルドの死を知った。

　割り当てのみかじめピッツオを全て集金してきたと、得意げに親指を立てたルーカの表情が凍りついた瞬間を、アレッシオの脳は忘れないだろう。ルーカが幼い頃から悪事を分かち合った親友は、冷たくなって食堂の長テーブルに寝かされていた。

「なんでだ、なんでこうなった！」

　涙を見せたことのないルーカの目が真っ赤になっている。リッカルドの死体を囲んだ弾丸パロットラの誰もが、ふたたび涙を流し始める。

　彼らの喪失感と怒りは、アレッシオの感じた何十倍も大きいはずだ。合成獣キメラのタイヤに銃じゅう痕こんがあった──そのことを知れば、弾丸パロットラの怒りは頂点に達するだろう。みながファビオを殺してやりたいと思うだろう。だが、組織とつながりのあるバンビーニを潰つぶせば、弾丸パロットラも仮面の男マスケリーノもただではすまない。リッカルドの死には、それだけの重みがあった。

「なにしやがる！」

　長テーブルに置かれたリッカルドの拳銃に手を伸ばそうとしたノヴェラを、ルーカが殴なぐり飛ばした。華きや奢しやな白い身体が床の上に転がる。

「触るな人形野郎、お前が壊れればよかったんだ！」

「ルーカ！」

　いつも大人しいニコロがルーカに飛びついた。必死になだめようとするが、ルーカは聞く耳を持たない。

「あいつら、皆殺しにしてやる！」

　ニコロを振り払い、拳銃を抜いて外に飛び出す。その背中を追ったアレッシオは、裏の空き地でルーカの肩を引き戻した。

「離せ！」

「だめだ、行かせるわけにはいかない」

「うるせえよ！」

　ルーカは振り向きざまに蹴けりを見舞おうとする。そいつをやり過ごし、身体の泳いだところを殴り上げる。顎あごを打ち抜き、よろけた少年の身体がすとんと尻しり餅もちをついた。拳銃を抜いてルーカに突きつける。

「落ち着け、激発すればお前たちが死ぬことになる」

「それがどうした、リッカルドはもう死んだんだぞ」

　食堂から飛び出してきた子供たちが、銃を突きつけられたルーカを見て悲鳴をあげた。

「冷静になれ、これはレースの事故だ」

「銃声がしたんだろ」

「タイヤがバーストしたんだ。現場で確かめた」

「車くるま音おん痴ちの言うことが信じられるかよ！」

　ルーカはまだ収まらない。それは他の弾丸パロツトラも一緒だろう。

「いいか、お前たちがここでバンビーニに攻撃を仕掛けても、リッカルドは帰ってこない。マフィアは助け合うものだから、友情は否定しない。だが、命を無む駄だに使うな。お前たちがリッカルドの後を追う必要はない」

「なるほど、それがあんたの考えなんだな。この街がうまく回るのに、いくつの棺かん桶おけが必要だって説教がしたいんだろ」

「少なくとも、お前たちの棺桶は必要ない」

　立ち上がったルーカは正面からアレッシオを見据えた。最初に会ったのは十二歳だ。今は成長した大人の顔になっている。

「あんたは親父バーボじゃない、ただの一匹狼だ」

「俺は最初からそう言っている」

　事実を突きつけたつもりだが、胸は痛んだ。親父バーボという幻想の響きがアレッシオの魂を蝕むしばんでいたのかもしれない。

「花を摘つんできたよ」

　人垣の中からリタのか細い声がした。手には、みすぼらしい雑草の花束が握られている。

　リタは手製の花束をシーツの上に乗せた。明日にはこれが花でいっぱいになるだろう。

「報復よりも前に、こいつを埋めてやろう」

「ああ……」

　ルーカは食堂に戻った。リッカルドの死体の前に屈かがみこむ。

「リッカルド、これからは俺がひとりで弾丸パロツトラを引っぱっていくぜ」

　死体の手を握り、搾しぼり出すようにルーカは誓った。

　立ち上がり、そしてアレッシオの目を見る。

「俺はようやく分かったよ、アレッシオ……所しよ詮せんはあんたも外の人だってことがな」

　静かな声だ。ルーカが本当に怒っているのは、自分自身に対してだろう。

いくつもの泣き声が耳じ朶だを打つ。それは、弾丸パロツトラの子供たちから立ち昇る黒い炎が、ランビキ地区のスラムを焼き尽くそうとするかのようだ。

「親父バーボ、あんたに荷物がついてるよ」

ニコロに言われて部屋に戻ると、そこには香辛料の木箱が置かれていた。釘くぎを抜いて蓋ふたを取る。中には九丁の真新しいＭ９が、黒光りする銃身を並べていた。

アレッシオは受話器を取り、ガエターノの番号を回した。

XV

無人の聖堂は静寂の闇に包まれていた。

古い時代から受け継がれた聖せい具ぐの数々が、手入れのされぬまま埃ほこりにまみれ、聖母子像が煤すすけた姿を晒さらしている。

アレッシオはここで仮面の男マスケリーノを待っていた。

執事のガエターノと電話がつながって、わずか二時間。深夜だというのに、このセッティングの早さは異例のことだった。

電話口でリッカルドの死を告げると、ガエターノは舌打ちをした。バンビーニとの確かく執しつと、合成獣キメラレースの顚てん末まつについての報告をする。車の前輪に銃撃のあったことも隠さずに話した。ボスが判断を誤れば、リッカルドの死はスラムの状況を一変させかねない。

面会場所に指定されたのは街外れのセントポール教会だった。聖せい鐘しよう塔とうが時を告げなくなって久しい教会は、廃はい墟きよでも通じるほどに荒れ果てている。

なぜ、いつものようにホテルの最上階を指定しなかったのだろう。聖堂の会衆席に腰をかけ、携帯酒瓶ヒツプフラスクのスコッチでちびちびと口を洗いながら、アレッシオの意識はトラットリア・カプレットのほうへ向いてゆく。

ルーカも弾丸パロツトラの子供たちも眠れぬ夜を過ごしているはずだ。アレッシオが呼び出されたときルーカはまだ食堂にいたが、二人は一言も交わさなかった。ルーカには守るものがあり、スラムで戦いながら生活することを良しとしている。早くゴミ溜だめを抜け出したいアレッシオとは住む世界が違うのだ。

つまりは親父バーボ失格だ。

冷静になれ。ボスは鉄砲玉の死など歯し牙がにもかけないだろう。スコッチをあおる。窮きゆう地ちに立たされているのはルーカと弾丸パロツトラだ。しかし彼らに置いて行かれたのは俺のほうだ。徐じよ々じよに酒の量が増えたが、一向に酔よいの兆きざしは訪れない。

「美う味まそうに飲むな、アレッシオ」

背後で前ぜん廊ろうの扉が開き、電気式イミテーシヨンの自動機械人形オートマタに車くるま椅い子すを押させた仮面の男マスケリーノが姿を現した。今日も山だ車しのような格好で、アレッシオの携帯酒瓶ヒツプフラスクに扇を向ける。

「禁酒法かい？　アメリカ流だな、マフィアの逆輸入かね」

携帯酒瓶ヒツプフラスクが流行したのは一九二〇年代、禁酒法下のアメリカだ。密造酒をポケットに隠し持つための道具として市場に流れるようになった。アレッシオがこいつを使うのも、もとを正せば当時のマフィアへの子供じみた憧あこがれからだった。そいつをポケットにねじ込んで、ボスの耳元に顔を近づけた。

「リッカルドが死にました」

「聞いている、それでフォーラたちはどうしている？」

アレッシオはボスの言葉の意味をすぐには理解できなかった。

「変わりありません。ですが弾丸パロツトラとバンビーニが抗争を始めたら、無事でいられるか知れたものではありません」

「それは困る。順番待ちが死ぬほど嫌いな私が、二人に会いたいのを我慢し続けてもう一月近くだ。このうえ彼らにいなくなられてはたまらない。アレッシオ、私の全身が渇かわき、愛情と欲望の狭はざ間まで悶もだえているのだ。さあさあ、もっと彼らの近きん況きようを話してくれたまえ。干ひからびた植うえ木き鉢ばちに恵みの水をそそぐように、じっくり染み渡らせるのだ」

「しかし、それどころでは」

仮面の男マスケリーノの手が翻ひるがえり、孔く雀じやくの羽う扇せんが煩わずらわしそうにアレッシオを扇あおぐ。

「落ち着け、君らしくもない。リッカルドとバンビーニの不幸な事故については、いまガエターノが対応中だ。北部の各組織と連絡を取り合っている」

「は……」

「だから話したまえ、アレッシオ。今は楽しい報告の時間だ」

　仮面マスケラのペトルチアーニは、車椅子の上でじれったそうに足を踏み鳴らした。がらんとした聖堂に衣きぬ擦ずれの音ばかりが響く。ボスが迅じん速そくに次の手を打っているのなら、自分にできるのは答えを待つことだけだ。リッカルドの人ひと懐なつっこい笑顔を振り払い、アレッシオは自動機械人形オートマタの兄妹について定期的にガエターノに伝えている報告を繰り返した。

　兄と妹の立場の逆転、わがままなフォーラ、嘔おう吐とをするノヴェラ、進まない治療、そしてレース……好ましい材料のない報告に、仮面の男マスケリーノは目を輝かせている。

「なかなか躍やく動どう感かんのある物語だ。彼らをどう思う、アレッシオ」

「俺には、どうして人形があういう考え方に至ったのか、分かりません」

「どういう考え方だね」

「うまくは言えませんが、自分を否定するような人形は初めてです。生きる意味を求めるようなところもあり……」

「そうだ、そこだよ。それはいかにも人間らしいとは思わんか？」

　仮面の男マスケリーノがポンと手を打った。アレッシオの脳のう裏りに、屋上で嘔吐するノヴェラの姿が浮かぶ。あれを人間らしい姿と言っていいのだろうか。

「知りたいかね、どうして彼らが人間のようになれたのかを」

　羽う扇せんをかざし、口元を隠す。ボスが意味のある話をするのは珍しいことだ。

　アレッシオが黙って頷うなずくと、仮面の男マスケリーノはいつものように饒じよう舌ぜつに語り始めた。

「さてと、どこから話そうか……うむ、まずは私の不満について教えようか。私を中心にすると物語は分かりやすくなるのだよ。つまり、私が我慢ならなかったのは、人形は恨うらまないということだ。いいか、私はノヴェラとフォーラに人間になってほしいと思っている。物質的な話をしているのではないよ、魂の話だ。骨董人形アンティークは人間の生き写し、ならば円筒シリンダの心を人間に近づけることもできるはずだ。そうだろう？　そのために、彼らが元来持ち合わせていない感情を引き出してやる必要があると私は考えた。それが『恨

み』だよ。自動機械人形オートマタと人間との最大の違いはそこだ。人形は恨まない、だから愛さない！」

　大げさな身振りで話す仮面の男マスケリーノをじっと見守る。このボスは初めて、アレッシオに大切な話をしようとしている。

「私は愛しているのだよ、フォーラもノヴェラも等しく愛している。彼らには、他の何よりも優れた自動機械人形オートマタになってもらいたいのだ。そのための労ろうは惜しまなかった」

　そうしてフォーラとノヴェラの物語が始まった。

　仮面の男マスケリーノの口から紡つむがれたのは、ノヴェラが腹の中に抱えた忌いまわしい原風景を裏づけるような、アレッシオの想像を超えた物語だった。

　──自動機械人形オートマタに魂を植えつける。その執念に取り憑つかれた仮面の男マスケリーノは、実験の素そ体たいとして最適な一組の人形を用意した。それが、同じ日に生まれた双子の自動機械人形オートマタ、ノヴェラとフォーラだ。二人は主人に忠実で、大人しい人形だった。

　仮面の男マスケリーノは、彼らの嫉しつ妬とを引き出すことにした。片方を幸せにし、もう片方を不幸せにすれば嫉妬の心が生まれるだろう。そう考えて実行に移した。すなわち、妹のフォーラを裕福な名家に仕えさせ、兄のノヴェラを男だん娼しようとして裏社会に放りだしたのだ。美しいドレスを着たフォーラが祝福と共に送り出されたその日に、ノヴェラは場末の娼しよう館かんへ向かうトラックの荷台にいた。

「ここまでは私の思おも惑わく通りだった。ところが事実は小説よりも奇なりだ、ここでとんでもないハプニングが起きた」

　フォーラが転売されたのだ。彼女はその後、名士とは名ばかりの変態の家をたらい回しにされ、慰み物として肉体を酷こく使しされた。緑柱石アクアマリーナの美び貌ぼうは上流婦人たちの嫉妬を買い、ついには破壊的な改造を施されてしまった。

「それを知った私は、慌あわてててノヴェラを買い戻したのさ。フォーラではないよ、ノヴェラのほうだ。これで主客転倒というわけさ。私はノヴェラに贅ぜい沢たくな服を着せて、地下の品評会に連れて行った。何の品評会かは言わなくても分かるな。さて、そこでフォーラはどんな顔をしたと思う？」

『ガイアの蠍さそり』と名前を変えていたフォーラは、客の歓声に応えようと懸けん命めいに微笑ほほえみを浮かべていたが、ノヴェラの

腰を抱いた仮面の男マスケリーノを見たとたん、笑うのをやめてしまった。

「獣のような唸うなり声とともに飛び掛かってきたんだ。ところがそうはいかない、傑けつ作さくな話さ」

　ガイアの蝎は、手足の関節を足して三つにしてある。フォーラは自分の四し肢しを制せい御ぎょできず、裸のまま仰あお向むけに転倒してしまった。

「美しい乳ち房ぶさや性器を晒さらした格好でじたばたともがくのさ。こんな具合にね」

　自力では起き上がれないフォーラは会場の失笑を買い、そして彼女は『恨うらみ』という感情を手に入れた。

「知っているか？　最初に作られた自動機械人形オートマタは、ほかの骨董人形アンテイークとは比較にならないほど人間に近く、主人パドローネを恨むことすらあったらしいのだ。フォーラもそこに一歩近づいたというわけだ」

　胸むな糞くその悪い話を仮面の男マスケリーノが嬉き々きとして話す。この男がフォーラに地獄を見せたのだ。テレジーナをおかしくしたのは、間違いなくこの男だ。人形の心を揺さぶるのが目的ならば、リッカルドの死などはうってつけのハプニングだろう。仮面の男マスケリーノはそれを喜んでいる。

　アレッシオはようやく思い知った。自分のボスの正体が、狂える王であったということを！

「それにくらべて……」

　仮面の男マスケリーノが続ける。

「平へい坦たんな人生を歩んできたノヴェラは、恨むという気持ちをいまだに知らない温室育ちだ。優秀なフォーラは恨みを覚えたが、残念ながら狂ってしまった。記憶がおかしいのはそのせいなのだよ。分かるかね？　自動機械人形オートマタを動かしているのは生存欲だ。追い詰められ、行き場を失った円筒シリンダの歯車は、容易に真実の楽譜スコアを書き変える。それも直さなくてはいけないのだから、骨が折れる話なのさ」

　仮面マスケラを着けることで人は別のものへと変身する。

　この男は、きらびやかな謝肉祭カルネヴアーレの仮面マスケラをかぶり、いったいどんな化け物に自分を作り変えてしまったのだろう。

「ボス、あなたは『アクタイオンの猟犬』を作った技師と一緒だ」

「いや、そうではないぞ。彼らは表面をいじるが、私は円筒シリンダをいじるのだ。全ては究極の自動機械人形オートマタになるために行われたことなのだよ。人の魂を得るには、体内の機械を打ち消さなければならない。彼ら自身が『人形であってはいけない』と思わなければならない、分かるかアレッシオ！」

　その残ざん酷こくな実験がノヴェラとフォーラを今のような形にした。

「あの二人に行き着くまでに、いくつも壊したのだ」仮面の男マスケリーノは続ける。「技術ではないのだ。円筒シリンダの深いところを指揮棒でかき回しても、狂うか壊れるかだけなのだよ。魂は人と同じように、時をかけて練れん成せいされるものなのだ。小賢しい錬れん金きん術じゆつのみで魂を作るなど、人間への冒ぼう瀆とくに他ならない。自動機械人形オートマタは命令と感情の狭はざ間までその身をよじり、行き場のない地獄を知ることで、初めて人となれるのだよ」

「専門的なことは俺には分かりません。ですが、そうまでして人間にすることに、いったい何の意味があります？」

「それこそが真の道楽だよ、アレッシオ」

　仮面の男マスケリーノは笑う。

　嘘うその笑いでなにかを隠している。アレッシオはそう思った。

　そうでなければ最低の下げ種す野や郎ろうだ。道楽で心をここまで弄もてあそべるはずがない。

「ところがだ、ここにきてノヴェラが進しん境きよう著いちじるしいというじゃないか。弾丸パロットラに預けた甲か斐いがあったというものだ。リッカルドという少年の死に思い入れたノヴェラの話を聞いて、私はゾクゾクとした歓喜に震えたのだよ！」

　ああ、やはりそうか。アレッシオは絶望的な思いで仮面の男マスケリーノの声を聞いた。このボスは踏みにじることしか知らないのだ。

「復ふく讐しゆうは素晴らしい！」

　興奮の頂点に達し、仮面の男マスケリーノは叫んだ。

　狂える王の甲かん高だかい声が、神に祝福された聖堂の中に響く。

「私はノヴェラを味わいたくなった。近々、兄妹を返してもらうことにするよ」

xvi

鞄かばんには四つのものが入っていた。

バンドネオン。

衣装。

筆記用具。

銀の仮面マスケラ。

雨は午前七時十六分から降り始めた。

銀の仮面はこの手の中にある。

魂という怪物を僕はまだ見たことがない。

リッカルドが死んでも、涙はついに溢あふれなかった。

スラムに降る雨の音を聞きながら、僕は鏡の前にいる。

三階の窓から吹き込む隙すき間ま風かぜが前髪を揺らしている。

フォーラは後ろの椅い子すで髪の毛を梳とかしている。

リッカルドはもういない。

僕は指先で鏡面をなぞる。

鏡は悪魔デイアボロの正体を映し出すことができる。

鏡は真実を映し出す。

つまり真実の左右は逆転しているのだ。

それが人間なら、心臓が右側について、右脳と左脳が入れ替わる。

僕はどうだろう？

自動機械人形オートマタの円筒シリンダは身体の中心にある。

左右対称の身体。

真実の僕と、現実の僕に違いはない。

だから。

だから涙が出てこなかったのだろうか。

だから僕は泣くことができなかったのだろうか。

鏡を見る。

なぜだろう。

そこにあるのは僕の顔じゃない。

いま、緑柱石スメラルドの瞳に何が映っている？

雨は止まない。

鏡を見つめる。

君は誰？

僕の知らない顔がそこにあった。

そこに立っているのは誰？

魂という怪物を僕はまだ見たことがない。

けれど僕はこの顔を知っている。

この表情を知っている。

円筒シリンダの記憶が一千日以上の時を遡さかのぼる。

仮面の男マスケリーノの車くるま椅い子すを押して歩いた、ヴェネツィアの裏町。

あの日、雨は今日と同じように降っていた。

あの日、暗い地下室で僕はフォーラと再会した。

あの日、フォーラの円筒シリンダは壊れてしまった。

古いビルの地下。

人々の声。

喝かつ采さい、嘲ちよう笑しよう、罵ば倒とう、そして拍手の音。

見世物が次々に姿を現す。

そこにいたのはガイアの蝎さそり。

そこにいたのはフォーラだった。

僕を見て、フォーラの笑顔が凍った。

僕を見て、その美しい顔が醜みにくく歪ゆがんだ。

僕は美しい服を着て、仮面の男マスケリーノに腰を抱かれていた。

フォーラは蝎になって、好奇の渦うずの真ん中に這はいつくばっていた。

──これは、ガイアの蝎だ！

見世物小屋で見たフォーラの顔が、鏡に映っている。

君は誰？

そこに立っているのは誰？

鏡の中からそいつが言う。

左右対称の真実の唇を動かして言う。

君は誰？

そうだ、君は僕だ。

醜く歪んだ顔は僕の顔だ。

ぎらぎらと光る緑柱石スメラルドは僕の瞳石ジエンマだ。

歯車の軋む音がする。

魂という怪物を僕はまだ見たことがない。

初めて見たのかもしれない。

銀の仮面マスケラはこの手の中にある。

僕は、僕の顔を隠さなければいけない。

憎しみを呼び込む、醜く歪んだ顔を。

早く隠せ。

隠せ！

光が翳かげる。

銀の仮面が視界を塞ふさぐ。

射ぬ干ば玉たまの闇が僕を塗り潰つぶす。

僕が黒く塗り潰される──。

雨はまだ降り続いている。

ノヴェラは目を開いた

緑柱石スメラルドの瞳石ジエンマが像を結ぶ。

鏡の中に、仮面の男マスケリーノがいた。

xvii

「……それで？」

「それでこの話は終わりだよ」

ペトルチアーニは丸焼きの鶏とり肉にくを解体して腿もも肉にくにかぶりついた。

ペルラは微動だにせずその様子を眺めている。

「つまり結論はこうだ。私は円筒シリンダに負荷をかけることで、魂を持たぬ自動機械人形オートマタに恨うらみを植えつけることには成功したのだよ！　千年の偉業とは思わないかね。私はもう彼らに会うのが待ち遠しくて仕方がない」

ペトルチアーニは皿を重ね、今度は貝のスープに手を伸ばした。

ペルラは微動だにせずその様子を眺めている。

「そしてノヴェラは復ふく讐しゆうを果たすのさ、素晴らしい復讐の物語をね。まったく羨うらやましいよ」

「自覚的に果たされない復讐は、復讐と呼ぶに値するでしょうか」

「なかなか面白い解釈だ。だがノヴェラは自覚しているよ。決して癒えることのない恨みつらみを、瘡かさ蓋ぶたを剝はがしたときのジクジクした痛つう痒ようをね。それが真実さ。なぜなら私がそうだからだよ……例えばほら！」

ペトルチアーニは銀フォークをテーブルに突き立てた。

カチリと留め具の外れる音がして、床下の発条バネが激しく収縮す

る。高速で歯車ギアが回転し、ペルラの座った椅い子すの背から、鋼鉄の鉤かぎ爪づめが三つ飛び出した。

　左右の肩けん甲こう骨こつの下、そして腰のくびれにガチリと食い込む。

「……！」

　ペルラは動けなくなった。背面にある三箇所の歯車ギアが鉤爪に固定され、全身の鉄線が同時に張りつめる。

「君は姿勢がいい。いつだって背筋をピンと伸ばして、座る位置を一ミリも狂わさない。見事なものさ。だから仕掛けを作るのも容易だったのだよ」

　甲かん高だかい声で笑ったペトルチアーニは、椅い子すから滑り落ちるとテーブルの下に潜り込んだ。太った猫のように絨じゆう毯たんの上を這はいずって、ペルラの足元にたどり着く。その美しい足首にしがみつき、テーブルクロスの下から顔を出した。

「銀の城はからくり屋敷さ。どうかね、こういった趣向は？」

「貴方あなたが面白い人間であることは認めましょう。ですがいささか常じよう軌きを逸いつしています」

「君に言われたくはないよ、ペルラ君。君の麗うるわしく歪んだ魂は絶品だというのに」

　ペルラは懐中時計サポネツタを手にしたままの格好で固まっている。

　ペトルチアーニは舌なめずりをした。

「本物の恐怖とは想像力だ。君はそいつを引き出して楽しむのが好きだね」

「貴方にそれは通じないと？」

「そうとも、残念ながら私の恐怖はただ一つ、この胸の悲願を果たせぬまま命を奪われることだ。そしてそれは、君の主人パドローネの利害とも一致している。だから私は君を恐れないのだよ、可愛かわいいペルラ」

「そのように私を呼ぶことを許しません」

「いいや、私にはその資格がある」

「はっきり申し上げておきます。貴方は狼に怯おびえて無様に隠れ暮らす魂の出で来き損そこないで、ぶよぶよの糞くそ虫むしの身体に手足をこじつけた化け物の失敗作です。汚お水すいに涌わいた蛆うじにも劣る分際で少しでも僭せん越えつなふるまいをすれば、誰よりも無む残ざんな死が訪れるでしょう」

「怒った君は最高だ。どうして私が君の体内の秘密を知りえたか、不思議ではないかね？」

　ペルラは口を閉じた。太ふと腿ももの間のペトルチアーニがかさにかかる。

「それでは私もひとつ、恐怖というものを操ってみよう」

　ペトルチアーニは銀の指揮棒バツケツタを取り出した。それをスカートに突っ込んで、恥ち骨こつの辺りを二、三度強く押し込んだ。たちまち、緊張しきっていたペルラの両足が持ち上がってゆく。

「これは……」

　スカートの中で指揮棒バツケツタが踊る。靴くつが椅い子すの上に乗り、両脚がＭの字に広げられた。

「私はペルラと仲良くしたい。だから君を必要以上に辱はずかしめることはしない。壊すことはいつでもできるが、君には私を守ってもらわねばならないからね」

「……この手品も、カリオストロの遺い稿こうですか」

「愚かなことを言うな！」

　叫びとともに、ペトルチアーニの指揮棒バツケツタがペルラの中心にめり込んだ。肉を押し込み、先端が身体の中に入ってくる。

「あんなペテン師の落書きに、このような叡えい智ちが宿るわけがない。私は知っているのだ、なにもかも知っているのだよ！」

　ペトルチアーニの指が椅子の底に伸びる。カチリ。振動と同時に、ペルラの動きを封じていた鉤かぎ爪づめが背もたれに吸い込まれた。人形の四し肢しに力が戻り、懐中時計サポネツタが回転を始める。

「何をしたか答えなさい」

　ペルラは太ふと腿ももの間のペトルチアーニの襟えり首くびを締め上げた。テーブルの下から引きずり出し、絨じゆう毯たんの上へ投げ飛ばす。ぼてぼてと転がったペトルチアーニが仮面マスケラの下で笑っている。

「そうだ怒りたまえ、君は怯え、そして怒っている。ペルラだ、それでこそペルラだよ！」

　哄こう笑しよう。そして絨毯の上を這い回る。

「生命機能を損なわない程度に切り刻むのは容易です。それを教えてあげましょう」

「私の作った懐中時計サポネツタでかね？」

「……！」

　人形の表情がこわばるのをペトルチアーニは見逃さなかった。

「貴方あなたは……不思議な人ですね」

「人形も焦あせるのか。それともまた怖くなったか」

「貴方は……不思議です」

「そうともペルラ、ここにいるのは謎なぞの仮面の男マスケリーノだ。だが君にだけは教えてやる。仮面マスケラの奥の瞳をもっとよく見たまえ、よもや見覚えがないとは言わせないぞ」

「貴方は……」

「我が名はジャケ・ドロー、誰より君を愛する男だ」

　真しん珠じゆの瞳が驚きに見開く。

　無防備に晒さらされたペルラの素顔を、ペトルチアーニは目で犯した。

　食事を再開したペトルチアーニが銀の皿を次々と平らげる。

　ペルラは真珠の瞳でその姿をじっと見つめている。

「君の言葉で、教きよう煌こう庁ちようの連中を仰ぎよう天てんさせてやるかね？」

「うわ言の類たぐいは報告いたしません。ジャケ・ドローは十八世紀の人物です」

「信じるかどうかは君の自由だよ。私はただ、可愛かわいいペルラの怯える顔を見たかっただけだ」

「驚くことはあっても、怯えることはありません」

「そういうものかねえ」

「そういうものです」

「信じるかどうかは私の自由というわけか」

　ペトルチアーニが笑う。

　ペルラは答えるかわりに懐中時計サポネツタの文字盤を見た。

「もうじき時がきます」

「お帰りかね、それは残念だ」

「違います。時が満ちれば兄妹は目覚めるでしょう。その時が迫っていると言いました」

「それは興味深いね、どのような時が迫っている？」

　ペトルチアーニは身を乗り出した。

　空気の温度が変わったのにこの半分機械ハーフマタ人形は気づいていない。

　ペルラは口だけで微笑ほほえんだ。

「貴方のよく知っている、御お伽とぎの世界の始まる時です」

「ペルラ、それは……」

「御伽の世界の扉が開く時、貴方の作り上げた不安定なものは全て破壊されるでしょう」

　ぱちり。

　懐中時計サポネツタを閉じると、男の巨体が身じろいだ。

　銀の仮面マスケラの奥で、ペトルチアーニの瞳に怯えの色が兆している。

「ですから私どもは、今のうちにカリオストロの遺い稿こうについてお伺いしたいのです。それができなくなる前に」

「待ってくれ、それが本当ならお遊びではすまされない」

「ええ、お遊びではありません」

　ペトルチアーニが顫ふるえる

ペルラは笑った。

「御伽話は残ざん酷こくです」

笑って、そして、肥満した男の慌あわてる様をうっとりと眺めた。

「そう……とても残酷なものなのです」

xviii

その夜、ベルモント郊外の別荘地で、ある家族が死に絶えた。

市警察の発表によると、犯人は複数。

現場となった別荘は窓が残らず割られ、銃弾があちこちの壁にめり込んでいた。

凄せい惨さんな状況から、快楽殺人の可能性が高いという。

一家の主、アントニオ・ベルッチは、寝室でバラバラの肉片となって発見された。

妻のラウラは廊下で倒れていたが、乳ち房ぶさと陰いん部ぶを鋭い刃物でえぐられていた。

一人娘のクラウディアは、血まみれの毛布を残して行方不明になった。

屋敷のあちこちで、護衛と思われる十人分の遺体が発見されたが、どれも損傷が激しく、身元の割り出しは困難を極めた。

「麗うるわしきベルモントよ、夜明けまでにいくつの命をご所しょ望もうか」

「なんだい、そいつぁ？」

「適当だ。昔から言うだろう、この町は人喰いだということさ」

「人喰い？　そりゃあんたのことだろーが」

「本当の人喰いは人間という動物だ。我々のしていることは、さしづめ……」

「なんだ？　このエキサイティングでハッピーなパーティーを、なんて言やあいい」

「私の口から言うまでもない」

「いや、教えて欲しいね。いったいなんて言うんだい」

「簡単なことさ……復ふく讐しゆうだ」

　血まみれの口を拭ぬぐって狼が笑う。

　ここは御お伽とぎの国、ベルモント。

　彼らの眼下には、煌きら々きらとした夜景が宝石のように広がっている。

[解 descrizione 説]

下倉バイオ

（ニトロプラス）

　本作品は二〇〇七年一月二六日、ニトロプラスより発売された一八禁ＰＣゲームのノベライズ作品である。

　とてっきり思っていたものだから、一番最初に送られてきたプロットを読んだ原作シナリオライター下倉は凄すさまじい勢いでイスから転げ落ちた。

　知っている名前がなかった。

　ゲーム版のキャラクターが、一向に、出てこない。主要キャラは全て小説版のオリジナルで、唯一出てくるのがマフィアの副頭領「シルヴィオ」。しかも「刺客を送る」とか明らかに本筋からは離れたポジションにいるだけだった。

　作者Ｊ□さいろー氏は正気か？　と思った。（あと、ガガガ編集部も大丈夫なのか）

　後に顔を合わせたとき、ニコニコ笑顔のさいろー氏に「ゲーム版でキャラがあそこまで立ってると、なかなか扱いづらくて」と弁解されたような記憶はあるのだが、しかし既に本編をお読み下さった皆さんはおわかりだろう、本小説内ではゲーム版のキャラだって十分以上に動いている。というかある意味ゲーム版よりもインモラルだったりエロスだったりするのはとてもけしからないと切に思う。ぜひもっとやってください。



PCゲーム『月光のカルネヴァーレ』
(2007年/ニトロプラス)定価:9240円(税込)※18歳未満購入禁止

　しかしそれではなぜ、さいろー氏は本編のキャラをメインに据えず、オリジナルキャラでオリジナルのストーリーを紡いだのか？

　ゲーム版「月光のカルネヴァーレ」は、一言で言えば人狼と人形の物語である。

　血と暴力で繋つながれた人狼マフィア「オルマ・ロッサ」と、それに対抗すべく創られた錬金術人形の聖部隊「鳥兜ハバーリヤ」。両組織が激しく火花を散らす中、組織から逃げ出したはぐれ狼ロメオが、古都ベルモントで記憶喪失の自動機械人形オートマタアンナを拾う。ロメオは狼である自らの宿命と向き合いながら、真の安息の地──家族を守るため、再びその血塗られた鉤爪を振るうことになる。人狼と人形、美女と野獣の抗争と悲劇こそが、ゲーム版の肝だった。

　しかし、小説版である「白銀のカリアティード」は、全く趣を異とする。

　本作品には、満月に猛たけり手当たり次第人間を虐殺する獣は出てこないし、全身から白銀の刃を生やして魔を切り裂く人形も出てこない（少なくとも今のところは）。出てくるのは、射撃の腕には自負を持つが出世に縁のない犯罪者、彼に面倒を見られている少年ギャング団の半人前たち、そして素直で従順な男娼だんしょうと我わが儘までで記憶の混乱した少女の双子人形、だ。だから当然、描かれるのは闇に棲すまう人外たちの人知を越えたバトル──では、ない（少なくとも今のところは）。

　けれどもそれこそが、小説版の狙いであり、それがまたオリジナルな面白さになっている。『白銀のカリアティード』は単なるノベライズではなく、〝新しい〟「月光のカルネヴァーレ」なのである。

　基本的に、執筆は孤独な作業である。ゲーム版「月光のカルネヴァーレ」のシナリオを全てひとりで書いたこともあり、作品を思ってもみない切り口で描かれるのは、非常に新鮮で創造的な体験だった。いちクリエイターとして「この手できたか！」と驚いたり、対抗心に駆られたり、ということが全くなかったわけではない。

　けれどもまあ、身構えるのももったいない読み方だ。とりあえず難しいことは抜きにして、フォーラの話に身を任せよう。いまはただ、ひとりの聞き手となって、魔法物語アイアーバの続きを楽しみに待っている。

[後 poscritto 書]

J□さいろー

ベルモントの人口は四十万人。

対して自動機械人形オートマタはたったの二千体。

ＰＣゲーム「月光のカルネヴァーレ」の本編は、この印象的なフレーズから紡ぎ出されてゆきます。

本書は、この世界の圧倒的大多数を占める人間の側から、自動機械人形と人狼マフィアの争う黒く魅力的なベルモントをとらえようとするものです。

人の写し身として不完全な魂を持ち、自ら音楽を生み出すことのできない自動機械人形たち。

一方で彼女たちの持ちえぬ魂を宿した人間は、再生能力も修理による復活もなく、ただ日々を生きるだけのか弱い存在です。その皮肉な関係性が自動機械人形に生き生きとした輪郭を与えていることをゲームから強く感じ、思い切った構成の外伝を執筆させていただきました。

二月の上旬にこのお話をいただいてからというもの、本編の膨大な情報と資料の山と格闘し、時に方向性を見失いそうになることもありましたが、本当に多くの方に助けていただきました。

この華麗なる世界の生みの親であり、折に触れて内容のチェックと親身なアドバイスをしてくださいました下倉バイオさん、好きにやってくださいと太っ腹な貫禄を見せていただきましたニトロ君さん、お仕事のきっかけをいただきました荒川工さん、銃器車両関係の助言をいただきました草野紅壱さん、際の際まで物語を突き詰めるべく共闘してくださいました編集者の望月氏、そして「月光のカルネヴァーレ」という壮大な世界を作り上げられたニトロプラススタッフの皆様、ゲーム製作に関わられたあらゆる人々に、この場を借りて感謝の意を記させていただきます。

そして何よりも、執筆側の無茶な要求にも関わらずアレッシオやフォーラたちに魅力的な容姿を与え、美しいビジュアルで本書を彩ってくださいました大崎シンヤさんに、格別の謝意を述べさせていただきます。小説の世界に深く身を浸しながら執筆することができましたのは、折々に送られてくる数々の素敵なイラストがあればこそでした。

　人間と人形と人狼の物語は、血塗られた後半戦へと向かう折り返し地点にあります。願わくば結末までお付き合いいただけますことを。そして原作ゲームに触れていない方がもしいらっしゃいましたら、これを機会に、月夜に人狼と人形の踊る素晴らしきゴシックワールドを体験していただけることを願って止みません。

Ｊ□さいろー

J.Sairo

本文担当。

小学館ｅＢｏｏｋｓ

月光のカルネヴァーレ

～白銀のカリアティード～Ⅰ

２０１５年10月９日　電子書籍版発行

者　Ｊ□さいろー

作　ニトロプラス

行人　立川義剛

集人　野村敦司

集　望月充

行所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２００７年５月29日　初版第１刷発行

©J.Sairo 2015 ©2015 Nitroplus　ISBN978-4-09-451010-2